*0050206000*

0050206-000

特２０５－４５４

# 読本指導と朗読法

東京朗読研究会・編

成美堂

巻１２

昭和１４

AHJ

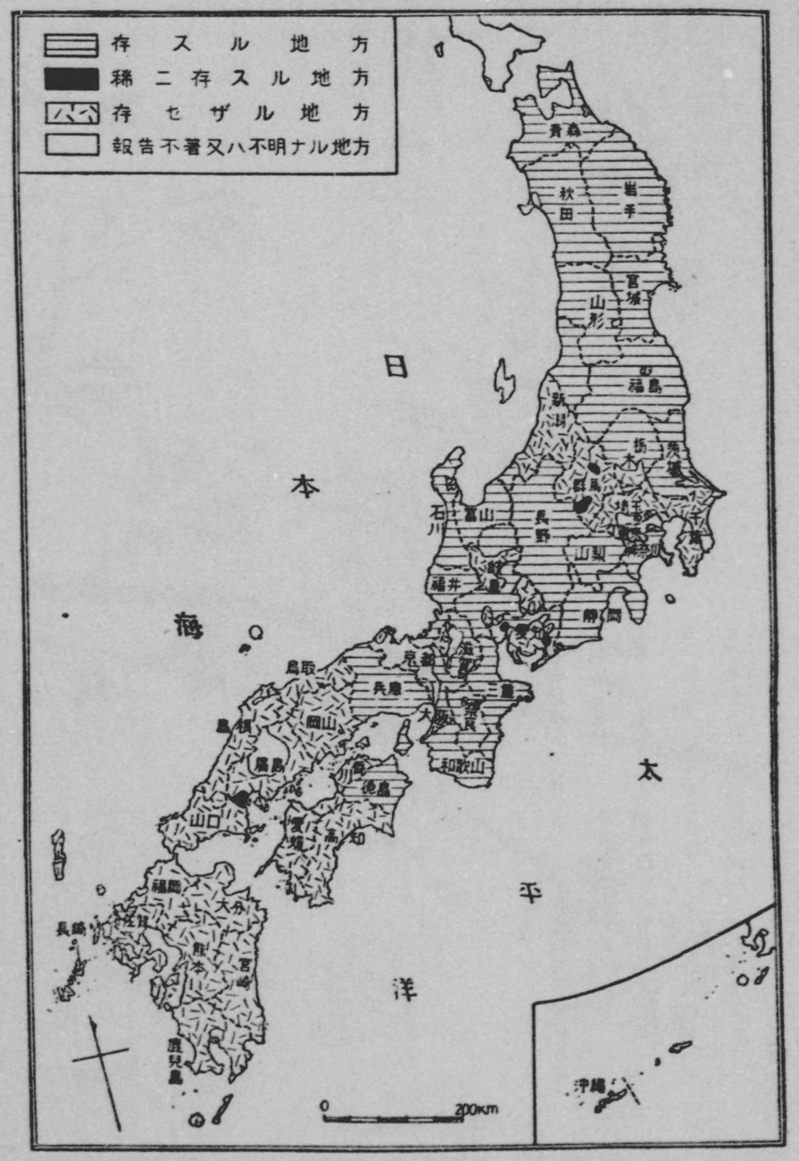
特205
454

東京朗讀研究會編

# 讀本指導と朗讀法 卷十二

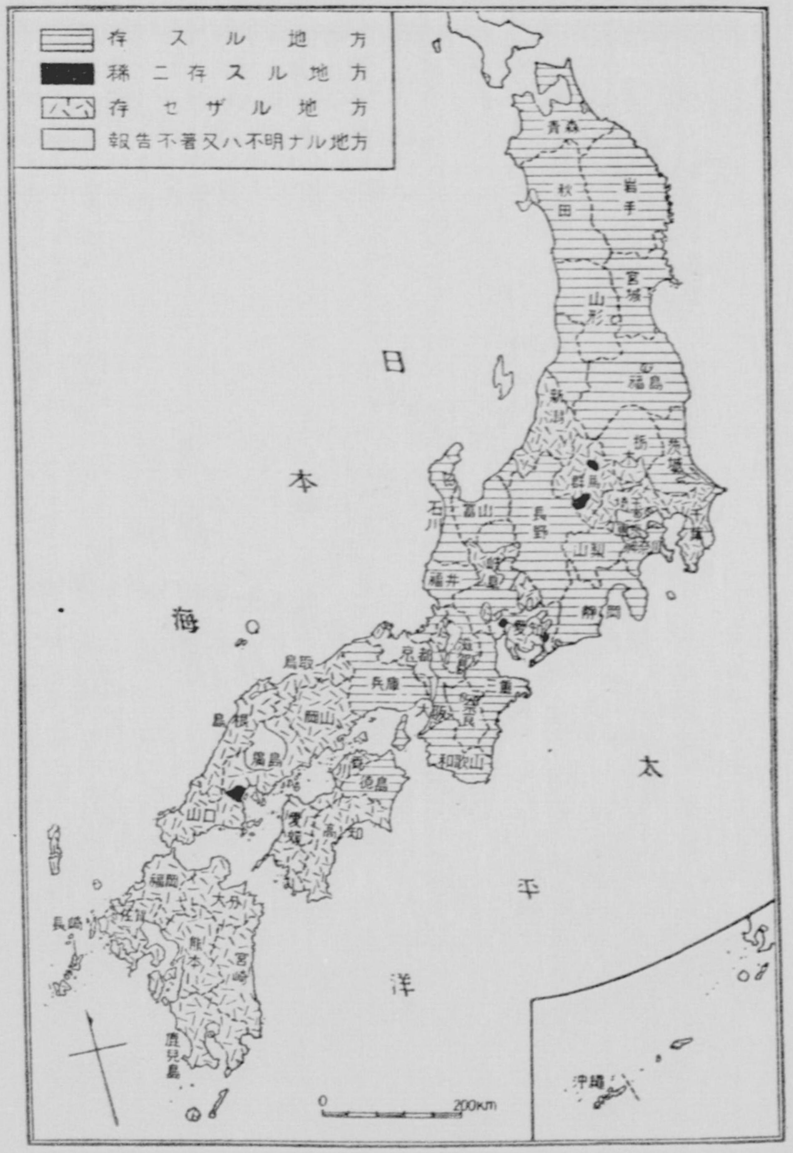
成美堂版

## 「ガ」行鼻音NG分布圖



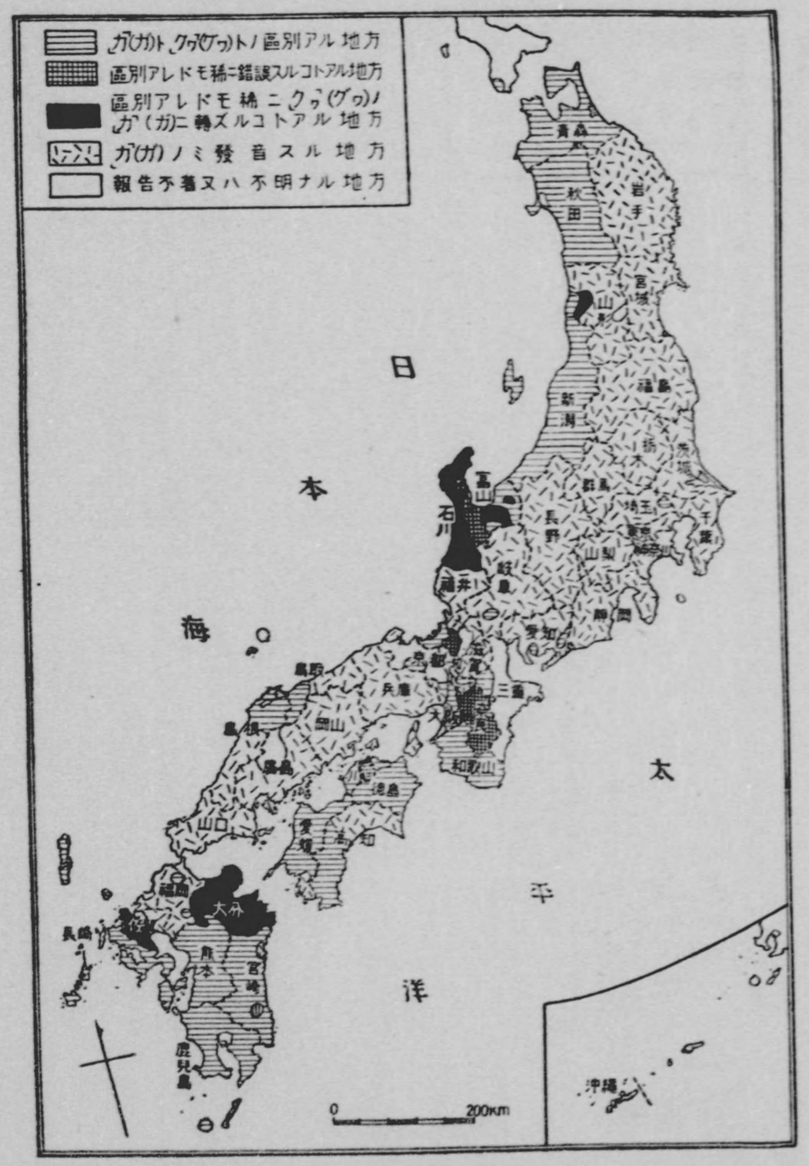

文部省國語調査委員會の音韻調査報告書附圖音韻分布圖（明治三十八年文部省發行）による。この調査は文學博士上田萬年氏が主任で、新村出氏、亀田次郎氏、柳原淑雄氏等によつて、全國各地の音韻を調査し、その結果を纏められたものである。

## 「ガ」行鼻音NG分布圖




文部省國語調査委員會の音韻調査報告書附圖音韻分布圖（明治三十八年文部省發行）による。この調査は文學博士上田萬年氏が主任で、新村出氏、亀田次郎氏、榊原淑雄氏等によつて、全國各地の音韻を調査し、その結果を纒められたものである。

## 「カ」「クヮ」分布圖



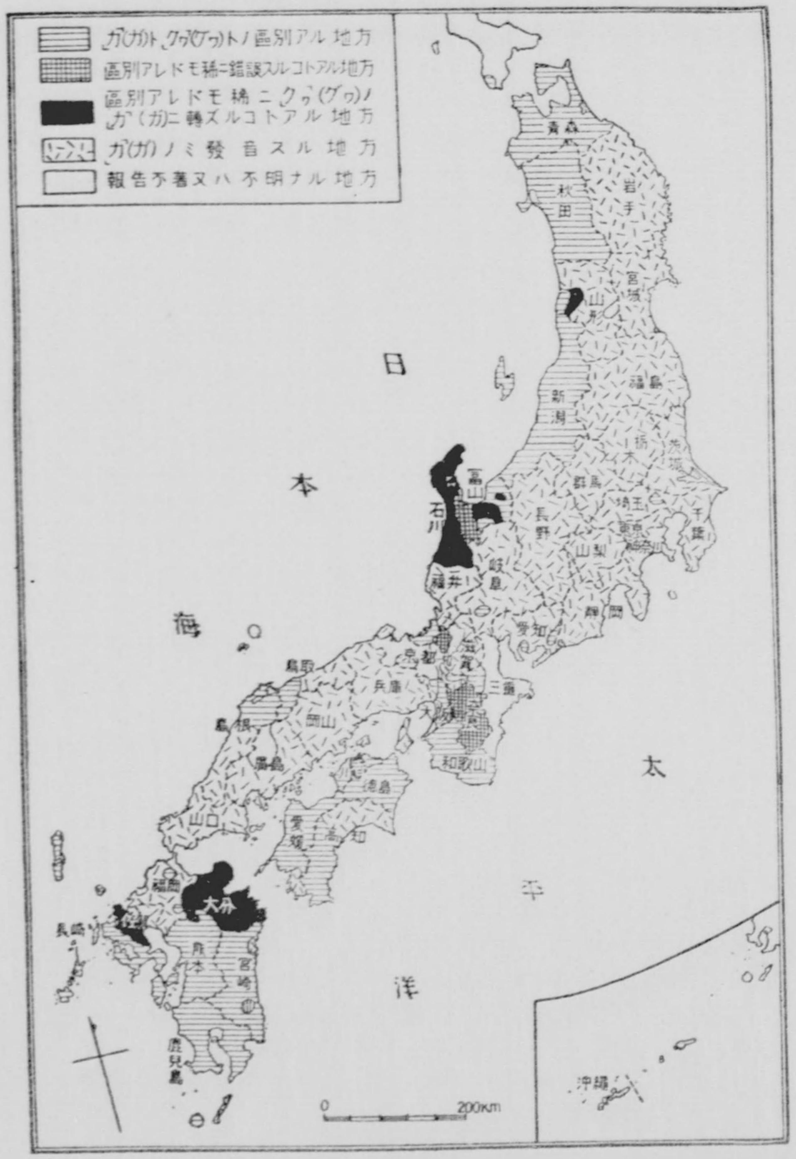

# はしがき

國語の本質とその使命とに基いて、最近の國語教育は研究に實踐に著しい進歩を示してゐる。殊に新に編纂せられた小學國語讀本が、兒童の心理と生活とに即することを本體として、兒童語・生活語を重んじ、言語陶冶と讀解力の修練とを通して兒童の心情を純化し、日本精神を涵養しようといふ趣旨であるために、讀方がその正しい意味によつて取扱はれるやうになつて來たことは、誠に喜ばしい事である。

東京朗讀研究會は、かうした時代の進運に從つて、國語教育の進展と讀本指導の徹底とを圖る上に微力を盡したいといふ希望から、教材の研究と指導の要諦及び標準語としての正しい國語、國語讀本の文を如實に標準語化した正しい朗讀法の研究を目的として、志を同じうする會員が相集り、東京市の國語教育を外にしてはこのことの容易に企及すべからざるを自覺して、一致協力、その調査研究に眞摯な努力を續けて來たが、こゝに漸くこれならばと思はれる一定の規準を得たので、この研究の所產を發表して敢へて世の實際家に問ふことになつた次第である。

この發表については、平素の吾々の實踐に省みて、教材の要旨、指導觀、朗讀の姿と心、その注意、指導概要等を詳述して、實踐指導に關する正しい態度を示すことに力めた。これは現今の一般國語教育界の要求に對して、一層有意義なることと信ずる。教材の討究研讀を經て朗讀にもとづく讀方の要諦を明らかにし、以て指導の指針たらしめたこの擧によつて會員一同は今後の國語教育の上に得る所が多かつたことを私かに喜びとしてゐる。

「カ」「クヮ」分布圖




# はしがき

國語の本質とその使命とに基いて、最近の國語教育は研究に實踐に著しい進歩を示してゐる。殊に新に編纂せられた小學國語讀本が、兒童の心理と生活とに即することを本體として、兒童語・生活語を重んじ、言語陶冶と讀解力の修練とを通して兒童の心情を純化し、日本精神を涵養しようといふ趣旨であるために、讀方がその正しい意味によつて取扱はれるやうになつて來たことは、誠に喜ばしい事である。

東京朗讀研究會は、かうした時代の進運に從つて、國語教育の進展と讀本指導の徹底とを圖る上に微力を盡したいといふ希望から、教材の研究と指導の要諦及び標準語としての正しい國語、國語讀本の文を如實に標準語化した正しい朗讀法の研究を目的として、志を同じうする會員が相集り、東京市の國語教育を外にしてはこのことの容易に企及すべからざるを自覺して、一致協力、その調査研究に眞摯な努力を續けて來たが、こゝに漸くこれならばと思はれる一定の規準を得たので、この研究の所産を發表して敢へて世の實際家に問ふことになつた次第である。

この發表については、平素の吾々の實踐に省みて、教材の要旨、指導觀、朗讀の姿と心、その注意、指導概要等を詳述して、實踐指導に關する正しい態度を示すことに力めた。これは現今の一般國語教育界の要求に對して、一層有意義なることと信ずる。教材の討究研讃を經て朗讀にもとづく讀方の要諦を明らかにし、以て指導の指針たらしめたこの擧によつて會員一同は今後の國語教育の上に得る所が多かつたことを私かに喜びとしてゐる。

本書は固より研究の途上にある本會の一報告書ともいふべきものであつて、これを以て最善と自負するものではない。世の識者の叱正を仰ぎこれが完成を期すべきことを念願して止まない。たゞ本書によつて幾分なりと國語教育に貢献し、延いては標準語の確立普及と國語の純化統一とに寄與することを得るならばまことに望外の幸である。

昭和十四年四月

東京朗讀研究會

東京市社會教育課長　藤野重次郎
前東京市視學　五味義武
東京市視學　安西國太郎
東京市黒門尋常小學校長　木住野龜之介
東京市赤羽尋常小學校長　江藤俊明
東京市鶴卷尋常小學校訓導　工藤隆義
東京市清島尋常高等小學校訓導　森廣
東京市櫻田尋常小學校訓導　久米井東
東京市高輪臺尋常小學校訓導　中村仁
東京市南櫻尋常小學校訓導　山本壽勇
東京市林町尋常小學校訓導　小川一郎
東京市四谷第一尋常小學校訓導　山本利一
東京一橋高等小學校訓導

# 凡例

## 一　要旨

教材の内容及び表現の讀解玩味を通して、兒童の智能を啓發し思想感情を豐かに培ひ、國語の教養と國民的精神の涵養陶冶に資すべき要旨を、簡潔に、明確に述べることを主眼とした。教材の客觀的要旨よりも實際指導上の目的要旨に力を注ぐといふ方針である。

## 二　指導觀

指導者が、該教材の學習を指導する上の心構について記した。教壇に立つ前に教師が先づ自分の腹をしつかりと決めてかゝらなければ、讀解指導の徹底は期し難い。素材の研究や、文意要旨の把捉に於て、文の構成、表現技法の觀察及び文字と語句の吟味、特に主想を表現する中心語句の觀方等について、指導上最も力を注ぐべき要點を擧げることにした。指導觀に於て特に留意したことは、部分と全文とを融合統一した觀點に立つて、語句節意等の吟味とともに文を一貫した想の流れに沿うて、教材の表現する一つのまとまつた思想感情をはつきりととらへることである。

## 三　朗讀

この欄は上段に讀本の本文を表し、その本文に對照して、その上に讀本の頁、下段に朗讀上の注意を示すことにしてある。本文は全部片假名を以て表記し、これに各種の符號を附けて、出來る限り、現代東京に於て最も廣く使用されて居る言葉の姿をあらはすやうにすると共に、文の意味や、味ひをよくあらはすことに力めた。アクセント等に疑問のあるものは、市内數千の兒童とその家庭の實際を調査して、多いのに從ふことにした。又下段には、符號の及ばない朗讀上の注意や、同音語アクセントの參考事項等を掲げておいた。

次に本書の符號及び朗讀上注意した事項について略説する。

### (一)　發音

本文は片假名を發音符號として、成るべく日常の言語に近く表記することにつとめた。なほ發音上、次のやうな特殊の符號を用ひてある。

(イ)　カ行濁音の中、通鼻音(ŋg)を子音とするものは、ガギグゲゴとした。

(ロ)　イとキ、エとエ、オとヲ、カとクヮ、ガとグヮ、ジとヂ及びそれを含む拗音、ズとヅ等は、東京語ではそれ〳〵區別をしないで、初に書いた文字の音の型に發音してゐるから、本書もこれによつた。

(ハ)　馬・梅・生まれる等の語は、それ〳〵 mma, mme, mmareru の如く發音するので、ンマ・ンメ・ンマレルといふやうに表記した。

(ニ)　長音・拗長音及び重母音は、棒引法で次の如くあらはした。

〔例〕　やうに＝ヨーニ　正月＝ショーガツ　かはいらしい＝カワイラシー

(ホ)　eの母音の次にiの母音が續く場合、日常屢〻用ひられる言語では、eの長母音の如く發音するので、これによつてゐる。

〔例〕　時計＝トケー　兵隊＝ヘータイ

(ヘ)　捉音・拗音及び拗長音は次の表記法による。

〔例〕　行つて＝イッテ　去年＝キョネン　牧場＝ボクジョー

(ト)　母音は無聲子音に挾まれてゐる場合等には無聲化することがある。この場合には、母音の無聲化する字の左に黒點(・)を附してあらはす。但し特に發音をはつきりさせるために無聲化しない方がよい場合には黒點を省いてある。

〔例〕　父＝チチ　聞きつけて＝キキツケテ

### (二)　アクセント

アクセントは聲の高低の關係である。本書は各單語(名詞にテニヲハの附いたもの及び、助詞に動詞や助動詞のついたものも一單語とみる)について、各音節間の高低關係を調べ、他の音節よりも比較的高い聲で發音する文字の右側に縱線を施し、各音節間に著しい高低を附けずに發音する語はそのまゝにおくことにした。前者は起伏式、後者は平板式である。

〔例〕　起伏式　ヤマ(山)　タカイ(高い)　コダカイ(小高い)

　　平板式　トリ(鳥)　スズメ(雀)

なほ日常二つの單語を連續していふ場合には、別々にいふ場合と異なる型にいふ現象がある。例へば　カヨッテ、

イマス（通つて居ます）は、特にイマスの意味を強める場合の外は、カヨッテ イマスといふ型になり、ミテ イマス（見て居ます）は、特にイマスの意味を強める場合の外は、イマスのアクセントが餘り高くならないのが普通である。これは場合によつて異なるものではあるけれども、本書は實際朗讀上の便宜を慮つて、總べて續けたために變つた方の型を本文にあらはし、もとの單語の型は朗讀上の注意の段に附記しておいた。

**（三）聲の切り方**

文章の意味や感じをよくあらはすことを主とし、更に兒童の息の續く程度も考慮して、左の符號によつて表記した。

、　聲を切るしるし。

、、　稍間をおくしるし。

、、、暫く休止するしるし。

、　人の言葉の終りの「と」に續く所等の如く、原則としては上の語に續ける筈であるが、一寸聲を切るやうな所のしるし。

**（四）聲の強め方**

特に強めて讀みたい言葉には右側に曲線（～～～～）を施し、なほ文として強めて讀みたい所は、それ〴〵下段に注意を記しておいた。

**（五）調子の上げ下げ**

人の言葉で語尾を上げるのを「上り調子」、語尾を下げるのを「下り調子」と名づけ、それ〴〵下の段に記しておいた。なほ文として、聲を或は高く、或は低く讀むべき所も、それ〴〵下段に記しておいた。

**（六）速　さ**

これも特に速く讀むべき所や、ゆつくり讀むべき所は、下段に記しておいた。何の注意もない所は普通の速さで讀んでよい所である。

## 一　指導概要

(1)教材の要旨を徹底させるために、指導觀に即し、兒童とその環境とを考慮して、指導の實際に對する用意、更にその指導方法の具體的な問題について必要な注意を記した。

(2)「教材」の項には、主として、文字、語句、文章及び言語修練等の、指導上の實際的事項を述べた。たゞ文字については、特に注意を要するもの、或は極めて輕い注意によつて、傳達受容の能率に大きな差等を生ずるやうな特殊なものゝみを拾ひ、語句は文章讀解上重要なもの、中心語句として重要なもの及び新出の難解なものゝみを擧げた。

(3)「挿畫」の項には、挿畫と本文との關係、挿畫の觀察法、利用法について述べた。

(4)「準備」の項には、實際指導に必要な準備の一切を網羅し列記した。

## 二　參　考

主として教材の原據、指導者の閲讀すべき參考書名、或は素材方面で、特に必要だと思はれる事項を研究して出來るだけ簡單にその要點を掲げた。

# 目錄


第一　玉のひゞき……一
第二　出雲大社……九
第三　古代の遺物……十八
第四　支那の印象……二十九
第五　孔子と顏回……四十八
第六　西山莊の秋……六十七
第七　鎌　倉……七十四
第八　黃瀨川の對面……八十二
第九　末廣がり……八十九
第十　姫路城……百　二
第十一　鳥居勝商……百十四
第十二　初冬二題……百二十二
第十三　機械化部隊……百　三　十
第十四　ほまれの記章……百四十一
第十五　萬葉集……百五十七
第十六　奈　良……百七十三
第十七　修行者と羅刹……百八十一
第十八　歐洲めぐり……百九十六
第十九　リヤ王……二百　二　十
第二十　裁　判……二百四十二
第二十一　雪殘る頂……二百五十二
第二十二　太　陽……二百五十七
第二十三　關孝和……二百六十七
第二十四　白洲燈臺……二百七十八
第二十五　雪國の春……二百八十七
第二十六　靜寬院宮……二百九十七
第二十七　山ざくら花……三　百　十

# 第一　玉のひゞき

一　要旨

明治天皇の御製と、昭憲皇太后の御歌とを謹讀謹誦させて、聖德高く餘澤あまねき玉のひゞきの尊さ忝なさに感激感銘させ、至誠忠君至誠の念を愈々固くし、深く國民精神を涵養する。

二　指導觀

(一)　明治天皇の御製と昭憲皇太后の御歌とを卷十二の第一課に謹んで掲げた所以を思つて、皇恩の宏大無邊なるに深く感銘感佩させるやう、最も謹厚眞摯な精神をもつて、大御歌の中にお詠み遊ばされた深遠なる聖慮神德の尊さを十分に拜誦味讀させなければならない。

(二)　明治天皇の御製を拜誦して國民のひとしく仰ぎ奉るところは、崇高なる御神格のさながらに流露した大御心の尊さ畏さである。內容の直觀より入つて感銘深き實感に近づけ、その間に自ら形式技法を學び取るやうに指導すべきである。

(三)御製を謹んで案ずるに、

「古の」は、古聖賢の名教治績のあとを記した和漢の古典をお讀み遊ばす度に、今の御治世のことに思ひ及び給ふ大御心が拜察され、いかなる折にも、日本の國政、萬民の福祉を忘れ給はぬ叡慮の深きに感涙を覺ゆるのみ。

「あさみどり」は、天空の如く清澄快濶なる大度量の御心にてありたしとの大御歌にて、至德至善の高い御心に在しながら、なほも御德の御修養御練磨を念じさせ給ふ大御心を拜察し奉つて恐懼感激に堪へない。

「目に見えぬ」は、至誠神に通ずる、天地至妙の誠の眞理を御說き遊ばされたもの、誠こそは道德の根元である。

「さしのぼる」は、神慮靈妙、全く聖天子にしてはじめてお詠み遊ばす大御歌で、朝日の如くさわやかに心をもちたしとは、凡俗の人の思ひ及ぶところではない。誠に畏き極みである。

「あしびきの」は、洋々たる大海原の上に、山の端を出る月の壯大な眺、天も地も人も、天皇の御鴻恩御威德の深くこもる御詠の中に渾然一如の玄妙な世界を現出したる大御歌である。「あしびきの」は「山」の枕詞。

「高殿の」は、月の大御歌につゞいて、四方の櫻のさかりを高殿のすべての窓を開けさせて眺め給ふ、壯麗豪華、自然の妙趣こゝに極まれる御趣と拜される。

(四)　御歌を謹んで案ずるに、

「人知れず」は、天神地祇の靈驗あらたかなる御神威御加護をお歌ひ遊ばしたもの。

「朝ごとに」は、心の鏡を愈々美しくみがき修めんとの御心を詠じ給うた尊い御歌。

「廣前に」は、畝傍の神山に、橿原神宮の建國の偉業を仰ぎ給ふ紀元の佳節の御詠。

「大宮の」は、戰場の軍人の辛苦を偲び、深き御仁慈を垂れ給ふ有難い御心をこめさせられた御歌である。

## 三　朗讀



### 本文

ダイ　イチ。タマノ　ヒビキ。。

メージテンノー　ギョセー。。

イニシエノ。フミ　ミル　タビニ　オモーカナ。。オノガ
オサムル　クニワ　イカニト。。。
アサミドリ。スミワタリタル　オーゾラノ。ヒロキオ
オノガ　ココロトモガナ。。。
メニ　ミエヌ　カミノ　ココロニ　カヨーコソ。ヒトノ
ココロノ　マコトナリケリ。。。
サシノボル。アサヒノ　ゴトク　サワヤカニ。モタマホ
シキワ　ココロナリケリ。。。
アシビキノ　ヤマノハ　イズル　ツキカゲニ。オーウナ
第一　玉のひびき

### 朗讀上の注意

○全文を、敬虔の心を以て、ゆつくりと厳かによむがよい。
○「玉」のアクセントはタマであるが、助詞「の」が續いたため平板式になる。

〔參考〕
スム（澄む）
スミワタル（澄渡る）
カミ（神・上・加味）
カミ（紙・髮）
○「心」の第一音節のコの母音は無聲化し易いが、さうしない方がはつきりしてよい。

バラノ　ナミオ　ミルカナ。。。
タカドノノ。マドチョー　マドオ　アケサセテ。。ヨモノ
サクラノ　サカリオゾ　ミル。。。
ショーケンコータイコー　ギョカ。。
・ヒトシレズ。オモー　ココロノ　ヨシアシモ。テラシワ
クラン。アメツチノ　カミ。。。
アサゴトニ。ムコー　カガミノ　クモリナク。アラマホ
シキワ　ココロナリケリ。。。
・ヒロマエニ。タマグシ　トリテ。ウネビヤマ。タカキ
ミーツオ　アオグ　キョーカナ。。。
オーミヤノ　ヒオケノ　モトモ　サムキ　ヨニ。ミイク
サビトワ。シモヤ　フムラン。。。

〔參考〕
ナミ（波）
ナミ（並）

○「よしあし」のアクセントはヨシアシともいふ。
○「鏡」のアクセントは單獨にはカガミである。
○「あふぐ」はアウグ、オーグ等と讀んではいけない。

## 一　指導概要

### （一）教材

(1) 御製御歌は、十分に語誦するまで繰返し謹讀謹誦させ、解釋は、讀みの練習がすつかり行はれてから、先づ各首の大意を謹解させ、一首大意を會得してから、句意語意を深く探らせるやうにして進む。

(2) 語句意の解釋に伴つて、修辭上の問題や文法上の問題も取上げられるであらうが、その程度は、御製第一首の上下句、御歌第一首の下句に於ける倒置法、「もがな」の願望「けり」の詠歎の意といふやうな重要な點に止むべきで、それ以上の文法的取扱は、歌意の理解と、大御心に對する感激感銘を、直讀直解して讀み透し得るやうになつてからにしたい。歌や詩の讀解指導に當つて、詩情詩味乃至は歌にあらはされたる誠の意を探らうとせずに、形の上で、韻や語法文法に拘はりがちなのが一部の通弊である。形式内容一如の渾然たる讀解指導を行はうとするには、尋六の程度としては、本課の如き教材は、理智的解釋に先行して直觀的感銘を重んずべきである。本課に掲げられた御製の何れを拜しても、御聖德の鴻大なるに打たれないものはあるまい。國をお思ひ遊ばされる叡慮の尊さ、崇高なるが上にもなほ心をみがき清めんとの大御心の忝なさ、自然の美を讃え給ふ御德の畏さ、みな拜誦するだに尊き極みである。この詩意をよく味はせることが肝要である。

(3) 昭憲皇太后の御歌を拜誦しては、御仁慈の深く尊く、婦德の鑑と仰がれ給ふ御優しくも有難い御恩澤に、感激しないものはないであらう。

明治の大業を成就あそばされた聖帝の皇后として、慈母の如く萬民より仰ぎ奉つた昭憲皇太后の御德が、御歌を通してさながらに拜察せられ、今更の如く感銘を新たにされるのである。

前半の御製とともに、あはせ謹誦して、深く皇恩の有難さに感銘し、この國に生れたる日本人としての名譽と幸福とを自覺し、進んで聖恩に感謝し、一層盡忠報國の誠をお盡し申上げるやうに指導しなければならない。

## 三　參考

明治天皇御製

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての
　後こそきかめ朝まつりごと

おごそかにたもたざらめや神代より
　うけつぎ來たるうらやすの國

いかならむことある時もうつせみの
　人の心よゆたかならなむ

ありとある人をつどへて春ごとに
　花のうたげをひらきてしがな

あしびきの山時鳥ふた聲と
　なのらぬ心たかくもあるかな

岩がねをきりとほしても川水は
　思ふところに流れゆくらむ

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ
　歌のしらべになりもならずも

しきしまの大和心のをゝしさは
　ことある時ぞあらはれにける

萬代(よろづよ)の國のしづめと大空に
　あふぐは富士のたかねなりけり

とき遲きたがひはあれど貫ぬかぬ
　ことなきものは誠なりけり

昭憲皇太后御歌

里居せし昔は夢となりぬれど
　親のいさめは忘れざりけり

もつひとの心によりて寶とも
　あだともなるはこがねなりけり

わたのとの國てふ國の草花も
　みそののうちに匂ふ御代かな

夜ひかる玉も何せむ身をてらす
　ふみこそ人の寶なりけれ

いかさまに身はくだくともむらぎもの
　心はゆたにあるべかりけり

高山のかげをうつしてゆく水の

ひきぎにつくを心ともがな
みだるべきをりをばおきて花櫻
まづゑむほどをならひてしがな
とりどりにつくるかさしの花はあれど
匂ふ心のうるはしきかな
花の春もみぢの秋のさかづきも
ほど〳〵にこそくままほしけれ
みがかずば玉の光はいでざらむ
人の心もかくこそあるらし



# 第二　出雲大社

一　要旨

我が國最古の社たる出雲大社に參詣した紀行文を讀みとらせて、天照大神の使者建御雷命と大國主命との間に行はれた御國讓のうるはしい情景を追憶せしめ、出雲大社の尊嚴さについて知らせ、神社尊崇の念を深め、國民精神の涵養に資する。

二　指導觀

(一)　全課五頁餘、紀行文教材としてはさう長い方ではないが、その內容は、文體といひ語句といひ相當にむづかしいところがあるので、適當な補說は勿論、參考圖、參考寫眞等の準備が必要である。

(二)　文は大別して、(1)出雲大社への道筋。(2)拜殿の前にぬかづくまで。(3)出雲大社の起源——大國主命が國土を天照大神に奉つて、大神より壯大なる宮殿を造つていたゞいたこと。社殿の建築樣式の古いこと、規模の極めて大であること。(4)寶物殿の拜觀。(5)稻佐濱に至り建御雷命と大國主命が會見せられた當時の有樣をしのび奉つたこと。

(三)　その敍述は松江を出て大社驛に到る途中簸川の傳說に始まり、大社の起源、建築樣式、火きりぎね・火きりうすの話など、たくみに歷史を裏づけつゝ最後に稻佐の濱の追憶で大和民族の持つ麗しい情景と餘韻とを殘して文を結んでゐる。卽ち普通の紀行文と異なる點は古い歷史を中心として表現せんとした事で、指導上この點に特に注意しな

ければならない。

（四）語句には單に抽象的な言ひかへだけでは到底味はひ得ない獨得のものが多く、隨つてこれ等は熟讀玩味して原語のまゝその持つ味はひを會得せしむべきである。のたまはく、葦原の中つ國、申さく、我もとよりいなみ奉る心なし、すなどり、かしこし、天つ日嗣を護りまつらん等は何れも古い歴史を味はふ上に獨得なひゞきを持つ言葉である。

## 三　朗讀



### 本文

ダイ　ニ。イズモノ　オーヤシロ。

マツエオ　ハッシタル　キシャワ。フーコー　エノ　ゴトキ　シンジコノ　ホトリオ　ハシルコト　ヤク　シジップン。ヤガテ　シンカワオ　ワタリ。サラニ　ススミテ　ヒイガワノ　テッキョーニ　カカル。カタワラナル　ノ　ユーヨー、コノ　カワワ。イニシエノ　ヒノカワニシテ。カノ　オロチ　タイジノ　デンセツ　アルワ。コノカ

### 朗讀上の注意

○「畫の如き」と續けていふ時、ゴトキのアクセントはあまり高くならない。

○「をろち退治」を別々にいふ時、アクセントはオロチ　タイジとなる。



ワノ　カワカミ　ナリ。ト。

イマイチオ　スギ　タイシャエキニ　ツキヌ。テ！シャ　ジョーノ　ソトニ　イズレバ。アキバレノ　ソラワ　アクマデ　スミテ。アタタカサ　ハルノ　ゴトシ。サンケーニワ　ヨキヒ　ナリ。ナド　オモイツツ。ヒトビトノニ　マジリテ　ユケバ。オートリイ　アリテ　ワガ　ユクテニ　タツ。

ヤガテ。ウチツズク　マツナミキノ　アイダヲ　スギテ　ケーダイニ　イリ。マズ　ハイデンノ　マエニ　ヌカズク。。。

ムカシ。オークニヌシノミコト　コクドオ　ヒラキ。ヒトオ　ナツケテ。イセー　シリンニ　フルイ　タモート　キニ　アマテラスオーミカミノ　シシャ　タケミカズチノ　ミコト。コノ　チニ　キタリテ　モーシ　タモーヨー。

〔參考〕
タイジ（退治）
……タイジ（……退治）

○「あくまで」はアクマデともいふ。

○「春の如し」と續けていふ時、ゴトシのアクセントはあまり高くならない。

○拜殿の前にぬかづくで少し長い休止をおく。次は出雲大社の起源の話となるのであるから。

○「申し給ふやう」と續けていふ時タモーヨーのアクセントはあまり高くならない。

オーミカミ　ノタマワク。コノ　アシワラノ　ナカツク
ニワ。ワガ　シソンノ　オサムベキ　トコロ　ナリ。
ト。ココロヨク　コノ　クニオ　タテマツリ　タモーヤ
イカニ。。

オークニヌシノミコト　コタエテ　モーサク。
ワレ　モトヨリ　イナミ　タテマツル　ココロ　ナシ。。
ワガ　コ　コトシロヌシト　ハカリテ　コタエ　モーサ
ン。。

コノトキ　コトシロヌシノミコトワ。スナドリノ　タメ
ミオノサキト　ユー　トコロニ　イマシシガ。ツカイオ
エテ　イソギ　カエリ。チチギミニ　モーシ　タモー。。
カシコシ。オーセノ　ママ　ニ　タテマツリ　タマエ。。

ココニ　オイテ　オークニヌシノミコト。
コノ　アシワラノ　ナカツクニオ。コーソンニ　タテマ



ツリテ。トコシエニ　アマツ　ヒツギオ　マモリ　マツ
ラン。

ト　モーシテ　ウヤウヤシク　コクドオ　タテマツリ　タ
マイヌ。。オーミカミ　ソノ　マゴコロノ　アツキオ　シヨ
ーシテ。ミコトノ　タメニ　ソーダイ　ナル　キューデン
オ　ツクラシメ　タモー。。コレ　スナワチ　イズモノ　オ
ーヤシロ　ノ　キゲン　ナリ。。。

コノ　ヤシロワ　ケンチクヨーシキノ　ハナハダ　フル
キト。キボノ　ダイ　ナルトオ　モッテ　ヨニ　シラル。。
チギノ　ホトリオ　トブ　ハトノ。サナガラ　スズメノ
ゴトクニ　ミユルモ。シャデンノ　コーダイ　ナル　タメ
ナルベシ。。。

ホーモツデンニ　イリテ　ハイカンスルニ。ヒキリキネ
ヒキリウスト　ユーモノ　アリ。。フトサ　ナカユビホド

○「答へ申さん」と續けていふ時、モーサンのアクセントはあまり高くならない。

○「建築樣式」を別々にいふ時、アクセントはケンチク　ヨーシキとなる。

○「大なるとを」と續けていふ時、ナルトオのアクセントはあまり高くならない。

ナル　ホソナガキ　ボート。ハバ　ジューシゴセンチメートル。ナガサ　イチメートルバカリノ　アツイタトナリ。コノ　ボーオ　コノ　イタノ　ウエニテ。キリオモムガ　ゴトク　マワ・セバ。マサツニ　ヨリテ　ヒオ　ショーズ。コノ　ヤシロニテワ。イマモ　タイコノシタガイ。コレニ　ヨリテ　ヒオ　ツクルト　ユー。ケーダイオ　イデテ　カイガンニ　イタル。イナサノハマト　ユー　トコロ　ナリ。カノ　タケミカズチノミコトガ　オークニヌシノミコトト　カイケンシタマイシワコノ　トコロ　ナリト　ユー。オリカラ　ヒワンニ　チカズキテ。クモモ　ミズモ　コンジキニ　カガヤキ。ウツクシサ　ユーバカリ　ナシ。ナギサニ　タチテムカシオ　シノベバ。ソノカミ。コノ　トコロニ　イカメシク　ムカイアイ　タマイケン　カミガミノ　スガタ。イ

〔參考〕
ヒ（日・碑）
ヒ（火・非・比・紀）





マ　マノアタリ　ミルガ　ゴトク。ウチヨスル　ナミノオトサエ　ナニゴトオカ　カタルニ　ニタリ。。。

■指導概要

（一）教材

(1) 教材は紀行文であり、そしてこれがどこまでも古代歴史を中心とした紀行文であることを忘れてはならない。隨つて出雲附近の雲の如き風光も、その中に殘る傳説も、皆國讓りの麗しい神々の歴史を裏づけするに役立つてゐるのでこの背景を味ははせながら讀解を深めて行く。

(2) 本課は第一次に全文の通讀を行ひ先づ文意を概觀することが必要である。即ち風光畫の如き松江附近、これは現在であるが、古も定めしかくあらんと思はれるやうなこのよき自然の中に麗しい國讓りが行はれ、それが現在の出雲大社の起源になつてゐるのであるといふ事を讀み取らせる。

(3) 第二次は内容の精査である。第一次の概觀を基礎とし、各節の節意を明らかにし、各節の中心となるべき點を中心語句をとらへて明らかにし、紀行の獨自性に即して讀解させる。

(4) 第三次は第一次第二次を基礎として文意の深奥に到達することが大切である。即ち味讀玩味して中心語句を通して文旨をつかませ、朗讀と相俟つて文の持つ古典味追憶の情緒等を味ははせる。

(5) 語句は通讀その他内容精査等兒童の作業課程に應じて、文の内容に即した意味を知らしめる樣特に注意すべきである。此の際形式的な言ひ替へなどはかへつて文意をそこねる。

(6) 中心語句。(イ) 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りて申し給ふやう、「大神のたまはく、『此の葦原の中つ國は、我が子孫の治むべき所なり』と。快く此の國をたてまつり給ふや、如何に」

大國主命答へて申さく、「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主とはかりて答へ申さん」

(ロ) こゝに於て大國主命、「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん」と申して、恭しく國土をたてまつり給ひぬ。大神、其の眞心の厚きを賞して、命のために壯大なる宮殿を造らしめ給ふ」

(ハ) 折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此の所にいかめしく向かひあひ給ひけん神々の姿、今まのあたり見るが如く、打ち寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

(二) 挿畫

三頁の寫眞は松江市街の一部、左に見えるが宍道湖である。

五頁のは出雲大社で前面の大きな建物が拜殿、後の廻廊の中に千木が高くそびえてゐるのが本殿である。後の森は八雲山と云ふ。七頁は稻佐の濱の夕景である。海中の島は辨天島で島の上に辨天の祠がある。出雲大社からは約二粁の地點である。

## 三　參考

出雲大社　島根縣大社町にある。官幣大社、大國主命を祀り、我が國最古の神社で、社殿は大社造でこれ又我國最古の形式である。規模の高大なる事で名高く、本殿の高さ二十四米、現在の建物は明治七年の造營で、昔のものより小はさくなつてゐる。明治二十三年特別保護建造物となつた。

宍道湖　周圍五十二粁あり、東岸に姉ケ島といふ島があり、風光が甚だよい。湖水からは白魚、公魚、鰻等の漁獲が多い。

大國主命　白兎の神話ですでに兒童には親しみが深い。素戔嗚命の御子で、御德高く、少彦名命と力をあはせて出雲地方を平げ、田畑を開いて農業をおすゝめになり、國土を天照大神に奉つて彼は杵築の宮に居られた。これが現在の大社である。建御雷命　經津主命と共に天照大神の使者として出雲に御降りになり、その勅をお傳へ申し上げた。大國主命の御子に建御名方神があり、獻國に反對されたのでこれを討つて信濃の諏訪に追ひやられたといふ武勇の神である。現在では常陸の鹿島神宮に奉祀し、經津主命は香取神宮に奉祀されてゐる。

# 第三　古代の遺物

## 一　要旨

貝塚とその附近から發見される石器土器、ならびに古墳とその中から發見される玉や鏡・劒・甲冑等について讀解させ、これらの古代の遺物を通して、石器時代からの古代の歴史を研究することを知らせて、史蹟を保存し、古代の遺物を保護し、これを後世に傳ふべき所以を理解させ、史學考古學を重んじ歴史を尊ぶ精神を養ふ。

## 二　指導觀

（一）貝塚と古墳とは、古代の歴史を調べるのに最も重要な材料である。貝塚に殘る石斧や石鏃又は土器などによつて、石器時代の先住民族の生活をしのび、古墳の中から發見される裝飾品の玉類や、鏡・劒・甲冑などの鐵器類によつて、古代の歴史を研究することは、史的趣味の最も大なるものであり、考古學的精神の理想の境地である。この趣味と精神とを深く理解させ會得させることが本課指導の眼目である。

（二）歴史を愛し、古代の遺物を尊重する精神は、史蹟保存の念となり、記念物を保護してこれを後世に傳へようとする熱心な態度にまで進まなければならない。

「元來昔の歴史を知るには、其の頃に書かれた物をもととして研究するのであるが、かういふ石器・土器を始め、古墳などから出る古代の遺物も尊い材料となるのであるから、私たちはどこまでもこれを大切に保護し、後世に傳へなければならない」といつてゐる點をよく熟讀玩味させて、「尊い材料」なるが故に、愛護し尊重するの精神を深めなければならない。

（三）文は大きく分ければ、貝塚と石器時代、古墳と古い鐵器時代、結びの三段になつて居り、全文十節より成り、第一節から第四節までが第一段で、

「私たちが野外を散歩してゐると、時に畠の上などに貝殼が白く散らばつてゐるのを見かける」といふことから始まつて、

「さうして、其の貝塚及び附近から、當時の住民の使用した石器や土器などが、たま〳〵發見されるわけである」で結んである。

第二段は、第五節から第九節までであるが、五・六・七節は歴史的時代別の説明で、八・九節で古墳を語つてゐる。八節の前方後圓の古墳の話と、九節の古墳の中から發見されるものと、外部から發見されるものとの話が、この段の中心である。

第十節は第三段で、全文を結んで、古代の遺蹟遺物を保存しようとする精神を説いたものである。

以上のやうな文の構成であるから、記述に從つて一段落づつ説明しよく理解させ、はつきり分つた事實の上に立つて、自ら史的趣味を養ひ、その主張するところに共鳴共感させるやうに指導を進むべきである。

## 三　朗讀

本文

ダイ サン。コダイノ イブツ。

ワタクシタチガ ヤガイオ サンポシテ イルト。トキニ ハタケノ ウエナドニ。カイガラガ シロク チラバッテ イルノオ ミカケル。ナオ ソノヘンオ ヨクサガスト。オノノ カタチオ シタ イシヤ。ヤジリノ カタチオ シタ イシノ カケラヲ ミツケル コトガ アル。コノ ユー イシオ ムカシノ ヒトワ。テングノツクッタ モノダトカ。カミナリノ オトシテ イッタモノダトカ イッタガ。モチロン ソンナ コトノ アローハズワ ナク。ヤハリ ニンゲンノ ツクッタ モノナノデ アル。

朗讀上の注意 二〇

○あまり速すぎないやうにはつきりと讀むがよい。

〔參考〕
イシ（石）
イシ（醫師・縊死・遺子・意志）



セカイノ ドコノ チホーデモ。ジンチノ ヒラケナカッタ オームカシニワ。ヒトワ マダ キンゾクオ ツカウ コトオ シラズ。ゴク テジカニ アル イシデ オノヤ ヤジリオ ツクリ。マタ。ケモノノ ホネデ ハリヤ ツリバリナドオ ツクッタノデ アッタ。コノ ユージダイオ セッキジダイト ユーノデ アル。

オナジ セッキジダイニ シテモ。ゴク フルイ トコロデワ。タダ イシオ ワッタ ママノ。カタチノ トトノワナイ モノオ ショーシテ イタガ。ジダイガ ススムニ ツレテ。ダンダン ウツクシク ミガイタ モノモツクラレル ヨーニ ナッタ。ソー ユー セッキニナルト。ズイブン セーコーデ。コンニチ コレオ マネテ ツクロート シテモ。チョット デキソーニモ ナイノガ アル。マタ ツボヤ ハチナド。イロイロノ カタ

○世界のアクセントは、セカイともいふ。
○「使ふ」は口語の場合にはッコーとはいはない。

〔參考〕
ハリ（針・玻璃）
ハリ（梁）
ハリ（張）
○「釣針」のアクセントは平板式にもいふ。

〔參考〕
ショー（使用・飼養・仕樣）
ショー（子葉）

○「作られるやうになつた」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕
ハチ（鉢・八）
ハチ（蜂）

チオ　シタ　ドキヤ、ソノ　カケラガ　ハッケンサレ、ソノ　ヒョーメンニ　ナワメノ　ヨーナ　モヨーノ　ツイタモノナドガ　アル。。

コー　ユー　ジダイノ　ヒトワ、イシノ　オノヤ、イシノ　ヤジリノ　ツイタ　ヤオ　タズサエテ　サンヤニ　カリオ　シ、ジューコツデ　ツクッタ　ツリバリ　ナドデウオオ　トリ、マタ、カイヲ　ヒロッテ　セーカツ　シテイタ。カレラノ　スンデ　イタ　トコロニワ、シゼン　オーキナ　ハキダメガ　デキ、トージ　ステラレタ　カイガラガ　コンニチマデ　ノコッテ、ハタケノ　ウエナドニアラワレ、ワタクシタチノ　メニ　ツクノデ　アル。ソーユー　トコロオ　カイズカト　ナズケル。ソーシテ、ソノ　カイズカ　オヨビ　フキンカラ、トージノ　ジューミンノ　ショーシタ　セッキヤ　ドキナドガ　タマタマ　ハッ

〔參考〕
ツイタ（附いた。着いた・搗いた）
ツイタ（突いた・漬いた）

カリ（狩・雁）
カリ（借・假）





ケンサレル　ワケデ　アル。。。

セッキジダイワ　ズイブン　ナガク　ツズイタ。シカシ。ジンチガ　シダイニ　ススンデ、イツノ　マニカ。コーセキカラ　キンゾクオ　トリダシテ　ツカウ　ジダイガ　ヤッテ　キタ。。ソレモ　イチバン　ハジメニ　ツカワレタノワ　ドーデ、ソノ　ノチニ　ドート　スズトオ　マゼタセードーガ　ツカワレ、サイゴニ　テツガ　ツカワレルヨーニ　ナッタ。。ドー　オヨビ　セードーデ　リキオ　ツクッタ　ジダイオ　セードーキジダイト　イー、テツノリキオ　ツカウ　ヨーニ　ナッタ　ジダイオ　テッキジダイト　ナズケル。。。

ワガクニエワ、アジヤタイリクカラ　セードーキオ　ツクル　コトガ　ツタエラレ、シタガッテ　セードーノ　ツルギヤ、ホコヤ、ヤジリヤ、マタ　ドータク　イッテ

○「わけである」と續けていふ時、アルのアクセントはあまり高くならない。

○「何時の間にか」を一語の如くいふ時、アクセントはイツノマニカとなる。

〔參考〕
ドー（銅・胴・堂）
スズ（錫）
スズ（鈴）

○「使ふやうになつた」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。

ツリガネノ ヨーナ カタチオ シタ キブツガ ハッケンサレルノデ アルガ。ワガクニノ セードーキジダイワ キワメテ ミジカク。ヤガテ ツギノ テッキジダイニ ハイッタ モノト カンガエラレル。。。

テッキジダイト イエバ。コーシタ フルイ ジダイカラ。ジツニ コンニチノ ワレワレノ ジダイマデ ツズイテ イル ワケデ。シタガッテ ソノ イブツワ ホトンド ムスート イエル。。シカシ。ソノ ウチデモ。モットモ フルイ ジダイニ ゾクスル モノトシテ キチョーナノワ。コフント。ソノ ナカカラ ハッケンサレルイブツデ アル。。

コフント ユーノワ ドマンジューニ ルイスル ツカデ。ソレニワ ダイショー イロイロ アルガ。ケージョーワ エンケーガ フツーデ。マレニ ホーケーノ モノガ アリ。トクニ ワガクニ トクユーノ モノトシテ ゼンポーコーエンノ コフント トナエラレル モノガ アル。。ゼンポーコーエンノ コフンワ。ヒョータンオ タテニ ワッテ フセタ ヨーナ カタチデ。タダ マエノ ホーガ カクバッテ オリ。ウシロノ ホーガ マルクナッテ イル。。シューイニワ タイテー ホリガ アル。。コノ コフンノ オーキナノニ ナルト。ナガサガ スーヒャクメートルニ オヨビ。ホリガ ニジューニモ サンジューニモ メグラサレテ イル。。。

サテ。イッパンニ コーシタ コフンノ ナイブワ。ドーナッテ イルデ アローカ。。ザイライ ナニカノ キカイニ ハックツサレタ トコロデワ。イシデ キズイタシツヤ セッカンガ アラワレ。シシャト ドージニホームッタ マガタマ。クダタマナドノ ソーショ。クヒン



○「釣鐘」のアクセントは單獨には平板式である。

○「最も」のアクセントはモットモともいふ。

〔參考〕
ツカ（塚・柄・束）
ダイショー（大小）
ダイショー（代價）





○「圓くなつて」を別々にいふ時アクセントはマルク ナッテとなる。

○「長さ」のアクセントは平板式にもいふ。

〔參考〕
キカイ（機會・機械）
キカイ（奇怪）
シシャ（死者・使者）
シシャ（親寫）

ヤ、カガミ。ツルギ。カッチューナドガ　デタ。。マタ、コフンノ　ガイブカラワ　ハニワノ　ニンギョーナドガ　ハッケンサレ。ワタクシタチニ。アノ　ノミノ　スクネガソレオ　クフーシタト　ユー　レキシオ　オモイアワサセル。。コーシタ　イブツオ　シラベル　コトニ　ヨッテ。コフンノ　ネンダイオ　カンガエル　コトガ　デキルノデアル。。

ガンライ　ムカシノ　レキシオ　シルニワ。ソノ　コロニ　カカレタ　モノオ　モトト　シテ　ケンキュースルノデ　アルガ。コー　ユー　セッキ　ドキオ　ハジメ。コフンナドカラ　デル　コダイノ　イブツモ　トートイ　ザイリョート　ナルノデ　アルカラ。ワタクシタチワ　ドコマデモ　コレオ　タイセツニ　ホゴシ。コーセーニ　ツタエナケレバ　ナラナイ。。コンニチ　コレラノ　モノガ。アル

○「考へることが」
「出來るのである」
右の言葉は、それ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

○「研究」のアクセントは單獨には平板式である。

○「どこまでも」のアクセントはドコマデモともいふ。

〔參　考〕
コーセー（後世）
コーセー（校正・高聲・構成）



イワ　ハクブツカンニ　ホゾンサレ。シセキヤ　コクホーナドニ　シテーサレテ　イルノガ　アルノワ。コーシタモノオ　エーエンニ　ホゾンショート　ユー　セーシンデアル　コトオ　ワスレテワ　ナラナイ。。。

## 指導概要

### （一）教　材

(1) 貝塚と石器土器との話によつて石器時代の生活を調べ、古墳とその中からの發見物によつて、古い鐵器時代を研究することを述べた考古學教材であるから、史蹟や遺物の實際について見學させ觀察させることが出來ればいちばん結構である。貝塚のあとなどはよくあるのであるから、出來るだけ機會をとらへて實際に接しさせるやうにしたい。そして、兒童をして、石器土器類の發見や採集に興味をもたせ、ひいては考古學的研究に入るの端緒をつかませたいものである。

(2) 文は平明な説明文體で、固有の熟語以外には別段難解の語句もないから、全文を通讀させ、次第に讀みを深めながら理解させるやうに取扱ふ。讀解も文の順序に從つて、先づ石器時代のことについては貝塚を中心として讀取らせ、次いで古鐵器時代に移り、古墳の記述を中心として理解させるやうにする。

(3) 古代の史蹟や遺物を保存し後世に傳へようといふ精神は、結びの一節に力説してあること指導觀に述べた通り

であるが、この精神を理解させるのは、單に結びの一節をのみ讀解させることによつて出來るのではないので、起首から、貝塚、古墳等の記述について理解を深め、考古學的趣味を味はひ、興味を覺えることによつて自ら養はれることであるから、理論的抽象的に理解するのでなくて、自然に會得するやうに導かなければならない。

（二）挿畫

右端より石さじ（皮はぎ）、石錐、次の四箇は石鏃。

中段は石庖刀、下段右の二つ骨角器で鉆と釣針。

九頁は、上段下段は石斧で右方のものは打製、左方のものは磨製である。

十頁は、土器の壺、右側のは彌生式、左側のは繩文式である。

十二頁は、右より銅製の鉾、劒、銅鐸。

十四頁は、前方後圓の古墳。奈良縣郡栖山にあるもの。右の方が後の圓形で左の方が前の方形である。

# 第四　支那の印象

一　要旨

支那の印象と題して北京市街・楊柳の村・長江の筏の三つを擇び、支那人の生活と其の國民性とを描いた文である。此の文を讀ませることにより、今次の支那事變を契機として、愈々大陸日本を建設し新しい東亞の文化を打樹てんとする將來の國民をして、支那に對する認識理解を深めさせようとするのが本課の意圖である。

二　指導觀

（一）今次の支那事變に直面して最も大切な事は、我が國民一般が支那人の生活や國民感情に對して、深い認識と理解を持つ事である。聖戰奏功の曉に來るべきものは東亞の平和であり、徹底した日支提携である。それには何よりも先づ相互の理解認識が基礎とならなければならない。本課は次の教材孔子と顏回と共に以上の目的を以て採擇されたもので、この精神を深く讀解させることが本課指導の眼目である。

（二）「北京市街」は卷十一にある「歐洲航路」の上海や香港と共に支那大都市の現狀を物語つてゐる。首都としての地位は失はれても今事變によつて其の重要性を回復した北京である。此の北京市街を專ら印象的に敍したのが此の教材で、「ゑんえんたる城壁を高くめぐらした北京は、見るからに雄大だといふ感じを與へる」と書出して、內城外城を說いてゐる。「城壁を高くめぐらした」といふこれが支那都市の特色で、小さな村であつても皆これにならつてゐ

る所に、支那の歴史を物語り、國民生活があり、國民性がある事に注目しなければならない。「壯麗な樓閣」が城門を飾るのも皆さうである。北京としては正陽門が壯麗な樓閣の代表である。

次に作者は内城の中央景山に登つて城の内外を展望してゐる。そして「北京はたゞ廣々と平にくりひろげられた市街だと感ずる」と敍べてゐる。内外の城壁の周圍合せて四十マイル、小高き景山を除いては廣大平坦な市街である。景山から紫禁城其の他の宮殿や名勝を指點してゐるが、朝陽門・廣安門の彼方に通州や蘆溝橋を想ふは、言ふまでもなく今次の事變に於ける重要地點であつたからである。

日壇・月壇・天壇等の祭壇は天體に對する强き信仰を物語るものであるが、其の代表として天壇についての印象を敍べて、「圓形の祭壇の前に立つと、諸官が威儀を正して列なり、奏樂の中に天子が恭しく祈られたといふ夜明前の神祕な儀式が、目の前に浮ぶやうな氣がする」と云つてゐる。

「周圍に銃眼のついた壁をめぐらし、外廓に空地を存する特殊地帶」の東交民巷には支那の歴史を物語つてゐるが、それよりも天橋路の露天市場や、胡同の大衆的な北京の古風が如實に點ぜられてゐる所をよく讀み取らせ、親しみを感ぜしめることこそ、支那を理解させる手段となるのである。

(三)「楊柳の村」は支那農村の敍述である。「どこへ行つても、楊柳を見るのが支那である」「此の楊樹・柳樹の十株か二十株生ひ茂る所には、大てい農家が四五軒かたまつてゐる」此の特色は全支那は勿論、滿洲國亦然りである。實に楊柳こそ支那農村の象徴である。そして「どちらも、其の枝其の梢は、風になよ〳〵となびき動いてゐるが、幹は動くことなく、十分土中に根を張つてゐる」のが支那の國民性といつてよい。五千年の長きに亙る此の國、あらゆる天災地變、兵亂、戰禍、惡政も意とするところなく、輕くあきらめて、しかも「五千年の昔から、自ら耕して食ひ、自ら掘つて飲むといつた簡單な生活を、其のまゝ今日に持越して來た彼等は、田畑のことにかけて本能的な執着と、眞劍な考を持つてゐる」のである。此の點をよく讀取らせて支那農民の特性を把握させなければならない。作者は其の本能的な執着と、眞劍味を次々と詳敍し、「星をいたゞいて出で、月を蹈んで歸るのが農家の生活である」「彼等は終日默々として働いてゐる」といひ、「人を賴まず、世をうらまず、自分の事は自分でするといふ心掛が、田家に行きわたつてゐる」とよく其の性情を寫してゐる。

かゝる國民性を持つ彼等でありながら、「しかも彼等は、のん氣に其の生活を樂しむことを知つてゐる」のであつて、小鳥を愛し、其の聲を樂しむ樣を敍べ、「「田園自ら樂しみあり、魚鳥また相親しむ。」の平和境を、こゝに見るやうな氣がする」と印象させてゐるのである。

(四)「長江の筏」は大陸的な悠々たる揚子江の筏流しの生活を敍した文で、「楊柳の村」の農民生活と一脈相通ずるものがある。「いう〳〵たる長江」「すばらしく大きな」「板ぶき、又は竹・アンペラなどで作つた小屋が、幾軒となく長屋のやうに建てられてゐる。荷主・炊事女・舵夫・雜役夫から、村の客まで幾十人がそれに乘つてゐる」「最も大きな筏になると、村中全體が乘つてゐるのではないかと思はれる程多人數である」「其の對岸を望んでも陸らしい物も見ず、たま〳〵陸と見たのは、江上の島の水際に生ひ茂る楊柳の林だつたりする程廣いのである」「こんな筏の十や二十が續いて下つたからとて、少しもじやまになるわけではない」此のいう〳〵たる大自然、此の大きなそしてのんびりとした生活、そこに大陸支那の特色があり、國民性が生れるのである。

「紅綠のとうろうを美しく點ずる」「胡弓・笛・たいこの鳴り物入りではやし立てる」などは、農民の小鳥を愛し、其の聲を樂しむのと同じく、われ〳〵に深き親しみを感じさせるものがある。

## 三 朗讀

### 本文

ダイ シ。シナノ インショー。。

ペキン シガイ

エンエンタル ジョーヘキオ タカク メグラシタ ペキンワ。ミルカラニ ユーダイダト ユー カンジオアタエル。シガイワ ナンボク フタツニ シキラレ。キタオ ナイジョー。ミナミオ ガイジョート イッテイル。ナイガイ ニジョーノ サカイモ マタ ジョーヘキデアル。。

ジョーヘキノ トコロドコロニ ジョーモンガ アリ。ソーレーナ ロ!カクガ コレオ カザッテ イル。ナイジョーノ セーモン セーヨ!モンノ ドードータル スガタガ。マズ リョコーシャノ メオ ヒク。。。

ナイジョーノ チューオー ケーザンニ ノボルト。ペキンワ タダ ヒロビロト タイラニ クリヒロゲラレタシガイダト カンズル。ミナミニ マジカク。ムカシノコーキョ シキンジョーガ ナニヨリモ メダッテ ミエル。ソーレーナ キューデンガ イクムネモ タチナラビ。ソノ コガネイロノ カワラヤネガ アオゾラニ カガヤカシー。ホッカイ。チューカイ ナンカイト ツズクイケワ。アタカモ チジョーニ カガミデモ ハメコンダカト オモワセル。ナツワ。イケ イチメン ハスノハナダ ソーダ。。ヒガシ チョーヨーモンノ カナタニトーク ツーシューガ アリ。ナンセー コーアンモンノカナタニ。コレモ トーク ロコーキョーガ アルノデ





### 朗讀上の注意

○「北京」は單獨にはペキンである。

〔參考〕

シガイ（市外・市街）

シガイ（死骸）

○「あたかも」は アタカモともいふ。

アル。。

ペキンニワ、ニチダン。ゲツダン。テンダン トーノ
サイダンガ アツテ、レキダイノ コーテーガ テンオ
マツラレタ ムカシガ シノバレル。。ナカンズク ソー
ダイナ テンダンワ ガイジョーニ アツテ。ロージュノ
コズエ・フク カゼノ オトモ ウラサビシー ホド
シズカナ トコロデ アル。。ダイリセキデ タタマレタ
エンケーノ サイダンノ マエニ タツト。ショカンガ
イギオ タダシテ ツラナリ、ソーガクノウチニ テン
シガ ウヤウヤシク イノラレタト ユー ヨアケ マエ
ノ シンビナ ギシキガ、メノ マエニ ウカブ ヨーナ
キガ スル。。

コノ ホカ、トーコーミンコーダノ、テンキョーロダノ、
コドーダノ、シナダケニ カワツタ モノヤ カワツタ

○「夜明」は單獨にはヨアケと平板式である。
○「目の前」を別々にいふ時、アクセントはメノ マエとなる。
○「浮ぶやうな」を別々にいふ時、アクセントはウカブ ヨーナとなる。





ナマエガ アル。。

トーコーミンコートワ カツコク コーカンノ アル
トコロデ、シューイニ ジューガンノ ツイタ カベオ
メグラシ。ガイカクニ クーチオ ソンスル トクシュ
・チタイデ アル。。ココニ バイルト。ドーロモ。テーエン
モ。タテモノモ。・スツカリ セーヨーフーデ アル。。

テンキョーロニワ ロテン イチバガ アツテ。ニチヨ
ーヒンノ アリト アラユル モノガ ザツゼント ナラ
ンデ イル。。ソコラニ ランプガ アリ。メガネガ
アリ。テンプラノ ニオイガ タダヨイ。フルギヤノ
ノキニ コトリガ サエズリ。ホコリカゼガ フルザツシ
ノ ページオ メクツテ イル。。。

コドーワ ロジノ コトデ。コーユー トコロニ ペキ
ンノ コフーガ ノコツテ イルノガ オモシロイ。。イチ

○「特殊地帶」を別々にいふ時、アクセントはトクシュ ・チタイとなる。

○「露天市場」を別々にいふ時、アクセントはロテン イチバとなる。

リンシャノ ミズウリガ トール。トギヤガ トール。トコヤモ トール。ミンナ ノンビリシタ ナリモノオ ナラシナガラ トーッテ イク。カドグチカラ コドモガタコオ モッテ デルト。ソコニ イタ アヒルガ ヨチヨチト ニゲ ダス。ドコカデ ハナヨメ ギョーレツノラッパガ ヒビイタリ スル。。。



ヨーリューノ ムラ。。

ドコヘ イッテモ ヨーリューオ ミルノガ シナデアル。。ソーシテ。コノ ヨージュ リュージュノ トカプカ ニジッカブ オイシゲル トコロニワ。 タイテーノーカガ シゴケン カタマッテ イル。。

エダノ。ウエニ ノビテ イクノガ ヨーデ アリ。ウエカラ シタエ タレサガルノガ リューデ アル。。ドチラモ ソノ エダ ソノ コズエワ。カゼニ ナヨナヨトナビキ ウゴイテ イルガ。ミキワ ウゴク コト ナク。ジューブン ドチューニ ネオ ハッテ イル。。コーシタ ヨーリューノ カゲニ。ノーフワ ササヤカナ ッチノ イエオ カマエル。。スイソーオ オウ ボクドーワ ベット シテ。オトナワ ハルノ タネマキ。アキノトリイレニ ハゲンデ ヨネンガ ナイ。。ゴセンネンノムカシカラ ミズカラ タガヤシテ クイ。ミズカラ ホツテ ノムト イッタ カンタンナ セーカッオ ソノママ コンニチニ モチコシテ キタ カレラワ。タハタノコトニ カケテ ホンノーテキナ シュージャクト。シンケンナ カンガエオ モッテ イル。。

ホシオ イタダイテ イデ。ツキオ フンデ カエルノガ デンカノ セーカツデ アル。。タマタマ キシャノ











○「花嫁行列」を別々にいふ時、アクセントは
ハナヨメ ギョーレツとなる。

マドカラ　ミワタスト。アサ　ドンナニ　ハヤクテモ、アチラ　コチラ　サンニン　ゴニン。スキ　クワオ　トッテ。セツセト　ハタライテ　イルノオ　ミカケル。フキンニ　ソレラシー　ヨーソン　リューソンガ　ナイ　トコロカラ　サッスルト。ズイブン　ハヤク。トークカラ　デカケテキタ　モノダト　カンシン　サセラレル。

カレラワ　シュージツ　モクモクトシテ　ハタライテイル。シカシ。トチワ　ホトンド　ムゲンニ　ヒロガッテイルノデ　アルカラ。アセツタ　トコロデ　オイツクモノデワ　ナイ。エーエート　ハタラク　カレラニ　ドコカ　マタ。キノ　ナガイ　トコロガ　アルノモ。ヒトツワ　コノ　コーダイナ　シゼンノ　セーデ　アロー。ソノウエ。シバシバ　キキンガ　アリ。コーズイガ　アリ。ヘーランガ　アッテモ。ムカシカラ　カレラニ　タイスル

〔參考〕
クワ（鍬）
クワ（桑・九羽）



スクイノ　テワ　ドコカラモ　ノバサレナカッタ。シタガッテ　ヒトオ　タノマズ。ヨオ　ウラマズ。ジブンノコトワ　ジブンデ　スルト　ユー　ココロガケガ。デンカニワ　イキワタッテ　イル。

シカモ　カレラワ　ノンキニ　ソノ　セーカツオ　タノシム　コトオ　シッテ　イル。ドロ　マミレノ　シゴトギノ　ママ。コトリノ　カゴオ　サゲタリ　コトリオ　トマリギニ　トマラセタリ　シテ。ムラ　ハズレノ　ヨーリューノ　カゲニ　アツマリ。ヒグレマデ　ソノ　ナカシクラニ　ウチキョーズル。イチニチノ　ロークオ。ウツクシーナキゴエニ　ウチワスレルノデ　アル。デンエン　オノズカラ　タノシミ　アリ。ギョチョー　マタ　アイ　シタシム。ノ　ヘーワキョーオ。ココニ　ミルヨーナ　キガスル。

○「救の手」を別々にいふ時、アクセントはスクイノ　テとなる。

○「村外れ」を別々にいふ時、アクセントはムラ　ハズレとなる。

チョーコーノ　イカダ。。

ユーユータル　チョーコーニ　モット|モ　フサワシーノ

ワ　イカダ|ナガシノ　コーケーデ　アル

イカダワ。タク|サンノ　マルタオ　イ|クエニモ　クミア

ワセタ　スバラ|シク　オーキナ　モノデ　アル。ミタ　ト

コロ　スイメント　スレスレニ　ナッテ　ナガレテ　イル

ガ。ソレワ　イカダノ　イチブ|ブンデ。ダイブ|ブンワ　ス

イメンカニ　アルト　ユー。。

イカダノ　ウエニワ　イタブキ　マタワ　タケ　アンペ

ラ　ナ|ドデ　ツ|クッタ　コヤガ。イ|クケント　ナク　ナガ

ヤノ　ヨーニ　タテラレテ　イル。ニヌシ　スイジフ　ダ

フ　ザツエキ|フカラ。ムラノ　キャク|マデ　イクジューニ

ンガ　ソレニ　ノッテ　イル。。センタクモノノ　ウワギヤ

○「筏流し」を別々にいふ時、アクセントは
イカダ　ナガシとなる。

○「長屋のやうに」を別々にいふ時、アクセン
トはナガヤノ　ヨ|ーニとなる。





。モモヒキ　ナ|ドガ　カゼニ　ヒル|ガエッテ　イル。シシ

クモノ　ユクエデモ　ミテ　イル|ノカ。オー|ゾラオ　アオ

ギ|ナガラ　クワエ|ギセルオ　シタ　ロージンノ　スガタ

モ　ミウケラレル。モット|モ　オーキナ　イカダニ　ナル

ト。ムラジュー　ゼンタイガ　ノッテイル|ノデワ　ナイカ

ト　オモワレル　ホド　タニ|ンズーデ　アル。

ゲツメーノ　ヨナド。　コーシタ　イカダノ　コヤトユ

ー　コヤニ。コーリョクノ　トーローオ　ウツ|クシク　テ

ンズル|ノガ　アル。。コキュー　フエ|タイコノ　ナリモノ

イリデ　ハヤシタテル。。トーローノ　イロ　アザヤカ

ニ。コージョーニ　カ|ゲオ　ウツス　サマワ　エ|ニモ　カ

キタイ　クライデ　アル。。。

コーユー　オ|ーキナ　イカダガ。トキニ　ジ|ューモ　ジ

ユ|ーゴモ　レ|ツオ　ツ|クッテ　コーシンオ　クダル。。ナニ

シロ　ヨースコーワ。ソノ　タイガンオ　ノゾンデモ　リクラシー　モノオ　ミズ。タマタマ　リクト　ミタノワ。

コージョーノ　シマノ　ミズギワニ　オイシゲル　ヨーリューノ　ハヤシダッタリ　スルホド　ヒロイノデ　アル。コーコーカラ　カンコーマデノ　イッセンキロメートルガ　ヨースコーノ　カリューデ　アッテ。ゾースイキニワ　イチマントンキューノ　キセンガ　ラクラクト　コーコー　スルノデ　アル。ダカラ。コンナ　イカダノ　ジューヤ　ニジューガ　ツズイテ　クダッタ　カラトテ　スコシモ　ジャマニ　ナル　ワケデワ　ナイ。

コーシタ　スバラシー　シカモ　ノンキナ　イカダ　ナガシニモ。ヤハリ　ジダイノ　ナミワ　オシヨセル　モノト　ミエテ。　チカゴロワ　ハツドーキセンニ　ボツポイセー　ヨク　ヒカセナガラ。ミッツ　ヨッツ　ナナツ

○「威勢よく」を別々にいふ時、アクセントはイセー　ヨクとなる。





ト　レツオ　ナシテ　クダルノガ　アル。

イカダワ　コーオ　クダリ。コーソショー　チンコーノ　キンザンジ　アタリニ　ツイテ。オーキナ　チョボクジョーニ　ハイル。ザイモクト　ザイモクトオ　ククリ　ツケタ　タケズナガ　ポンポン　タチキラレ。ジャンクデ　ナンキンヤ　シャンハイ　ホーメンニ　ハコバレテ　イク。

ソレデワ　コーシタ　オーキナ　イカダワ。イッタイドコカラ　クリダサレルノデ　アローカ。

オーイカダワ。コナンショーノ　ドーテーコニ　マズシュツゲン　スル。オモーニ　コナン　キシュー　ナドノオクチカラ　デル　ザイモクガ　ソレゾレ　ソノ　チノナガレニ　ヨッテ　コノ　コスイニ　ナガサレ。ココデオーキナ　イカダニ　クマレルノデ　アロー。ドーテーコワ。シャンハイカラ　セン　ニサン　ビャッキロ　メー

○「其の地」を別々にいふ時、アクセントはソノ　チとなる。

トル　モ　サカノボッタ　トコロニ　アル　ウミノ　ヨーナ　コスイデ　アルカラ。コーシタ　オーイカダノ　ヘンセーニワ　モッテコイト　イッタ　パショデ　アル。カクテ　イカダワ　ドーテーノ　ガクシューカラ　クダッテホンリューニ　デル。ヤガテ　ユーメーナ　セキヘキオクダリ。カンヨーオ　クダル。コノヘン　イッタイノ　コージョーニ。トクニ　イカダ　ナガシノ　フゼーノ　ヨクアジワワレル　トコロガ　オーイ。

## 四　指導概要

### (一)　教　材

(1)　教材は割合に平易に、趣味深く書かれてゐるので、讀解にはさまで困難を感じない。それ故文面を通して印象の焦點をよく把握させることに態度をおくべきである。即ち「北京の市街」については、市街の概觀から此の市街の特色を幾つか擧げてゐることを明かにすること「楊柳の村」については、大陸支那で誰にも目につく楊柳を描出して、そこに營まれる自給自足の農民生活、それから生じた國民性、「長江の筏」については、悠々たる揚子江の大自然に抱かれて、悠々たる筏の生活を讀取らせるのである。

(2)　以上の焦點を摑ませる爲めには、大體次の仕組に讀み進ませるがよい。

（一）　北京の市街

一　概　觀

○見るからに雄大だ（ゑんえんたる城壁、壯麗な城門の樓閣、堂々たる姿）

○廣々と、平にくりひろげられた市街だ（景山上の展望）

二　市街の特色

○紫禁城（壯麗な宮殿、黃金色の屋根瓦）

○北海・中海・南海（鏡でもはめ込んだかと思はせる美しさ）

○日壇・月壇・天壇（舊跡、懷古）

○東交民巷（各國公館のある特殊地帶）

○天橋路（露天市場）

○胡同（古風な路次）

此の文では「見るからに雄大だ」「先づ旅行者の目を引く」「……市街だと感ずる」「……と思はせる」「……昔がしのばれる」「……目の前に浮ぶやうな氣がする」「みんな、のんびりした鳴り物を鳴らしながら通つて行く」「あひるがよちよちと逃げ出す」といふやうな話に注意して支那風景を見た印象語であることに注意しなければならない。

（二）　楊柳の村

一　農民の生活

○さゝやかな土の家、

○自ら耕して食ひ、自ら掘つて飲むといつた簡單な生活、

○星をいたゞいて出で、月を踏んで歸る田家の生活、終日獃々として働く、

二　農民の性格

○どこか氣の長いところがある。

○人を賴まず、世をうらまず、自分の事は自分でする。

○のん氣に其の生活を樂しむことを知つてゐる。（泥まみれの仕事着のまゝ、日暮れまで其の鳴かしくらに打興ずる）

（三）　長江の筏

一　大陸風景

○いう〳〵たる長江（何しろ揚子江は、……少しもじやまになるわけではない）

○すばらしい大きな筏（組合せ、筏の上の人と家、村中全體が）

二　のんきな筏流し

○筏の上の家

○大空を仰ぎながら、くはへぎせるをした老人の姿、

○紅綠のとうろう、胡弓・笛・たいこの鳴り物入りではやし立てる。



三　筏の行方（二十八頁五行目から八行目まで）

四　筏の出現（二十八頁末行から終りまで）

(3)　新出文字は那、郭、壇、童、畑、能、洪、勞、級、壇の十字、讀替文字としては黃、祭、列、外、江、增、風情の七つであるが、既に時局上からも、亦讀物の上からも見馴れてゐる文字が多いから、さまで困難ではない。

（二）　挿　畫

十七頁、正陽門、十九頁、天壇、二十二頁、楊樹と土の農家、二十六頁、長江上の筏。

三　準　備

掛圖　各教材に適合した寫眞と繪葉書。

支那地圖。

# 第五　孔子と顏回

## 一　要旨

孔子が、その門弟三千人の中で、我が道を傳へ得るたゞ一人の弟子だと信頼してゐた顏回への親愛の情と、最もよく其の師を知り、師の教を守り、師の教を實行した顏回の、師に對する尊敬と思慕とを中心にして、師弟の道の崇高な心情を讀解させて、その情誼の深さと尊さとに感激させ、論語にあらはれた孔子の理想とする仁の教について知らせ儒教の精神にふれさせる。

## 二　指導觀

（一）大聖孔子の唯一の後繼者とたのんだ顏回に對する信頼と愛情との深さと、これに對して顏回の、師を知り、師の教を守り、いかなる時にも師に從ひ、師を慰めはげました弟子としての言行のすぐれてゐたことを中心として、師弟の情誼の美しさに感激させ、師弟の道を理解させ、その間に、仁を主として儒教の精神の一端にふれさせようとするものである。

問答の間に、論語の語句に據つて、孔子の思想を表してゐるのであるが、儒教の思想は稍難解なところもあり、解釋に力を要するところが少くないが、全文通讀と各章毎の讀解によつて、讀みを重ねつゝ理解と感銘とを深める。

（二）全文を六章に分ち、孔子と顏回の師弟の情誼と、論語に於ける仁の教とを中心にして、劇的な構成をとり、文



學的表現によつて感銘を深く讀ませようとしてゐる。

第一章の起句「あゝ、天は予をほろぼした。」は、隨分思ひ切つた冒頭であるが、孔子の顏回を愛惜する眞情を最も簡明に最も強く表現した語であり、これを最初にした所に構成上の苦心がうかがはれる。

論語（先進第十一）に、「顏淵死。子曰。噫。天喪レ予。天喪レ予。」「顏淵死。子哭レ之慟。從者曰。子慟矣。曰。有レ慟乎。非二夫人爲慟一而誰爲。」とあるのによつたもの。

この時、孔子は六十二歳、顏回は三十二歳であつたと推定されてゐる。愛する弟子の死にあつて、聲をあげて泣いた孔子の心中察すべく、大聖孔子の、血あり涙ある眞の人間味が髣髴としてあらはれてゐる。「まさに後繼者を失つた者の悲痛な叫びでなくて何であらう」といふ句に無限の意味がこもつてゐるところを讀取らせなければならぬ。

（三）第二章に入つて、かくの如く深い情誼恩愛の、由つて來る所は一朝一夕のものでないこと終生渝らぬ師弟の交の間に起つた一つの事件をあげたもの。

匡の地での災厄は、孔子の顏が亂暴者の陽虎に似てゐたために起つた不慮の禍であつたが、孔子の自若たる度量と信念とは、參考の文に引いた論語の言葉によつて明らかであり、五十餘歳の孔子が、一青年の顏回を信じ愛し案じた心持がにじみ出てゐる。深く讀み味はふべき眞實の言葉である。

論語先進第十一に「子畏二於匡一。顏淵後。子曰。吾以レ女爲レ死矣。曰、子在、回何敢死。」

（四）第三章になると、更に陳・蔡の厄にあつた時のことを述べて、七日七夜の絶食に、困難に際會してはじめて人の心がわかるものだといふことの實證を示して、顏回の偉さを稱へる。

子路や子貢といふやうな高弟さへも、尙かつ、不平がましい言葉があつたのに、顏回ひとり師を信ずること益々強く、

師を慰めて、「君子を容れないのは世の中の恥でございます」といひ、孔子は深く滿足して、「顏回よ。お前が富貴であつたら、予はお前の家の家令にならうぞ。」とまで言つたのであつた。前章につゞいて、この師弟の結實と愛情とをよく讀み取らせなければならない。

(五) 第四章は、孔子の理想とした仁についての教である。人を見て法を說く孔子の教育と、その理想とした仁の道の深遠な妙味にふれさせたい。孔子は、いつも、弟子の才能に應じて、わかる程度に教へたのである。仁について、多くの人に、それ〴〵部分的な仁の道を說いたのであるが、顏回にだけは、「克己復禮」の本義を述べ、その實行方法として、一切の生活を禮節に從ふべきことを教へた。然も顏回はその教の通りに實行することが出來たのである。仁と禮節との、論語の中心思想を分り易く說いたものであるから、讀解には特に、これを教として知るのみならず、正しい道を守らうとする感激を覺えさせ、大聖の示した正しい道に精進せんとする奮發心を起させるところまで導いて行き度いものである。

(六) 第五章は、一を聞いて十を悟り、すぐ會得して直ちに實行にかゝる顏回の達德を十分に知つて、これを愛し導いた孔子の偉大さと、その偉大な師をほんたうによく知つて、どこまでも從つた顏回の理解と信賴との深さとを對照したもの。師弟の道に於ける最も美しい心情にふれさせて、學問道德の道を進むものの、深く感銘して生涯の信條とするやうに指導したい。

(七) 第六章は、魯の哀公と孔子との問答を引いて、孔子の顏回に對する信賴の深さをあらはし、顏回を想ふ追憶の情をこめ心しづかな物語の中にこの一文を結んでゐる。

論語の雍也第六に、「哀公問、弟子孰爲レ好レ學。孔子對曰、有二顏回者一、好レ學、不レ遷レ怒、不レ式レ過。不幸短命死矣。今也則亡。未レ聞二好レ學者一也。」とあるによつたもので、怒をうつさなかつた顏回の德のすぐれてゐたことを死後も尙愛惜してやまぬ孔子の心情が深く察せられる。

## 三　朗讀

| 頁 | 本文 |
|---|---|
| 29 | ダイ　ゴ。。コーシト　ガンカイ。。 |
| 30 | イチ。。 |
| | アー。テンワ　ヨオ　ホロボシタ。。テンワ　ヨオ　ホロボシタ。。 |
| | シチジッサイノ　タイセー　コーシワ。デシガンカイノ　シニ　アッテ。コエオ　アゲテ　ナイタ。。 |

### 朗讀上の注意

○「あゝ」のアクセントは不定。

〔參考〕
ガンカイ（顏回）
ガンカイ（眼界）
イチ（一）
イチ（位置・市）
ヨ（代）
ヨ（夜・餘・世・余）
シ（詩）
シ（四・死・氏・師・資）

サンゼンニンノ デシノ ウチ。ガンカイホド ソノ
シ|オ シリ。シ|ノ オシエオ マモ|リ。シ|ノ オシエオ
ジッコースル コト|ニ ココロガケタ モノ|ワ ナカッタ。
コレ|コソワ。ワ|ガ ミチオ ・ツタエ ウル。タ|ダ ・ヒトリ
ノ デシ|ダト。コーシワ カネテカラ ・フカ|ク シンライ
シテ イタ。ソノ ガンカイガ トシ| ワカ・クテ ナクナ
ッタノデ ア|ル。
ア|ー。テンワ ヨ|オ ホロボシタ。テンワ ヨ|オ ホロ
ボ・シタ。
マサニ コーケーシャオ ウシナッタ モノノ ・ヒツーナ
サケ|ビデ ナ|クテ ナンデ アロー。。。
ニ|。。
ジュースーネンマエニ サカノボル。コーシガ。デ・シタ

○次の言葉をそれ〳〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。
「實行することに」
「心掛けた者は」
○「傳へ得る」を別々にいふ時、アクセントは・ツタエ ウルとなる。
〔參考〕
・フカク（深く）
・フカク（不覺）





チオ ツレテ キョート ユー トコロオ トーッタ ト
キ。トツゼン グンビョーニ カコマレタ コトガ ア|ル。
カ|ツテ ヨーコト ユー モノガ。コノ チデ ランボ
ーオ ハタライタ。プコーニモ。コーシノ カオガ ヨー
コニ ニテ イタ トコロカラ。キョージンワ コーシオ
トリカコンダノデ ア|ル。コノ トキ。オクレバセニ
カケツケタ ガンカイオ ミタ コーシワ。ホット シナ
ガラ。
オ|ー。ガンカイ。オマエワ ブジデ ア|ッタカ。シンダ
ノデワ ナ|イカト シンパイシタ。
ト イッタ。スルト ガンカイワ。
センセーガ イ|キテ イラッシャル カ|ギリ。ドー・シテ
ワタクシガ シネマショー。
ト コタエタ。

○「此の地で」を別々にいふ時、アクセントはコノ チ|デとなる。
○「此の時」を別々にいふ時、アクセントはコノ トキとなる。
○「おゝ」のアクセントは不定、此の孔子の言葉は靜に感情をこめて。

コーシワ　ゴジューヨサイ。ガンカイワ　イチ|セーネンデ　アッタ。ワガ　ミノ　ウエノ　アヤウサモ　ワスレテ。コーシワ　トシ|ワカイ　ガンカイオ　・ヒタスラニ　アンジ。マタ。ガンカイワ　コレホドマデ。ソノ　シ|オ・シタッテ　イタノデ　アッタ。

サン。

ソレカラ　スーネン　タッテ。チン。サイノ　ヤク|ガアッタ。コーシワ　ソノ　クニエ　イコート・シテ。デシ|タ・チト　トモニ。チン。サイノ　ノオ　リョコーシタ。アイニク　コノ　・チホーニ　センランガ　アッテ。ミチワハカドラズ。ツイニ　リョーショクガ　・ツキテ　シマッタ。ナヌカ　ナナヨ　コーシモ　デシモ。ロクロク　ク|モ

〔參考〕
トシ|（年）
トシ（都市）

〔參考〕
マタ（又）
マタ|（股・又）
ヤク|（厄）
ヤク（約・譯）
○「地方」のアクセントはチ|ホーともいふ。
〔參考〕
ミチ（道）
ミ|チ（未知）





ノ|ガ　ナ|カッタ。

コンナンニ　サイカイスルト。オノズカラ　・ヒトノ　ココロガ　ワカル　モノ|デ　アル。デシ|タチノ　ナ|カニワブツブツ　フヘーオ　モラ|ス　モノ|ガ　アッタ。キイッポンナ　シロガ。トガリ|ゴエデ　コーシニ　イッタ。イッタイ。トクノ　オサマッタ　クンシデモ　コマラレル　コトガ　アルノデ・スカ。

トクノ　アル　モノ|ナラ　テンガ　タ・スケルハズダ。タ・スケナイ　トコロオ　ミルト。センセーワ　マダ　クンシデワ　ナ|イノカ。シロニワ　ヒョットスルト。ソーユー　カンガエガ　ワイ|タノカモ　シレヌ。コーシワ　ヘーゼント・シテ　コタエタ。

クンシダッテ。コマル　バアイワ　アル。タ|ダ　コマリカタガ　チガウゾ。コマッタラ　ワルイ　コトデモ　ナ|

○「わかるものである」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

○「一體德の修つた」からの子路の言葉は不平をみなぎらせ突かゝるやうな調子で、「あるのですか」の終りは下り調子がよい。

第五　孔子と顏回

○「君子だつて」からの孔子の言葉は冷靜に教へ諭すやうにいふ。

ンデモ スルト ユーノガ ショージンデ アルクン
シワ ソコガ チガウ。
シコート ユー デシガ イッタ。
センセーノ ミチワ アマリニ オーキスギマス。ダカ
ラ ヨノナカガ センセーオ ウケイレテ モテーヨー
ト シマセン。 センセーワ。スコシ カゲンオ ナサ
ッタラ ドーデショー。

コーシワ コタエタ。

サイクノ ンマイ ダイクガ。カナラズ ヒトニ ホメ
ラレルト キマッテワ イナイ。ホメラレナイカラト
イッテ。ウデマエオ カゲンスルノガ ハタシテ ヨイ
ダイクダローカ。クンシモ オナジ コトダ。ミチノ
オサマッタ モノガ。カナラズ ヒトニ モチーラレ
ルトワ キマッテ イナイ。ダカラト イッテ カゲン

〔參考〕
ヨイ（善い）
ヨイ（宵）
ヨイ（醉）





オシタラ。ケッキョク。ヒトニ モチーラレル タメ
ニワ。ミチワ ドーデモ ヨイト ユー コトニ ナリ
ワシナイカ。

ガンカイワ シオ ナグサメル ヨーニ イッタ。
ヨノナカニ イレラレナイト ユー コトワ ナンデモ
アリマセン。イマノ ミダレタ ヨニ イレラレナケ
レバコソ。ホントーニ センセーノ オーキー コトガ
ワカリマス。ミチオ オサメナイノワ クンシノ ハ
ジデ ゴザイマスガ。クンシオ イレナイノワ ヨノナ
カノ ハジデ ゴザイマス。

コノ コトバガ。コーシオ ドンナニ マンゾク サセタカ。
ガンカイヨ。オマエガ フーキデ アッタラ。ヨワ オ
マエノ イエノ カレーニ ナローゾ。

○「いふことは」を別々にいふ時、アクセントはユー コトワとなる。

○「恥でございます」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

シ。。

コーシワ デシニ ミチオ トクノニ。デシノ サイノーニ オージテ ワカル テードニ オシエタ。。コーシノ リソート スル ジンニ ツイテモ。アル モノニワ。ヒトオ アイスル コトデ アル ト イー。アル モノニワ。ヒトノ アッコーオ イワヌ コトデ アル トトキ。アル モノニワ。ムズカシー コトオ サキニ スル コトデ アルト オシエタ。。イズレモ ジンノ イチブノ セツメーデ。ソノ オコナイ ヤスイ ホーメンオノベタノデ アル。。トコロデ ガンカイニワ。オノレニ カッテ レーニ カエルノガ ジンデ アル。。ト オシエタ。。アラユル ヨクボーニ ウチカッテ。レー

〔參考〕
トキ（說き・解き・溶き）
トキ（時）





オ ジッコーセヨト ユーノデ アル。。ソノ ジッコーホーホート シテ。

ヒレーワ ミルナ。。ヒレーワ キクナ。。ヒレーワ ユーナ。。ヒレーニ ウゴクナ。。

ト オシエタ。。アサ オキルカラ ヨル ネルマデ。ミルコト。キク コト。ユー コト。オコナウ コト。イッサイ レーセツニ シタガイ。レーセツニ カナエヨトユーノデ アル。。ココニ ジンノ ゼンタイガ トカレテイル。。ソーシテ。ガンカイナレバコソ。コノ モットモ ムズカシー オシエオ。ソノママ ジッコースルコトガ デキタノデ アル。。。

ゴ。。

第五 孔子と顏回

〔參考〕
キク（聞く・利く）
キク（菊）
アサ（朝）
アサ（麻）

コーシワ　ガンカイオ　ホメテ。

ガンカイワ　ヨノ　マエデ　オシエオ　ウケル　トキ。

ダマッテ　イルノデ。ナンダカ　ボンヤリモノノ　ヨーニ　オモワレルガ。サテ　シリゾイテ　ヒトリデ　イルトキワ。シノ　オシエニ　ツイテ　ナニカ　ジブンデ　クフーオ　コラシテ　イル。ケッシテ　ボンヤリモノデワ　ナイ。

ト　イッテ　イル。マタ。

タノ　デシワ。オシエニ　ツイテ　イロイロ　シツモンモ　シ。ソレデ　ヨオ　ケーハツシテ　クレル　コトガアル。シカシ。ガンカイワ　シツモン　ヒトツ　セズ。スグ　エトクシテ　ジッコーニ　カカル。カレワ　イチオ　キーテ　ジューオ　シル　オトコダ。トモ　イッテイル。

○「ぼんやり者のやうに」を別々にいふ時、アクセントはボンヤリモノノ　ヨーニとなる。

○「啓發してくれることがある」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。





コーシガ　ヨク　ガンカイオ　シッテ　イタ　ゴトク。ガンカイモ　マタ　ヨク　ソノ　シオ　シッテ　イタ。ガンカイワ　コーシオ　タタエテ。

センセーワ　アオゲバ　アオグホド　タカク。セッスレバ　セッスルホド　オクフカイ　オカタダ。オーキナチカラデ。グングント　ヒトオ　ヒッパッテ　イカレル。トテモ　センセーニワ　オイツケナイカラ。モート　オモッテモ　ヤハリ　ツイテ　イカザルオエナイ。ワタクシガ　チカラノ　アランカギリ　シューシテモ。センセーワ　イッデモ　サラニ　タカイロニ　タッテ　オイデニ　ナル。ケッキョク。アシモトニモ　ヨリツケナイト　カンジナガラ。ツイテ　イクノデ　アル。

ト　イッテ　イル。ガンカイ　ナレバコソ。イダイナ　コー



○「何時でも」のアクセントはイッデモともいふ。

シノ　ゼンメンオ　ヨク　ミトメル　コトガ　デキタノデ
アル。。

ロク。。

センセーガ　イラッシャル　カゼリ。ドーシテ　ワタク
シガ　シネマショー。
ト　イッタ　ガンカイガ。センセーヨリモ　サキニ　シン
デ　シマッタ。。
アルヒ。ロノ　アイコーガ　コーシニ。
オンミノ　デシノ　ウチ。モットモ　ガクオ　コノム
モノワ　タレカ。
ト　タズネタ。コーシワ。
ガンカイト　ユーノガ　オリマシタ。。ガクオ　コノミ。

○「最も」のアクセントはモットモともいふ。

○「顏回といふのが」からの孔子の言葉はしみ





イカリオ　ウツサズ。アヤマチモ　ニドトワ　シナイ
オトコデ　ゴザイマシタガ　フコーニモ　タンメーデ
ゴザイマシタ。
ト　コタエタ。。
イカリオ　ウツサズ。ト　ユー　コトバニ。アノ　チン
サイノ　ヤクデ。シロヤ　シコーガ。クンシデモ　コマ
ラレル　コトガ　アルノデスカ。トカ。センセーノ　ミチ
ワ　アマリニ　オーキスギマス。ナド。フヘーガマシク
イッタ　トキ。ガンカイダケガ　ヘーゼント　シテ。ヒタ
スラニ　コーシオ　タタエ。コーシオ　ナグサメタ　コト
ガ　オモイダサレルデワ　ナイカ。。。

じみと感慨をこめていふ。

○次の言葉を續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。
「男でございましたが」
「短命でございました」

## 指導概要

### (一)　教　材

(1)　全文を通讀させ、默讀、音讀を繰返して讀解を深めつゝ、次のやうに各章の大意を把握させ、全文の構想を系

続づけて、文意を概觀させる。

第一章　後繼者顏回を失つた孔子の悲嘆。

第二章　匡の禍に於ける孔子の愛情と顏回の師に對する信賴思慕。

第三章　陳・蔡の厄に於ける孔子の信念と顏回の卓然たる態度。

第四章　孔子の仁の教と顏回の德の高さ。

第五章　眞に顏回を知る師と、眞に師を知る顏回との偉大さ。

第六章　魯の哀公との問答に顏回を追憶する孔子の心情。

(2) 第四章に、論語によつて孔子の理想とする仁について、顏回をその全體に達した人物として、儒教の中心思想を述べ、これをやまにして孔子と顏回との師弟の情誼の深さ强さを讀取らせる。

論語の原據については、六年の兒童であるから、參考に提出したもののうち、分り易い程度のもの、及び仁に關する孔子の言葉、又は論語中の有名な語句等を提出して、解說を試みるがよい。

但し、論語について解說することは、本文讀解の補助的教材であつて、目的ではないから、あくまで本文の讀解そのものを中心にして、四章又は五章等の取扱の際に加へるか、或は讀解指導後の參考として取扱ふといふ程度でありたい。

(3) 原據の漢文の取扱については、本文の文學的表現の妙味を讀取らせることが主で、簡單な言葉をこれほど現代語として平易に然も要點をとらへて表現したものは珍しい。讀解は、この現代的表現に卽して行はれるのであるから、文意を把握することは、文中の孔子及び顏回の言葉を諳誦するほどまで讀ませて、自ら完成されるのであるが、將來の漢文學的の基礎として、簡單な論語中の原文を漢文で提出し、返り點の訓讀法の一端にふれさせてみることも、餘裕があつたらやつてみたいところである。

(二) 挿畫

(1) 三十一頁は匡人の禍にあつた孔子の一行。車中の人物が孔子。

(2) 四十頁は孔子の像。

## 三　參考

(1) 子畏二於匡一。曰。文王既歿。文不レ在レ茲乎。天之將レ喪二斯文一也。後死者不レ得レ與二斯文一也。天之未レ喪二斯文一也。匡人其如レ予何。（子罕篇）

（子、匡に畏す。曰く、文王既に歿して、文茲に在らずや。天の將に斯の文を喪さんとするや、後死の者、斯の文に與るを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せんと。）

(2) 顏淵問レ仁。子曰。克レ己復レ禮爲レ仁。一日克レ己復レ禮。天下歸レ仁焉。爲レ仁由レ己。而由レ人乎哉。顏淵曰。請二問其目一。子曰。非禮勿レ視。非禮勿レ聽。非禮勿レ言。非禮勿レ動。顏淵曰。回雖二不敏一。請事二斯語一矣。

（顏淵仁を問ふ。子曰く、己に克ちて禮に復るを仁となす。一日己に克ちて禮に復れば、天下仁に歸す。仁を爲すは己に由る。人に由らんやと。顏淵曰く。其の目を請ひ問ふと。子曰く。非禮は視ること勿れ、非禮は聽くこと勿れ。非禮は言ふこと勿れ、非禮は動くこと勿れと。顏淵曰く。回不敏なりと雖も。請ふ斯の語を事とせんと。（參考）仁に歸す（天下其の仁に歸服す、或は、仁に歸す（我に仁を歸し許して仁者と稱へる）と訓む。

（顏淵第十二）

(3) 顏淵喟然歎曰。仰之彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文。約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之。末由也已。（顏淵喟然として歎じて曰く。之を仰げば彌々高く。之を鑽れば彌々堅し。之を瞻れば前に在り。忽焉として後に在り。夫子循循然として善く人を誘く。我を博むるに文を以てし。我を約するに禮を以てす。罷めんと欲すれども能はず。既に吾が才を竭す。立つ所ありて、卓爾たるが如し。之に從はんと欲すと雖も。由なきのみと。

(4) 子曰。賢哉回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。（子曰く。賢なる哉回や。一簞の食、一瓢の飲。陋巷に在り。人は其の憂に堪へず。回や其の樂を改めず。賢なる哉回や。）（雍也第六）

# 第六　西山莊の秋

## 一　要旨

大日本史を編纂して大義名分を正し、忠臣義士を顯彰し、皇國の姿を明らかにしようと專念する老いたる西山公光圀の、山莊に於ける秋の一日の生活を描いた文を讀ませ、其の崇高な人格に感ぜしめるのが本課の要旨である。

## 二　指導觀

(一) 光圀が致仕して西山莊に閑居したのは元祿四年五月で、十三年十二月六日七十歲を以て薨ずるまで此の山莊で修史にいそしんでゐた。本課は五年の九月頃の或る日の午後の生活を敍したものである。山氣の迫る靜寂の中に烈々たる修史の眞心が讀味ははれる。

(二) 文の機構を五段に分ける。第一段は西山莊の秋晴れの此の日の光景で、かすかな寒さを感ずる雨上りの秋晴れ、濃い綠、白い脈をあざやかに見せるくまざさ、心字池に枝をさしのべた楓の色づき、麗らかな美しき而も靜な閑びやかな光景である。

(三) 第二段は文箱の書面を見入つてからの思ひにふける老公の描寫である。「文箱から一通の書面を取出して靜かに讀返した。それは、楠公の碑を建てに行つてゐる家臣からの手紙である」今年六月家臣佐々宗淳を派して湊川に楠公の碑、「嗚呼忠臣楠子之墓」を建てさせた。此の宗淳から建碑の滯りなくすんだとの報せの書面である。「湊川の

建碑もとゞこほりなくすんだ。忠臣の靈は慰められ、功績は一だんと明らかになつた」老公の滿足げな面ざしが浮ぶ。やがて思は過ぎにし日にと向ふ。「何年前のことであつたらう、自分が江戸の屋敷で史記を讀み、史書の力の偉大なことに感動したのは」これは正保二年初めて史記伯夷傳を讀み、慨然として修史の心を起し、且つ兄賴重を越えて世子たりしを悔いたのをいふのである。「それから歴史編纂を思ひ立ち、始めて史局を置いて學者を集めた時の喜びを」これは明暦三年江戸駒込の下屋敷に史局を設け、佐々宗淳、安積覺、大串元善、栗山愿等の學者を集めた時の喜びを思ひ出してゐる。「彰考館を設け、自ら其の額を書いた時の輝かしい希望」は寛文十二年の春、小石川の藩邸今の後樂園一帶の地に史局を移し、彰考館と稱した時の希望に滿ちた頃の思ひ出をさしてゐる。老公には「……感動したのは」「……時の喜び」「……輝かしい希望」と過ぎ越し方を思ひ出し、「それらが今新な感激となつてよみがへつて來る」のである。そして「かうして大義名分が正され、忠臣・義士の眞心があらはれ、皇國の姿が次第に明らかになつて行くのである」と、身動きもせず、ぢつと一方を望みながら思ひにふけつてゐるのである。

(四)　第三段は西山莊に於ける老公の生活の一面を描き出した農民との素朴な情景である。「しばし思にふけつてゐた光圀が、我にかへると突然人聲が聞えて來た」しかも「それは、聞きなれた里人の聲である」「光圀は思はずほゝ笑んだ」名君であつた光圀、忠臣義士、孝子節婦の顯彰に意を用ひ、大義名分を正す光圀は朴訥な里人をも親しみよき友とした。里人も亦日毎に老公を訪ひ、季節物を贈つたのであつた。「そこには青々とした野菜を持つた老人が二人頭を下げてゐる」「光圀は喜んで老人たちを招じ入れ、野菜の出來や稻作の模樣などを得意になつて語るのを熱心に聞いた」「喜んで」「熱心に聞いた」に老人の敬仰すべき偉大さが表はれてゐる。

(五)　第四段は再び書齋の人となつた老公が、修史の大業に思ひを馳せるのである。「自分が修史に志してからすでに長い月日を過したが、其の業は遲々として進まぬ」「自分の餘命は、いくばくもない」もどかしくも思つた事であらう。「しかし、自分の氣持を知つてくれる子供たちや家臣の者は、後を繼いで必ずこれを成し遂げてくれるであらう」「自分は此のまゝ世を去つても、精神は永遠に生きる」眞にさうであつた。大日本史の偉大なる事業は彼の子孫、彼の家臣と其の子孫、此の老公の遺志を體して遂に明治三十九年にして其の業を竣へたのであつた。「尊皇の大義に、すべての人が目覺める時が必ず來るに違ひない」明治維新はこれによつて成つた。これによつて現代の聖世は出現したのである。かく將來に思を馳せた老公は「また朱筆を取つて、史稿の訂正に取りかかつた」

(六)　第五段は夕闇迫る此の日の光景で、「暮れやすい秋の日は早くも池の彼方に沒し、老松のあたりにはもう夕やみが迫つてゐた」老公はなほも一心に訂正を續けてゐる。



## 三　朗讀

### 本文

ダイ　ロク。セーザンソーノ　アキ。

ミッカホド　フリツズイタ　アキサメガ　カラリト　ハレテ。キョーワ　イチダント　レーキガ　クワワリ。カス

### 朗讀上の注意

〔參考〕

アキ（秋・安藝）
アキ（明）
アキ（飽）
ハレ（晴）
ハレ（腫）
キョー（今日・京・凶）
キョー（經・興）

カナ　サムサオサエ　カンジル。。アメニ　アラワレタ　ツ・
キヤマノ　クマザサガ。コイ　ミドリノ　ハニ　シロイ
スジオ　ミセ。シンジノ　イケニ　エダオ　サシノベタ
カエデワ。モー　イロズキハジメテ　イル。。。

ダイニホンシノ　ソーコーニ　カヒツシテ　イタ　ミ
・ツクニワ。フト　オモイダシタ　ヨーニ　フミバコカラ
イッツーノ　ショメンオ　トリダシテ　シズカニ　ヨミカ
エシタ。。ソレワ　ナンコーノ　ヒオ　タテニ　イッテ　イ
ル　カシンカラノ　テガミデ　アル。。ミナトガワノ　ケン
ビモ　トドコーリナク　スンダ。。チューシンノ　レーワ
ナグサメラレ。コーセキワ　イチダント　アキラカニ　ナ
ッタ。。ナンネンマエノ　コトデ　アッタロー。ジブンガ
エドノ　ヤシキデ　シキオ　ヨミ。シショノ　チカラノ

アメ（雨）
アメ（飴）
ミセ（見せ）
ミセ（店）

○「とどこほりなく」を別々にいふ時、アクセントはトドコーリ　ナクとなる。

○「力」のアクセントは單獨ではチカラであるが助辭のが付くとチカラノと平板になる。





イダイナ　コトニ　カンドーシタノワ。。ソレカラ　レキシ
ヘンサンヲ　オモイタチ。ハジメテ　シキョクオ　オイ
テ　ガクシャオ　アツメタ　トキノ　ヨロコビ。ショーコ
ーカンオ　モーケ。ミズカラ　ソノ　ガクオ　カイタ　ト
キノ　カガヤカシー　キボー。ソレラガ　イマ　アラタナ
カンゲキト　ナッテ　ヨミガエッテ　クル。。コーシテ
タイギ　メーブンガ　タダサレ。チューシン　ギシノ　マ
ゴコロガ　アラワレ。ミクニノ　スガタガ　シダイニ　ア
キラカニ　ナッテ　イクノデ　アル。。。

シバシ　オモイニ　フケッテ　イタ　ミツクニガ。ワレ
ニ　カエルト　トツゼン　ヒトゴエガ　キコエテ　キタ。。
ソレワ。キキナレタ　サトビトノ　コエデ　アル。。ミツク
ニワ　オモワズ　ホホエンダ。。エンズタイニ　イリグチノ

○「明らかに」のアクセントはアキラカニともいふ。

ホーエ　イクト。ソコニワ　アオアオト　シタ　ヤサイ
オ　モッタ　ロージンガ、フタリ　アタマオ　サゲテ　イ
ル。。ミツクニワ　ヨロコンデ　ロージンタチオ　ショージ
イレ。ヤサイノ　デキヤ　イナサクノ　モヨーナドオ
トクイニ　ナッテ　カタルノオ　ネッシンニ　キータ。。
ロージンタチガ　カエルト。ミツクニワ　フタタビ　シ
ヨサイノ　ヒトト　ナッタ。。ジブンガ　シューシニ　ココ
ロザシテカラ　スデニ　ナガイ　ツキヒオ　スゴシタガ。
ソノ　ギョーワ　チチト　シテ　ススマヌ。。ジブンノ　ヨ
メーワ。イクバクモ　ナイ。。シカシ。ジブンノ　キモチオ
シッテ　クレル　コドモタチヤ　カシンノ　モノワ。ア
トオ　ツイデ　カナラズ　コレオ　ナシトゲテ　クレルデ
アロー。。ジブンワ　コノママ　ヨオ　サッテモ。セーシ
ンワ　エーエンニ　イキル。。ソンノーノ　タイギニ　スベ

○「熱心」のアクセントはネ|ッシンともいふ。

○「其の業は」を別々にいふ時、アクセントは
ソノ　ギ|ョーワとなる。

○「くれるであらう」と續けていふ時、下の語
のアクセントはあまり高くならない。





テノ　ヒトガ　メザメル　トキガ　カナラズ　クルニ　チ
ガイナイ。。ソー　オモイナガラ。ミツクニワ　マタ　シュ
フデオ　トッテ。シコーノ　テーセーニ　トリカッカタ。。

クレヤスイ　アキノ　ヒワ　ハヤクモ　イケノ　カナタ
ニ　ボッシ。ローショーノ　アタリニワ　モー　ユーヤミ
ガ　セマッテ　イタ。。

## 四　指導概要

### (一)　教　材

(1)　本教材取扱に當つては光圀公の事跡、大日本史の事など補説して、此の文の背景を作つてやるがよい。

(2)　靜に讀み浸らせ、靜かな中に力强い精神の溢れてゐる點を玩味させなければならない。

(3)　文の機構に從つて精讀させ、特に老公の思索に耽る情景を讀み取らせ、其の人格に觸れさせなければならない。

(4)　新出文字として局、額の二字、讀替文字として雨、築、文、繼、覺、松の六字であるが、困難を感ずる事はない。讀みを十分多くするがよい。

### (二)　挿　畫

第六　西山莊の秋

西山莊の實景寫眞である。其の質素なことに驚く。向つて左に小さな窓がある。こゝが老公の書齋で、其の前の處に心字の池がある。

三　準備

西山莊（久慈郡太田町）を示す地圖、西山莊の寫眞、大日本史、

# 第七　鎌倉

一　要旨

歴史の都であり、懷古の地である鎌倉を全然懷古的な態度で歌つたものが此の教材である。鎌倉時代の史的事實を中心とし、歴史の知識を背景として玩味鑑賞せしめるのが本課である。

二　指導觀

（一）舊讀本卷十二にも載せられた教材で、讀本に唱歌に馴染の深い課である。併しながら幾度繰返されても味はうべきよい教材である。稀世の英雄頼朝が此處に幕府を開き、其の幕府を中心として大小の館棟を並べ立ち、肥馬に跨る武士が鞭を振つての揚々たる、市女笠を目深に楚々たるそれらの姿を大路小路に現はす樣、ましてや此處に演ぜられた大小幾多の悲劇を思ふ時、吾等の一木一石に對する懷古の情は汲めども盡きぬものがある。

（二）此の詩の作者は其の巡路を七里が濱からとつた。波打寄せる七里が濱を磯傳ひに行つて稻村崎に達した。そしてあゝ此處こそ「名將の劍投ぜし古戰場」であると當時を追懷した。名將は卽ち新田義貞で、元弘三年五月鎌倉攻の時、此處に向つた義貞は名劍を投じて海神に祈り、以て海潮の干間を待つて鎌倉へ亂入し、遂に高時以下一族を亡ぼして建武中興の大業の一因を作つた。作者は實に此の稻村崎を見たのであつた。

（三）道を左にとつて極樂寺坂に向つた。左が極樂寺、右が坂である。義貞の部將大館宗氏は一隊を率ゐて此の坂の突破を企てたが遂に成らずして一族悉くたふれたのであつた。附近に其の墓がある。作者はこれも見た事であらう。坂を越えて長谷に出で、鎌倉最古の寺院で坂東巡禮第四の札所たる長谷觀音に詣で、近くの「露坐の大佛」を拜した。頼朝大佛を鑄んとして志果さず、稻多野尼の盡力により執權北條泰時の曆仁元年に初めて出來たが、大風のため破壞し、再び稻多野尼の力によつて建長四年八月出來上つた。大慈大悲の相を具へた圓滿な相好は獨り我が國に於けるのみならず、世界に於ける優秀逸品として名高い。明應四年八月十五日、由比が濱の海浪激揚して堂を壞つたので、今は露坐の大佛となつた。

（四）作者は其の昔鎌倉武士が笠懸流鏑馬等の武技を演じたといふ「由比の濱邊」、靜御前の子を沈にかけたといふ「由比の濱邊」を右手に見て、「雪の下」を過ぎて遂に「八幡宮の御やしろ」に達した。康平六年八月源頼義東征の折。山城の石清水八幡宮を由比の鄕鶴が岡に勸請し、鶴岡八幡宮と申し義家修理を加へたのを、頼朝治承四年鎌倉に入るやこれを大臣山の麓に遷した。今の若宮といふのがそれである。建久二年頼朝更に大臣山の中腹に新宮を營み別に八幡を勸請した。これが今の八幡宮である。

（五）作者は八幡宮を拜すべく「石のきざはし」を上つた。左に「高き大いてふ」がある。隱れ銀杏の立札がある。承久三年正月二十七日の夜酉の刻、將軍實朝が八幡宮で拜賀の式を擧げての歸るさ、此のきざはしを下る途中、兄頼

家の子公曉が闇にまぎれて此の銀杏の下より飛出し、「親の敵はかく討つ」と叫んで實朝を殺した所である。作者はしばし大銀杏を仰ぎ見て追懷の情にたへず、「問はばや遠き世々の跡」と歌つてゐる。

（六）「きざはし」を下り、左、朱塗の「若宮堂」に來た。文治二年四月八日頼朝、夫人政子と共に此の若宮に參拜した。此の序を以て靜御前を召して此處で舞を舞はしめようとした。靜は病と稱して固辭したが、政子の强つての勸めで立つて舞つた。工藤祐經鼓をうち、畠山重忠が銅の拍子をとつた。靜は

「吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞこひしき」

「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」

と歌ひつ舞つた。其の歌絶妙、其の舞優麗、荒くれものの坂東武士皆感に入り涙を催したが、獨り頼朝は大に怒り、「關東の武運長久を祈るべき場合、謀反人義經を慕ふとは何事ぞ」と叫んだ。政子のなだめにより漸く事なきを得た。作者は此の哀れな靜御前を懷ひ、第五齣全部に其の情を盛つた。

（七）靜御前に哀れを抱きながら頼朝の館跡の邊を歩んだ作者は、やがて二階堂谷の「鎌倉宮」に詣でた。宮幣中社、大塔宮護良親王を祀つた社である。親王建武中興の鴻業に參し、櫛風沐雨其の功を見るや、逆臣尊氏の讒に會ひ、建武元年五月此處二階堂谷東光寺の土牢に幽せらるゝ處となり、後北條時行此の地に入つて事を起すや、尊氏の弟直義、臣淵邊義博をして弑し奉らしめたのであつた。御齡二十八歳の御身を以て萬斛の御恨を呑んで其の毒手にかゝらせ給うた事、われ人共に「悲憤の涙」禁じ得ない。作者は此の情を第六齣に漲らしてゐる。

（八）「悲憤の涙」にむせんだ作者は道を返して頼朝の墓前に立つた。歷史は長い。頼朝が幕府を開いてから最早七百年もたつた。その間に興亡は繰返された。源氏三代にして亡び、之に代つた北條氏九代にして亡び、足利氏、織田氏、豐臣氏、德川氏、興り亡び衰ふ、一切の事件一切の轉變も大自然の流轉に包攝されて行くを見れば、七百年間の興亡轉變は皆「夢に似てゐる」のである。作者は「こけむした」英雄頼朝の墓を見てかく感じたのであつた。

（九）名將を偲び、靜御前に哀れをとゞめ、護良親王に悲憤の涙を流し、こけむした頼朝を見て治亂興亡を夢の如しと歎じた作者は、續いて建長寺圓覺寺に詣でた。建長寺は北條時頼の建立、圓覺寺は時宗の建立で、何れも鎌倉五山の一である。高き山門の左右には高き松がある。由比が濱より吹き寄せる習々の松風には何が籠るか、鎌倉時代のあり し事、起りし事、一切の聲、一切の音、一切の響が皆含まれて聞えるやうにと作者には思へてならなかつた。夕を告ぐる寺の鐘は松風を突いて長く響いた。



## 三　朗讀

### 本文

ダイ　シチ。カマクラ。

シチリガハマノ　イソズタイ。

イナムラガサキ　メーショーノ。

ツルギ　トーゼシ　コセンジョー。

第七　鎌倉

ゴクラクジザカ　コエ　ユケバ。
ハセカンノンノ　ドー　チカク。
ロザノ　ダイブツ　オワシマス。。

ユイノ　ハマベオ　ミギニ　ミテ。
ユキノ　シタミテ　スギ　ユケバ。
ハチマングーノ　オン　ヤシロ。。

ノボルヤ　イシノ　キザハシノ。
ヒダリニ　タカキ　オー　イチョー。
トワバヤ　トーキ　ヨヨノ　アト。。

ワカミヤドーノ　マイノ　ソデ。

〔參考〕
コエ（越え）
コエ（聲）
チカク（近く）
チカク（知覺・地殼）

○「いてふ」を單獨にいふ時、アクセントはイチーである。





シズノ　オダマキ　クリカエシ。
カエシシ　ヒトオ　シノビツツ。。

カマクラグーニ　モーデテワ。
ツキセヌ　ミコノ　ミウラミニ。
ヒフンノ　ナミダ　ワキヌベシ。。

レキシワ　ナガシ　シチヒャクネン。
コーボー　スベテ　ユメニ　ニテ。
エーユー　ハカワ　コケ　ムシヌ。。

ケンチョー　エンカク　フルデラノ。
サンモン　タカキ　マツカゼニ。
ムカシノ　オトヤ　コモルラン。。



第七　錄　倉

■ 指導概要

（一）教材

(1) 通讀の後、作者の順路と選ばれた場所、物、人を擧げさせ、次第に讀みを深めて行く。

(2) 作者は其の場所、物、人について如何なる感を抱いたかを讀みとらせ、補說を加へつゝ作者の感を捉へさせつつ進む。稻村崎の義貞の事、實朝の事、靜御前の事、護良親王の事、賴朝の墓の事など、既習の歷史の知識を喚起しつゝ進めば僅かの補說で進まれることと思ふ。

(3) 唯此の教材には「名將の劒投ぜし」といつて義貞を表はし、「左に高き大いてふ、問はばや……」といつて實朝、公曉を思はせ、「若宮堂の舞の袖、……かへしし人をしのびつゝ」といつて靜御前を出し、「つきせぬ親王のみうらみに」といつて護良親王を偲ばせ、「英雄墓はこけむしぬ」といつて賴朝を指す等、表現上技巧を施してある點は大いに研究させなければならない。殊に「若宮堂の」第五節は舞の事と靜の歌つた「しづやしづ……」の歌を織込んだので兒童には相當の困難が伴ふことと思ふ。親切に指導してやるがよい。

(4) 第七節の「興亡すべて夢に似て」の思想は兒童として高尙過ぎると思はれるから、具體的に說明して其の心持を捉へさせるがよい。

(5) 新出文字は憤の一字、讀替としては邊の一字に過ぎない。文字面をたどつての讀みは頗る樂である。讀みの回數を多くして十分玩味させるがよい。

（二）挿畫

四十六頁のは稻村崎方面より見た七里が濱、海上に江の島が見える。右手が小動が崎、四十七頁の右は大臣山の中腹にある鶴岡八幡宮、石のきざはしに大いてふの蔭がうつつてゐる。左は露坐の大佛、四十八頁の右はこけむした賴朝の墓、高さ五尺六寸、石垣で圍む。法號武皇嚴原大禪門、正治元年正月十三日薨去壽五十三歲としてある。左は圓覺寺、石段を上つての建物は山門である。

■ 準備

掛圖。

神奈川縣地圖。

大日本史。

# 第八　黃瀨川の對面

## 一　要旨

源家の再興を計らんとして間もなき黃瀨川の陣中に於いての、友愛の情に溢れる賴朝義經兄弟の劇的對面を味はは せ、義經記を基とした國民文學を鑑賞させるのが本課の目的である。

## 二　指導觀

（一）本課の取扱に當つては先づ前課を背景とすべきを忘れてはならぬ。鎌倉に幕府を開いた賴朝、靜御前をして若宮堂に舞を舞はしめた賴朝、作者をして興亡すべて夢の如しと歎ぜしめた彼の苔蒸した墓の主の賴朝、此の賴朝にもかうした弟義經との對面の場面があつたのである。貴きは友愛の情である。

（二）本課は起筆の「治承四年十月二十日……兵をかへして黃瀨川に陣す」を吾妻鑑に採り、以下終りまでは義經記を基として綴られたものである。何れにしても兒童をして多讀以て國民文學の特徴を味ははしめなければならない。

（三）本課は大きく見れば黃瀨川に於ける對面の一場面であるが、其の機構を見れば二つの場面となる。即ち第一の場面は義經がはる〳〵奥州より馳せ參じて賴朝に對面を申込む所である。富士川の對陣に於いて、水禽の羽音に驚き周章の極戰はずして遁げ去つた平家、一兵も損せずして凱歌を擧げた源氏、會心の笑をたゝへつゝ退いて黃瀨川に陣した賴朝の得意や思ふべしである。その得意滿面の黃瀨川の陣中は定めし賑はつたことであらう。此の賑はひの陣中の光景こそ第一場面の背景をなしてゐる。「思ひもかけぬに、武者二十騎ばかり、源家の白旗押立てて彼方に現れた」のである。「賴朝の家臣等あやしみ」たのは無理もない。「年の頃二十餘りにて、丈低く、色白く、眼光鋭き一人の武士、たくましき馬にまたがりて進み出で」には義經の風貌風裁がよく描き出されてゐる。「鎌倉殿も忘れ給はぬなるべし」「奥州にありて、御旗あげの事承り、御力をそへ奉らんため、夜を日に繼ぎてはせ參じたり」には兄を輔けて源家の再興を計らうとする義經の誠意と友愛の情が溢れてゐる。これを傳へ聞いた賴朝の「かつは驚きかつは喜び」はさぞかしである。

（四）「幕、張廻らしたる陣營の中には、關八州の大名・小名、星の如く居並びたり。賴朝は上座にひかへ、弟の入來るを今やおそしと待つところ」は本課の山である第二場の背景である。

愈〻對面である。「賴朝、『これへ、これへ』と招き寄せ、つく〳〵と其の顏を見て、先づ涙にむせぶ」「義經も胸ふさがりて、言ふべき言葉を知らず」「や〻ありて賴朝涙を押へ」「と言ひもあへず、涙をはら〳〵と流す」「義經も、涙にくれてしばし返事もせざりしが」「やうやく顏を上げ」これ等の文句には兄弟の胸中と其の動作を描寫して餘すところなく、讀む者をして自ら肅然涙を誘ふものがある。又賴朝の言葉、義經の返事には友愛の情の眞に迫るものがあり、「今日より後は、力を合はせて源家の再興を計り、父上の御憤りを休め奉らん」「今かくはせ參じたる上は、身命をなげうつて兄上のために盡さん」の兄弟の語には源家の再興と、これにより孝道を全うせんとする眞心を盡してゐる。「居並ぶ大名・小名、二人の心をおしはかりて、袖をぬらさぬはなかりけり」はさこそと思ひやられるのである。

## 三　朗讀

第八　黃瀨川の對面

## 讀本指導と朗讀法

### 本文

ダイ　ハチ。キセガワノ　タイメン。

ジショー　ヨネン　ジューガツ　ハツカ。ミナモトノヨリトモ　ヘーケノ　グンオ　フジガワニ　ヤブリ。ニジユー　イチニチ。ヘーオ　カエシテ　キセガワニ　ジンス。コノ　ヒ　オモイモ　カケヌニ。ムシャ　ニジッキバカリ。ゲンケノ　シラハタ　オシタテテ　カナタニ　アラワレタリ。ヨリトモノ　カシンラ　アヤシミテ。

イカナル　ヒトゾ。ナノリ　タマエ。

ト　ヨバワレバ。トシノ　コロ　ハタチアマリ　ニシテ。タケ　ヒクク　イロ　シロク。ガンコー　スルドキ　イチニンノ　ブシ。タクマシキ　ンマニ　マタガリテ　ススミ

〔參考〕

グン（軍・群・郡）
ムシャ（武者）
ムシャシュギョー（武者修業）
ムシャブリ（武者振）

○「如何なる」はイカナルともいふ。
○「名のり給へ」を別々にいふ時、アクセントはナノリ　タマエとなる。
○單獨に「二十歳」を意味する場合のアクセントはハタチである。

〔參考〕

タケ（丈）
タケ（竹）
タケ（他家）

○「進み」のスは何れも母音を無聲化させない方がよい。





イデ。

カマクラドノモ　ワスレ　タマワヌ　ナルベシ。ヨーメー　ウシワカ。イマワ　クロー　ヨシツネト　ユーモノ。オーシューニ　アリテ　オン　ハタアゲノ　コトウケタマワリ。オンチカラオ　ソエ　タテマツランタメ。ヨオ　ヒニ　ツギテ　ハセサンジタリ。カマクラドノニ　ツタエラレヨ。

ト　ユー。ヨリトモ　ソノ　ヨシオ　キキ。カツワロキ　カツワ　ヨロコビテ。カシンオシテ　メシ　イレシム。

マク。ハリ　メグラシタル　ジンエーノ　ウチニワ。カンハッシューノ　ダイミョー　ショーミョー。ホシノ　ゴトク　イナラビタリ。ヨリトモワ　ショーザニ　ヒカエ。オトートノ　イリキタルオ　イマヤ　オソシト　マツト

○「給はぬなるべし」と續けていふ時、ナルベシのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕

ヨ（夜・餘・世・余）
ヨ（代）

○「召入れしむ」を別々にいふ時、アクセントはメシ　イレ　シムとなる。

〔參考〕

マク（幕・膜）
マク（卷く）
マク（蒔く）

○「張廻らし」を別々にいふ時、アクセントはハリ　メグラシとなる。
○「星の如く」を別々にいふ時、アクセントはホシノ　ゴトクとなる。

コロニ。ヨシツネワ　カブトオ　ヌギ。ユミ　トリナオシテ　マクノ　キワニ　カシコマル。ヨリトモ。コレエ　コレエ　トマネキ　ヨセ。ツクズクト　ソノ　カオオ　ミテ。マズ　ナミダニ　ムセブ。ヨシツネモ　ムネ　フサガリテ。ユーベキ　コトバオ　シラズ。ヤヤ　アリテ　ヨリトモ　ナミダオ　オサエ。

ワレ　チチウエニ　オクレ　タテマツリシ　ノチワ。シバラク　イズノ　ハイショニ　アリ。ココロニ　マカセヌ　コトノミニテ。オンミガ　オーシューニ　クダリシヨシワ　カスカニ　キキオヨビナガラ。オトズレモ　セザリシニ。キョーダイノ　ジョーオ　ワスレズ。イッカノ　ダイジニ　ハセクワワリシ　コト。コノ　ウエモナキ　ヨロコビナリ。ムカシ　ゴサンネンノ　カッセンニ。シンラ　サブロードノ。キョーヨリ　ハルバル　ア

○「暮」のアクセントはマクであるが、こゝでは助詞「の」を伴つたために平板式となる。

〔參考〕
ムネ（胸・旨）
ムネ（棟）

○「言葉を知らず」の次は時間的經過を表すため、やゝ間を長くした方がよい。

○「伊豆」はイズともいふ。

○「下りし由は」を別々にいふ時、アクセントはクダリシ　ヨシワとなる。

〔參考〕
ジョー（情・錠）
ジョー（上・丈・場・嬢）

○「大事に」が大切にといふ意味を表す場合、アクセントはダイジニとなる。





ニ　ハチマン　ドノノ　ジンチューニ　マイラレシ。トキ。ハチマン　ドノワ。ナキ　チチウエノ　オワシマシタルニワ　アラズヤ　トテ。ナミダオ　ナガシテ　ヨロコバレタリト　キク。ワレモ　イマ　チチウエノ　ヨミガエラセ　タマエルニ　アイ　マイラスル　ココチス。キョーヨリ　ノチワ。チカラオ　アワセテ　ゲンケノサイコーオ　ハカリ。チチウエノ　オン　イキドーリオヤスメ　タテマツラン。

ト　イーモ　アエズ　ナミダオ　ハラハラト　ナガス。ヨシツネモ。ナミダニ　クレテ　シバシ　ヘンジモ　セザリシガ。ヨーヤク　カオオ　アゲ。

ハイショエ　オンクダリノ　ノチワ。ヨシツネモ　クラマエ　オクラレ。ソコニテ　ジューロクサイ　マデ　シュギョー　シタリ。カクテ　フカク　ココロニ　ケッスル

○「よみがへらせ給へるに」と續けていふ時タマエルニのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕
サイコー（再興・最高）

○「言ひもあへず」の次の間は短くした方がよい。

〔參考〕
ヘンジ（返事）
オヘンジ（お返事）

トコロ　アリ。ハルバル　オーシューニ　クダリテ
ヒデヒラオ　タノミヌ。。イマ　カク　ハセサンジタル
ウエワ。シンメーオ　ナゲウッテ　アニウエノ　タメニ
ツクサン。
ト　ユー。。イナラブ　ダイミョー　ショーミョー　フタリ
ノ　ココロオ　オシハカリテ。ソデオ　ヌラサヌワ　ナカ
リケリ。。。

## 四　指導概要

### (一)　教　材

(1)　本教材は義經記を基としての擬古文であり、其の對話の部分は時代語であるから、通讀の後、現代語化してよく其の心持を會得させ、二人の對面に盛られた眞情流露の美風を味ははせるやう取扱ふがよい。

(2)　國民文學を鑑賞させる爲めの教材であるから、多讀により其の文の調子に馴れさせ、其の調子の持つ妙味を感ぜしめたい。

(3)　新出文字として幕の一字、讀替文字として二十、上、後れ、憤り、修、の五つで、さまで困難はない。何よりも多讀による指導が大切である。



(4)　發展作業として劇化させるがよい。劇化によつて本文の鑑賞の度を高め、文の持つ心持を的確に把握させ得よう。但し實演は兒童には無理である。

### (二)　挿　畫

幕、張廻らした陣營の中、兄弟對面の場面である。正面が賴朝、之に對するのが弟義經、他は關八州の大名、小名である。義經の返事の間と思はれる。

## 五　準　備

掛圖、地圖。

# 第九　末　廣　がり

## 一　要　旨

我が國劇文學の最初のものであり、しかも此の「末廣がり」は狂言中でも傑作であり代表的のものである本文を讀ませて、其の滑稽な諷刺的な面白味を味ははさせ、我が國文學發展のあとを偲ばせる。

## 二　指導觀

(一)　本文は「狂言」といつて我が國劇文學の最初のものである。其の目ざすところは、喜劇卽ち滑稽な、輕いをかしみをおび、時に諷刺をふくんだ芝居の一種である。本文の文章は、狂言そのまゝのものではないが、大體に於て其

の時代の生きた國語を以て表はされて居り、しかも純粹な對話からなる劇で、わが國文學の發展史上極めて大切なものである。しかも此の「末廣がり」は狂言の中での代表的のものであるから、よく其の採擇された趣旨を生かして十分なる指導を要する教材と思はれる。

(二) 本文は、主人の大名が召使の太郎冠者に、明日のお客の引出物に京の町へ末廣がりを買ひにやるのであるが、一人の惡者があつて太郎冠者の無智につけこんで、まんまとだまされてしまつたといふ失敗を、いとも滑稽にかき表はしたものである。讀みをくりかへせば自ら內に湧く面白味、をかしさはそのまゝに味ははれるのであらう。

(三) 太郎冠者の無智は、たいへん人のよい、どこから見ても憎めない性質のものであり、一方、惡者の方も、一度、だましはだましたが、後で太郎冠者が叱られて困るだらうと氣の毒に考へて、はやしと舞ひを敎へて叱られた時の逃げ道を敎へてやるといふ、これも性のよい惡者になつて居り、主人は主人で、あまりの馬鹿らしさに、「すさりをらう」と一度は叱りは叱つたが、遂には冠者といつしよに舞出すといふ三人が三人とも、少しの惡心もなく、いかにも人間味豐かなすがたであり、かたくなな心のわだかまりのない物語である。よく此の點を深め讀み味ははすやうにするがよい。

(四) 殊に冠者の滑稽なところ、惡者のだまし方のいかにもたくみな、しかも自然的な滑稽さ、主人がだん〳〵と浮かれて行くところと三人三樣の面白さを十分に讀み味ははさせねばならない。

(五) 全文純粹な對話文である。しかも成るべく當時の生きた言葉を殆どそのまゝに使つてある點に注意を拂ひ、對話文の妙味を味ははせるとともに、我が國文學發展の上に重要なる一指標であることを偲ばせる。





本文

ダイ　ク。。スエヒロガリ。。

ダイミョー。。コノ　アタリノ　ダイミョーデ　ゴザル。。タ
ローカジャ　アルカ。。
カジャ。。オンマエニ。。
ダイミョー。。タイソー　ハヤカッタ。。　ナンジオ　ヨビダ
シタノワ　ヨノギデワ　ナイ。。　アス　ノ　オキャクノ
ヒキデモノニ。スエヒロガリオ　ダソート　オモー。。　ナ
ンジワ　タイギナガラ　キョーエ　ノボリ。イソイデ
モトメテ　マイレ。。
カジャ。。カシコマリマシタ。。
ダイミョー。。イソゲ。。

第九　末廣がり

朗讀上の注意

○形式は口語ではないが對話文朗讀として出來るだけ日常會話の調子で讀むことが大切である。
役割を定めて對話させる事も言語修練上のよき試である。
○「此のあたり」を別々にいふ時、アクセントはコノ　アタリとなる。

〔參考〕
ナンジ（汝）
ナンジ（何時）

カジャ。ハツ。。。サテサテ。ソレガシノ　シュジンワ。タテ
イタニ　ミズオ　ナガス　ヨーニ　モノオ　イーツケラ
レル　オカタジャ。マズ　イソイデ　マイローー。。。トカ
ク　モース　ウチニ。コレワ　モー　ミヤコジャ。。ヤ。
ウカト　イタシタ。ソレガシワ　スエヒロガリヤオ　ゾ
ンゼヌガ　ナント　イタソー。。。ヤ。モノノ　ホシー
トキワ　オーゴエニ　ヨバワル　モノト　ミエル。。ソレ
ガシモ　ヨバワッテ　ミヨー。。スエヒロガリオ　カオー。。
スエヒロガリオ　カオー。。
ワルモノ。。コレワ　キョーニ　スマイ　イタス　ワルモノ
デ　ゴザル。。ナニモノカワ　シラヌガ。ワイワイ　ワメ
ーテ　イル。。ヒトツ　アタッテ　ミマショー。。ノーノー。
ソナタワ　ナニオ　ワイワイ　ワメーテ　イラレルゾ。。
カジャ。。ソレガシワ　イナカカラ　マイッタ　モノデ　ゴ

○こゝの「や」はやつ失敗したといふ意味であるから、少し强くいふ方がよい。
○こゝの「や」は氣が附いたといふ意味であるから、輕くいふべきである。
○「末廣がりを買はう」は少し聲を高くして呼んで歩くやうな心持で讀むがよい。
○「當つてみませう」を別々にいふ時アクセントはアタッテ　ミマショーとなる。
○「なう〳〵」は呼びかける心持で讀む。





ザル。。スエヒロガリヤオ　シラヌニ　ヨッテ。カヨーニ
モースノデ　ゴザル。。
ワルモノ。。ソレガシワ　スエヒロガリヤノ　シュジンデ
ゴザル。。
カジャ。。ソレワ　シアワセナ　コト。。スエヒロガリワ　ゴ
ザローカ。。
ワルモノ。。イカニモ。。
カジャ。。イソイデ　ミセテ　クダサレ。。
ワルモノ。。ココロエマシタ。。。ハテ。ナニオ　ウッテ　ク
レヨーカ。。ヤ。ヨイ　コトガ　アル。。コレニ　カラカサ
ガ　アルカラ。コレオ　ウッテ　ヤローー。。。ノーノー
イナカノ　ヒト。コレジャ。。
カジャ。。ヤ。ソレガ　スエヒロガリデ　ゴザルカ。。
ワルモノ。。イカニモ。。

第九　末廣がり

○「見せて下され」を續けていふ時、クダサレのアクセントはあまり高くならない。
○こゝのやも氣が附いたといふ意味であるから輕くいふがよい。
○「よいことがある」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。
○「や」は輕くいふがよい。

カ|ジャ。。ナルホド。。ヒロゲレバ　オ|ーキナ　スエヒロガリ
ジャ。。ココニ　ゴシュジンノ　カキツケガ　ア|ルニ　ヨ
ッテ。ソレニ　アッタラバ　カイマショ|ー。。
ワルモノ。。デワ。オヨミ　クダサレ。。
カ|ジャ。。マズ　ジガミ　ヨ|クト　ゴザル。。
ワルモノ。。コレ。ジガミトワ　コノ　カミノ　コト|。。キツ
ネノ　ナク　ヨ|ーニ。コンコント　ユーホド　ヨ|ク　ハ
ッテ　ゴザル。。
カ|ジャ。。ホネミガキ。。
ワルモノ。。コレ・ホネミガキトワ　コノ　ホネノ　コト|。。
トクサオ　カケテ　ミガイテ　アルニ　ヨッテ。スベス
ベ　イタス。。
カ|ジャ。。カナメモト　シメテ。。
ワルモノ。。コー　ヒロゲテ。コノ　カナモノデ　ジット

○「お讀み下され」を別々にいふ時、アクセントはオヨミ　クダサレとなる。
○「これ」といつて品物を見せるのであるからその心持で讀むがよい。
○「張つてござる」を別々にいふ時、アクセントはハッテ　ゴザルとなる。





シメルニ　ヨッテ。カナメモト　シ|メテデ　ゴザル。。
カ|ジャ。。サテサテ。カキツケニ　ア|ッテ　ウレシュ|ー　ゴ
ザル。。シテ　アタイワ　イカホドデ　ゴザロ|ーカ。。
ワルモノ。。タコー　ゴザル|ゾ。。
カ|ジャ。。イクラホドデ　ゴザル|ゾ。。
ワルモノ。。ジュ|ーリョ|ーデ　ゴザル。。
カ|ジャ。。ソレワ　マタ　タカイ　コトジャ。。イチリョ|ーバ
カリニ　ナリマスマイカ。。
ワルモノ。。ノー　ソコナ　ヒト。。ソノ　ヨ|ーニ　ヤスイ
モノデワ　ゴザラヌ。。ウリマスマイ。。
カ|ジャ。。イヤ　ジュ|ーリョ|ーノ　ウチ。イチリョ|ーバカリ
モ　ヒ|ーテ　クダサラヌカト　ユ|ーノデ　ゴザル。。
ワルモノ。。ヨロシュ|ー　ゴザル。。ウッテ　アゲマショ|ー。。
カ|ジャ。。カタジケノ|ー　ゴザル。。サラバ。サラバ。。





○「賣つて上げませう」を別々にいふ時。アクセントはウッテ　アゲマショ|ーとなる。

ワルモノ°°ノーノー°°ソナタワ　サダメテ　シュジンモチ
デ　ゴザロー°°
カジャ°°イカニモ°°
ワルモノ°°シュジント　ユー　モノワ°キゲンノ　ヨイ
コトモ　アリ°ワルイ　コトモ　アル°°モシ　キゲンガ
ワルー　ゴザッタラ　コーコー　ハヤシテ　マワレタラ
ヨカロー°°
カジャ°°サテサテ°カタジケノー　ゴザル°°マズ　ゴシュ
ジンニ　イソイデ　オメニ　カケヨー°°°　トノサマ　ゴ
ザリマ・スカ°°
ダイミョー°°タローカジャ　モドッタカ°°
カジャ°°カエリマシタ°°
ダイミョー°°タイギデ　アッタ°°イソイデ　ミセー°°
カジャ°°ハッ°°

○「お目にかけよう」を別々にいふ時アクセントはオメニ　カケヨーとなる。





ダイミョー°°コレワ　ナンジャ°°
カジャ°°スエヒロガリデ　ゴザリマス°°
ダイミョー°°コレガ°°
カジャ°°ハー°°トノサマノ　ゴガッテン　マイラヌモ　ド
ーリデ　ゴザリマス°°コー　イタシマスト　グット　ヒ
ロガリマス°°
ダイミョー°°イカニモ　オーキナ　スエヒロガリジャ°°シ
テ°アノ　カキツケニ　アワセテ　ミタカ°°
カジャ°°アワセマシタトモ°°オヨミ　クダサレ°°
ダイミョー°°マズ　ジガミ　ヨク°°
カジャ°°ソレコソ　キオ　ツケマシタ°°コレ　コノ　トー
リ　キツネノ　ナク　ヨーニ°コンコント　ユーホド
ヨク　ハッテ　ゴザリマス°°
ダイミョー°°ホネミガキワ°°

○「これが」は反問する意味であるからその終は上り調子にいふ。

○「鳴くやうに」を別々にいふ時アクセントはナク　ヨーニとなる。
○「張つてござります」を別々にいふ時アクセントは　ハッテ　ゴザリマスとなる。

カジャ。。コレ　コノ　ホネデ　ゴザリマス。。ト・クサオ　カ
ケテ　ミガイテ　アルニ　ヨッテ。スベスベ　イタシマ
・ス

ダイミョー。。カナメモト　シメテワ。。
カジャ。。コー　ヒロゲマシテ。コノ　カナモノデ　ジット
シメマス。。
・

ダイミョー。。ヤイ。タローカジャ。。ソチワ　スエヒロガリ
オ　シラヌナ。。スエヒロガリトワ　オーギノ　コトジャ。。
オノレワ　フルガサオ　コーテ　キテ。ヤレ　スエヒロ
ガリデ　ソーローノ。ホネミガキデ　ソーローノト　モ
ーシ　オル。。スサリ　オロー。。

カジャ。。オユルシ・クダサレ。。ソー　イワレレバ。ナルホ
ド　コレワ　フルガサジャ。。コレワ　ヘンナ　コトニ
ナリオッタ。。オー　ソージャ。。アレオ　ハヤシテ　ゴキ

○「すさりをらう」と續けていふ時、オローのアクセントはあまり高くならない。





ゲンオ　ナオソー。。。
エイエイ。　カサオ　サスナラバ。
・ヒトガ　カサオ　サスナラバ。オレモ　カサオ　サソーヨ。。
ダイミョー。。ヤ。オノレ　カイモノニワ　マンマト　ダマ
サレテ。モーシワケニ　ハヤシモノオ　スルトワ。。イヤ
イヤ　アキレタ　ヤツメ。。ヤ。コレワ　コレワ。。ヤ。コ
レワ　オモシロイゾ。。

ゲニモ　ソーヨ。。
ゲニモ　ソーヨノ。。
カサオ　サスナラバ。
・ヒトガ　カサオ　サスナラバ。
オレモ　カサオ　サソーヨ。。
ゲニモ　ソーヨ。。。
ゲニモ　ソーヨノ。。。

第九　末廣がり

○囃の言葉はゆつくりと比較的單調に一行一行切つて讀むと面白い。

○「げにもさうよの」の終は幾分のばす氣持でいふと謠曲の氣分も多少出て面白いであらう。

## 二　指導概要

### (一)　教　材

(1)　興味深くかゝれてゐるので讀めばわかる。くりかへし、くりかへし讀ませ考へさせて全體として何を意圖するか、どんな點が面白くをかしかつたかを考へさせる。

(2)　讀み得たものを、自由に、各自に發表させる。いかなる點が面白さを感じさせたかを思ひ〳〵に發表させる。いろ〳〵あるであらうが大體次のやうな所が發表されるであらう。

(一)　大名の名乘り方が大げさである。

(二)　大名はいばつてゐるし、太郎冠者は考が足りない。

(三)　扇を買ひに行つて傘を買つて喜んで歸るのはをかしい。

(四)　惡者の傘の賣り方がうまい。太郎冠者の弱點をたくみに利用してゐるし、大名の弱點までも面白くついてゐる。

(五)　今まですさりをらうと怒つてゐた大名のごきげんが忽ちにして直つてしまふ處が面白い。

(六)　太郎冠者が惡者に教つた通りに繰返へしてひどくお叱りを受けるあぶない所で效を奏したのは面白い。

(七)　末廣の本物を知らないで末廣を買ひに行き、しかも道で呼ばはるからいけない。

(八)　今までのことは、大名も太郎冠者も何もかも忘れてしまつて面白く夢中になつてをどるところが面白い。

(九)　昔の言葉であるのに、今の言葉に近い平民的な言葉で話してゐるのも面白い。

(3)　狂言について簡單に敷衍する。狂言は謠曲とともに室町時代の代表的のものであり、その時代の言葉そのまゝでかいてあつて、當時の世間の有樣を描き出した滑稽文學で後來芝居の脚本のもとをなすものである。從つて我が國文學發展の上からも、近代の演劇史の上からもすぐれた價値のあるものであることを說明するがよい。

(4)　文の具象化、立體化を圖り、文章の一つ〳〵がそれ〴〵芝居のやうな人の動作を伴つてゐるのであるから、讀者は、よく其の舞臺面を想像しながら演技者の動作を考へて讀ませる。

(5)　新出文字はない。某の讀替文字が一字あるだけである。

(6)　二人宛對話的に讀ませて十分文意の暢達をはかり朗讀の練磨をなすことが大切である。時に劇化させるもよい。學藝會用の一材料としても利用されると思はれる。

### (二)　挿　畫

五十七頁のものは太郎冠者が惡者から末廣がりなる傘を、今、買ひ取らうとしてゐるところである。右が太郎冠者、左が惡者。狂言であるから芝居にするやうに衣裳をつけてゐる繪である。

六十三頁のものは大名と太郎冠者とがはやしにつれて舞をまつてゐるところである。本文の一ばん終りの太郎冠者がかさをさし調子をとつて舞ひ出したので、大名もいつしよに扇をひらいて舞ひ出したところの部分にあたるのである。左が大名、右が冠者。大名は眞の末廣がりを持ち、冠者が僞の末廣がりを持つてともに樂しくをどつてゐるところが面白い。

### (三)　準　備

掛圖。

第九　末廣がり

■参考

狂言は室町時代に能の間に入れて演じ、人をあかせないやうにする一種の滑稽なわざである。其の組立にはいろ〳〵あるが、大ていは曲の主人（シテ）とそれを助ける人（ワキ）とが出て來る。シテは世間の事情を知らない間ぬけで、ワキにからかはれ、もてあそばされてめでたし〳〵となるのである。此の曲でいへば、太郎冠者がシテで、わる者がワキである。

# 第十　姫路城

一　要旨

姫路城が優美にしてしかも防備堅固なる點に於て、我が國城郭建築の極致であるとともに、又、我が國武士道文化の精華として國寶中の國寶として貴ばれ、世界の名城として推稱される所以を讀みとらせ、其の壯麗美に感じさせるとともに日本武士文化の精華にふれさせる。

二　指導觀

（一）本課は國民文化又は國民思想に統括さるべき教材で、前卷十一第五の「法隆寺」の後をうけて日本建築の一代表として採擇されたものである。又、他の一面より考察して姫路城は實に優美であるとともに、攻めるに難く守るに堅き眞に要害堅固な城で、前卷第二十三の「日本刀」と連絡して、日本武士文化の精華を語るものである。此の點に於て姫路城は「日本刀」の特色と相通ずるものがあり、日本武士と日本國民性とをよく表現したものであるといふことが出來る。よくこれ等の點を精讀玩味させて日本武士文化の精華にふれさせなければならぬ。

（二）六十三頁から七十三頁まで堂々十頁にわたる長文であり、しかも姫路城其のものの威容を示すかのやうに、作者はあらゆる觀點に立ち、美と力とを織りまぜて、精根の限りをつくしてかゝれたやうな大文章である。讀解には相當以上の困難を感じるであらう。殊に農村の兒童にはいかに努力しても到達し得ない部面があるかも知れない。一に指導者の名指導にまつより外に仕方はない。文の具象化をはかり讀解指導に萬全の努力を拂ひ、繰返し讀み味ははせて文意の把捉をはからねばならない。

（三）文の機構を見ると大體四段に分れる。

第一段ははじめから六十五頁の九行までで南東から見た姫路城の美を語つたものである。作者は先づ冒頭に於て此の美しい古今の名城に對して限りなき咏嘆と思慕に筆を起してゐる。廣茫果てもない播磨平野のまつたゞ中、老樹の生ひ茂れる姫山のいたゞきに巍然とそゝり立つすがたはまことに白鷺城の名にそむかぬ美しい姿である。其の美しさに感嘆してゐる。更に進んで城内の順路を經、いよ〳〵天守閣に登るに從つて眼前に展開する建築物の調和、重疊する石垣などの美の極致をたゝへ、屋根の美しさをいらかの亂舞と見、さては前景にそゝり立つ二本の老松にも、其のまばらな梢越しに見える白壁の鮮かさにも、しみ〴〵と其の美を感じてゐる。即ち本段に於ては作者が姫路城の美しさに對して、作者が如何に觀、如何に感じたか、其の感じをどんな言葉で表現してあるかをよく吟味深究せねばならない。

第二段は六十五頁の十行から六十九頁の六行までで姫路城の内部に於ける堅固な防備を語つたものである。無數の門

を經、巨材の力闘する大天守閣に立つに及んで天下の名城白鷺城は、どんな大軍が押寄せてもいく萬の敵に對しても びくともしないだらうと感嘆してゐる點を讀み味はせなければならない。

第三段は六十九頁七行から七十二頁六行までで最上階から、中國・西國の大藩に對する構を觀望し併せて姫路城附近の大觀を述べ更に姫路城の略歴を述べてゐる。第四段に於ては姫路城は我が國城郭建築の粹であり世界に誇るべき國寶であると結んでゐる。

(四) 姫路城は築城術の最も發達した時代の遺品としてその代表的なもので、我が國築城術の極致である。今でも、その本丸、二の丸、西丸の三つはよく保存されその殆どが昔のまゝのすがたで殘つてゐる。世界的の名城として知られ、國寶中の國寶として貴ばれる所以をよく理解させなければいけない。

## 三　朗讀

### 本文

頁　63　64

ダイ　ジュー。ヒメジョー。。

オーテノ　サクラモンカラ　サンノマルニ　ハイルト。

ヒメジョーノ　テンシュカクワ。ヒメヤマノ　ローショ

### 朗讀上の注意

○全文をあまり遠くならないやうにはつきりと讀むべきである。



ーノ　ウエニ　ソノ　ショーメンオ　ミセル。。マコトニ

シラサギジョーノ　ナニ　ソムカヌ　ウツクシー　スガタ

デ　アル。。シカモ。ソノ　ビノ　キョクチオ。ワタクシワ

ヒシノ　モンオ　クグッテ　ニノマルニ　ハイッタ　シ

ユンカンニ　ミイダシタ。。

カラボリオ　ヘダテテ　ヤヤ　ミギテニ　アオグ　テン

シュカクグンワ。ゴソーノ　ダイテンシュオ　ミギニ。サ

ンゾーノ　ニシノ　コテンシュオ　ナカニ。オナジ　サン

ゾーノ　イヌイノ　コテンシュオ　ヒダリニ。イカニモ

チョーワ　ヨク。タカイ　イシガキノ　ウエニ　ソビエテ

イル。。ミヤビヤカナ　カラハフ。スッキリシタ　チドリハ

フ。ソレラガ　ジョーゲニ　カサナリ。サユーニ　ナラビ。

チドリガケニ　イリチガウ　サマワ。マサニ　イラカノ

ランプト　イータイ。ソーシテ。コノ　ランプオ。イッ

○「菱」は上の母音が無聲化し易いが、さうしない方がはつきりしてよい。

○「西の小天守を」を別々にいふ時アクセントは　ニシノ　コテンシュオ　となる。

ソー　ウツクシク　スル　モノワ。ゼンケーニ　ソソリタツニホンノ　マツデ　アル。。ソノ　ヤヤ　マバラナ　コズエゴシニ　ミエガクレ・シテ。ハクヘキワ　イヨイヨ　アザヤカニ。イラカワ　イヨイヨ　コマヤカナ　オモムキオテースル。。。

トコロデ。サラニ　イノ　モンオ　クグリ　ロノ　モンオ　クグッテ。オクエ　オクエト　ススムニ　ツレ。ヒメジジョーワ。タダ　ウツクシ・ート　ユー　ダケデワ　スマサレナク　ナッテ　クル。。モンオ　クグル　タビニ。サカミチワ　カナラズ　ミギカ　ヒダリエ　キョクセツスル。。ミチニ　ソーテ。トキニ　イシガキ。ヘー。ヤグラガ　ソーソート　ズジョーニ　ノシカカル。。。マルデ　ゼッペキノ・シタオ　トール　カタチダ。。ソーシテ。ソノ　ヘーヤグラニ　ウガタレタ　ヤザマ　テッポーザマガ。エン

○「松である」と續けていふ時、アルのアクセントはあまり高くならない。

○「いの門」「ろの門」の如く續けていふ場合はモンのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕
サラニ（更に）
サラニ（皿に）

〔參考〕
ヘー（塀）
ヘー（兵・丙・幣・弊）
シタ（下）
・シタ（舌）





ケーニ　サンカクケーニ　セーホーケーニ　チョーホーケーニ。チョード　カイブツグンノ　メノ　ヨーニ　ワタクシタチオ　ミオロスノデ　アル。。ドンナ　タイグンガ　オシヨセタト　シテモ。コノ　セマイ　タニソコノ　ヨーナメーロニ　ミチビカレ。アノ　ムスーノ　サマカラ　ウチカケラレ　イスクメラレテワ　マッタク　タマッタ　モノデワ　ナイ。。シカモ。ミチノ　ユクテ　ユクテワ　スベテ・ゲンジュ・ーナ　モンデ　アル。。

モンオ　ハイルト。オークワ　ソコニ　ヒロバガ　アル。。イッパンニ　ホンマルエノ　ミチワ　セマク　キョクセツシテ　イルカラ。テキノ　ヨセテガ　モシ・モンオ　トッパスレバ。サシアタリコーシタ　ヒロバニ　ナダレコマザルオ　エナイ。。ソーシテ。ハゲシク　オシアイ　モミアウカレラノアシモトニワ。イガイニモ　フカイ　タニソコ

○「谷底のやうな」を別々にいふ時アクセントはタニソコノ　ヨーナとなる。

○「たまつたものでは」を別々にいふ時、アクセントはタマッタ　モノデワとなる。

〔參考〕
イガイ（意外）
イガイ（以外・遺骸）

ガ クチオ アケテ マッテ イルノデ アル。ヨセテガ
イキオイコメバ イキオイコム ホド。オソラク コノ
ミセカケノ ヒロバガ ヤクダツニ チガイナイ。。。
ヒトキワ ケンゴト ミル ホノ モンオ スギテ。イ
ヨイヨ ホンマルニ タドリツイタト オモート。ソコニ
ワ イワユル ミズノモンガ ダイ イチカラ ダイ
クマデ ジュンジュンニ マチウケテ イル。。スーホニシ
テ モンガ アリ。ホトンド モンゴトニ ミチガ キョ
クセツスル。。ズジョーニワ。イヌイノ コテンシュ。ニシ
ノ コテンシュ オヨビ ダイテンシュガ。ヒガシノ コ
テンシュト ヨツメニ ナラビ。タガイニ ウデオ クミ
アッテ テンニ ソビエナガラ。ワタクシタチオ アシモ
トニモ ヨセツケナイト イッタ カッコーデ アル。。
ミズノ ダイ ゴモンワ ダイテンシュト ニシノ コ

〔參考〕
ニシ（西）
ニシ（螺・二子）
テン（天）
テン（點・貂）

○次の言葉はそれ〳〵續けていふ時下の語のアクセントはあまり高くならない。
「待つて居るのである」
「役立つに違ひない」





テンシュトオ ツナグ ワタリヤグラノ マシタニ ナッ
テ イル。。ヒトタビ コノ モンオ シメキッタラ。ヨッ
ツノ テンシュカクワ イッコノ ドクリツシタ ジョー
カクト ナッテ。コレダケデモ イクマンノ テキニ タ
イシテ。イッカナ ウゴキソーニ オモエナイ。。。
ガイカン ゴソーノ ダイテンシュワ。ウチカラ ノボ
ルト シチカイデ アッタ。。ソーシテ。アノ ウツクシー
ト ミタ テンシュノ ナイブニワ キョザイガ クミア
ッテ ウスグライ カクカイニ モノスゴク リキトーシ
テイル。。。
サイジョーカイカラ ナガメルト。ヒメジシワ モトヨ
リ。シカマヘーヤガ ヒトメニ ミワタサレル。。ガンライ
コノ シロワ。シカマヘーヤノ チューオー。ヤヤ キ
タヨリノ ヒメヤマ。サギヤマニ ヨッテ イトナマレタ

第十 姫路城

○「眞下になつて」と續けていふ時、ナッテのアクセントはあまり高くならない。
〔參考〕
ナッテ（成つて・爲つて・生つて）
ナッテ（鳴つて）

71

モノデ。チワ　ミナミニ　シカマコーオ　ヒカエテ　セ
トナイカイノ　ウンユオ　シメ。ニシニ　チュ　ーゴクカイ
ドーオ　ウケテ　コーツーノ　ヨーロニ　アタッテイル。
ヒデヨシガ　ココニ　メオ　ツケテ　シロオ　キズキ。サラ
ニ　イエヤスニ　シンニンサレタ　イケダ　テルマサガ。
ヒャクマンゴクノ　イポート　ショーグンノ　ウシロダテ
トニ　ヨッテ。コンニチニ　ミル　ユーピニ・シテ　ケンゴ
キワマリナキ　モノニ　・ツクリアゲタ。オーテノ　モン
ワ　ミナミオ　カタメ。カラメテノ　モンワ　ホクトーオ
オサエテ　イルガ。コノ　シロノ　ヨーガイワ　ムシロ
ニシニ　アル。ガンカニ　ミル　ニシノマルノ　ヤグラ
ヤグラワ。サギヤマオ　アタカモ　チョージョーノ　ゴ
トク　オオーテ　ニシカラノ　ミスカシオ　フセーデイル。
ヨベバ　コタエル　マジカサニ。オトコヤマ。ケー・クジ

〔參考〕
チ|（地）
（血）

○「優美」のアクセントは平板式もいふ。

〔參考〕
ム|シロ（寧）
ム|シロ（筵）
|ガンカ（眼下・眼科）
○「長城の如く」を別々にいふ時、アクセントはチ■ージ■ーノ　ゴ|トクとなる。



72



ミツリンニ　オ|ーワレ。ソノ　ウエニ　ソンリタ。ツ　テ
ト|ニ　サンジョーノ　ホリオ　メグラシ。オ|ノオ　シラヌ
ヨル　サギヤマワ　ピョーブノ　ゴトク　ツラナリ。フモ
ソラ　ニシカラ　ノブム　トキ。マルデ　ヨースオ　イッペ
ソノモノト　オモエル　ヒメジジョーモ。コレオ　・キタカ
ソナンポー　モ|・シクワ　トーホーカラ　ノゾメバ　ユ|ーピ
マコトニ　ユエアル　コ|トト　カンガエサセラレル。
テ　ココニ　キンジョー　テッペキオ　キズカセタノワ。
メノ　ウエノ　コブト　ミタ　イエヤスガ。テルマサオ・シ
ナルノデ　アル。チュ|ーゴク。シコクノ　タイバンオ
スベデ　デジロト　ナッテ。コノ　ジョーカクノ　マモリト
ンザイシテ　イル。イギト　イエバ　コレラノ　コヤマガ
ヤマガ。チョード　カイチニノ　コジマノ　ヨーニ　サ

○「小島のやうに」を別々にいふ時、アクセントはコジマノ　ヨ|ーニとなる。

○「陣貫の如く」を別々にいふ時アクセントはビ■ーブノ　ゴ|トクとなる。

〔參考〕
ササ|ンジ■ー（三條・三丈）
ンジ■ー（山上・參上・惟狀）

ンシュカクワ　アタカモ　シレートーノ　ゴトク。スージ
ューノ　ヤグラワ　ソーソート　カサナリ　エンエント
ツラナッテ。マサニ　シカマヘーヤニ　ウカブ　イチダイ
センカンオ　オモワシメル　モノガ　アル。。。
ウツクシー　シロダトワ　ダレモガ　ユー。。シカモ　ヒ
メジョーワ　トージノ　モットモ　ケンゴナ　シロデ
アッタ。。サラニ　イエバ。ホンマル。ニノマル。ニシノマ
ルノ　サンマルガ。コレホドマデ　カンゼンニ　ノコッテ。
コンニチノ　ワレワレニ　ムカシノ　スガタオ　ホトンド
ソノ　ママニ　ミセテ　クレル。。マコトニ　ヒメジョ
ーワ　ワガ　クニ　ジョーカクケンチクノ　スイデ　アリ。

○「思はしめるものがある」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。

○「世界」のアクセントはセカイともいふ。

セカイニ　ホコルベキ　コクホーデ　アル。。。

四　指導概要

（一）教材

(1) 先づ全課を通讀させて大意をとらせる。即ち城の位置、築いたのは誰か、いかにしてかゝる優美なしかも堅固な城が出來たか、なぜ姫路城が我が國城郭建築の粹であるか等について大體の把握を得させる。

(2) 次に各段毎に精査深究を加へて語句の理解を進めつゝ繰返し〳〵讀ませて、讀みとられるだけ讀みとらせる。

(3) 讀みとれた程度に從つて發表させ、各節毎に、敍述を吟味し內容を明確に理解せしめる。さうして作者が姫路城に對して如何に觀、如何に感じ、それを如何に表現してゐるかを深く味はせる。

（二）挿畫

六十四頁。菱の門を入りて右手に仰ぐ天守閣である。右手の五層のものが「大天守」手前に見えるのが三層の「西の小天守」左に稍遠く望まれるのが三層の「乾の小天守」である。前景にそゝり立つ老松の美しさ、さながらに一幅の繪である。

六十六頁、姫路城の平面圖。

六十七頁、「ろの門」に至る道。

七十一頁、西北、男山より望む姫路城の全景である。背後の山が男山景福寺山である。左方に高く「大天守」が聳へ、右方には長く白壁の城壁が連つてゐる。

（三）準備

1、近畿地方地圖。

2、姫路城の寫眞、繪葉書など。

五　參考

第十　姫路城

姫路城の起源は詳かでない。或は赤松貞範或は小寺頼秀の創始ともいはれる。天正年間に羽柴秀吉が織田信長の命を奉じて中國を經營した時、此の地を根據として城を築いた。關ヶ原役後、家康に信任された池田輝政が此の地に封ぜられて今の五層の天守閣を造つた。其後いく多の變遷があり寛延二年以來、酒井氏十五萬石の居城となつて明治になつたのである。

明治維新後は陸軍省の所管となり、今は城の一部が第十師團の司令部になつてゐる。

# 第十一　鳥居勝商

## 一　要旨

鳥居勝商が長篠城の急を告げる使を引き受けて、城をぬけ出してから使を果すまでの顚末をかいた本文を讀ませて、勝商が不幸敵兵に發見され、敵將、勝頼の前に引き出され降參をすゝめられながらも、利慾にまどはずどこまでも自分の正しい心を曲げず援軍の到着を知らせ、遂に殺されたといふその忠勇義烈な武士道的行爲を讀みとらせその勇武に感銘させるとともに日本武士魂の指導に資する。

## 二　指導觀

（一）戰國時代は同胞互に相食む日本歴史上まことに不幸な時代ではあつたが、敵味方ともに、主君のため、武士道のためには常にいさぎよく一命を捨てたのである。非常時局下に於ける讀本に本課が採擇されたことは特に其の意義の深いことを感じる。勝商の精神は現代日本人の精神であり、出動將兵の勇戰奮鬪はまた勝商の精神に通ずるものがある。勝商の精神を現代的に展開させて其の意味を十分に理解把握させなければならない。

（二）本課は特に歴史と關係が深い。豫告して此の時代の歴史をしらべさせておくがよい。

（三）文の組立は大きく分けて三つに區分される。即ち初めから七十四頁の七行までは長篠城の守りとこれに對する長圍の計をかき、いよ〳〵累卵の危き狀態となり、その急を知らせる使を鳥居勝商が引受けたことがかゝれてゐる。第一段に於ては當時に於ける長篠城がいかに要害の地であり、其の安危がいかに味方の興廢にかゝり、此の急をつげる使がいかに重大任務であるかを讀みとらせる。

第二段は七十五頁の十行までで勝商が城をぬけ出してから急を信長につげるまでである。本段に於ては勝商のやうすが「黑き影」といふことばによつてたくみに表現され、長圍の計によつて敵兵の心がゆるんでゐるのに乘じて、水泳の名人である勝商があらゆる困苦ををかし、勇氣を揮つて遂に重き使命を見事に果したことを讀みとらせ、勝商の苦心を想察させるとともに、勝商が疲れを休める暇もなくすぐ引きかへしたことにより、いかに勝商が味方の苦境を思ひ寸時と雖も自分一人が樂々としてゐられないといふ勝商の心持をよく讀み味ははせなければならない。

第三段は、遂に敵兵に發見され、勝頼に降參をすゝめられ、これを引受けた當時の心持を想像させ、遂に決死の勝商が叫び救援の知らせをきく城兵の喜びがどんなであつたかを想像させ、身をすて忠節を全うした勝商の功績に感銘させねばならない。

（四）勝商が捕へられた時、どんな決心をしたか、勝商がなぜ殺されたか、その最後の有樣はどうであつたか、十分に讀み味ははせ其の情趣を深く味ははせなければならない。

## 三　朗讀

### 本文



ダイ　ジューイチ。。トリイ　カツアキ

テンショー　サンネン　ゴガツ　オクダイラ　ノブマサ。

トクガワ　イエヤスノ　メーオ　ウケテ　ナガシノジョー

オ　マモル。。タケダ　カツヨリ　タイグンオ　・ヒキーテ

・キタリ　セムレドモ。ジョーヘー　ヨク　タタカイテ　ヌ

クコト　アタワズ。。セメアグミテ　チョーイノ　ケーオ

トリ。サクオ　ジョーガイニ　メグラシ　ナワオ　ジョー

カノ　カチューニ　ハリテ。ジョーヘーノ　ヒソカニ　ノ

ガレイズルオ　・フセグ。。。

ジョーチューニワ　ワズカニ　シゴニチノ　リョーショ

〔參考〕
サク（棚・策・裂く）
サク（作）
サク（咲く）

○「奥平」のアクセントはオクダイラともいふ。





クオ　アマセル　ノミ。。エングンノ　・キタラン　ヒモマ

タ　・キスベカラズ。。ノブマサ　ショーシオ　アツメテ　イ

ワク。テキワ　チョーイノ　ケーオ　トレルニ。ワレワ

リョーショク　ホトンド　・ツキタリ。。シロオ　ヌケイデテ

オカザキニ　イタリ。キューオ　・シュコーニ　ツグル

モノ　ナキカ。ト。。トリイ　カツアキト　ユー　モノ　ア

リ。ススミ　イデテ　ソノ　・ツカイタラン　コトオ　コイ。

ヤク・シテ　ユーヨー。コトノ　セーヒワ　イマヨリ　ヨソ

ク　スベカラズ。モシ　ムコーノ　ヤマニ　ノロシノ　ア

ガルオ　ミバ。サイワイニシテ　シロオ　イデタリト　シ

ルベシ。。ミッカノ　ノチ　マタ　サンジョーニ　・キタリテ

エングンノ　ショーソクオ　シメサン。ト。。ノブマサ

オーイニ　ヨロコブ。。

トキワ　ジューヨッカノ　・ツキヨナリ。。クロキ　・カゲワ

〔參考〕
シューシ（將士・生死・笑止）

〔參考〕
キュー（急・灸）
キュー（球・殺・舊）
シュコー（主公・趣向・酒肴）
・シュコー（手工）

○「信昌大いに喜ぶ」の次の休止は相當長くおいてよい。「時は」以下はやゝ氣持をかへてよむべきである。

シロノ　イッポーヨリ　アラワレイデ　ヒラリト　バカリ　スイチューニ　オドリ　イリヌ。。ナワニ　シカケタル　スズワ　シキリニ　ナル。。テキノ　エーヘーラ　アヤシミテ　アラタメミント　スルニ。イチローヘー。ミズ　マサニ　ミナギレリ。。ナガレオ　サカノボル　ウオノ　ナワニ　フルルナラン。ト　イエバ。サモ　アラン。トテ　ヤム。。シバラクシテ。クロキ　カゲワ　ムコーノ　キシニ　アラワレタリ。。。

ヨク　ジューゴニチノ　アサ。カツアキワ　ヤマニ　ノボリテ　ノロシオ　アゲ。ハシリテ　オカザキニ　イタリ。イエヤスニ　マミエテ　エンペーオ　モトム。。イエヤス　タダチニ　カツアキオシテ。オダ　ノブナガニ　マミエテ　ナガシノジョーノ　キューオ　ツゲシム。。ノブナガ。カツアキノ　ローオ　ショーシ。カツ　ユー。ワレ。ミョー

〔參考〕
ロー（勞・老・牢・蠟）

○分別顔の老兵の言と、それに贊同した衞兵の言は、その心してよむがよい。





ニチ　エングンオ　ヒキーテ　シュッパツセントス。。ナンジモ　トドマリテ　ワレト　トモニ　ユケ。ト。。カツアキ。ジョーナイノ　クルシミオ　オモエバ　イッコクモ　ユーヨ　スベキニ　アラズトテ。タダチニ　ヒキカエス。。。ジューロクニチ。カツアキワ　フタタビ　サンジョーニノロシオ　アゲ　ツイデ　シロニ　イラントスルニ。フコーニシテ　テキヘーニ　ハッケン　セラレ。カツヨリノマエニ　ヒキイダサル。。カツヨリ　カツアキニ　ムカイテ　ユー。ミョーニチ　ジョーモンニ　ユキテ。エングンキタラズ。スミヤカニ　クダルベシ。ト　イエ。。サラバワレ　カナラズ　オモク　ナンジオ　ショーセン。ト。。カツアキ　コレオ　ダク。ス。。。

ヨクジツ　カツアキ。テキヘー　ジューヨニンニ　カコマレテ　ジョーモンノ　チカクニ　イタリ。シロニ　ムカ

〔參考〕
ナンジ（汝）
ナンジ（何時）

イテ　タカラカニ　ヨンデ　イワク。ウリョール　コト
ナカレ。。トクガワ　オダ　ニコー。エングンオ　ヒキーテ
スデニ　シュッパツ　セラル。。カコミノ　トケンワ　ニ
サンニチノ　ウチニ　アラン。ト。。カツヨリ　イカリテ
タダチニ　コレオ　コロセリ。。。

○「うれふる」をウレウルなどといつてはゝけない。

## 四　指導概要

### (一)　教　材

(1)　全文を通讀させて、いつ頃のことか、長篠城の位置、戰の原因、長圍の計とはどんなものか、城中の有樣はどうか。本文は勝商のどんな點を中心にしてかゝれたものかを把握させ身をすてて忠節を全うした勝商の人となりに感じさせる。

(2)　通讀精讀をくりかへし讀みひたらせて勝商が捕へられた時、どんな決心をしたか、其の最期はどうであつたかを深究し、現在、出動の將兵の忠勇義烈な奉公精神に結びつけて教材の時局下に於ける取扱を十分になし、深く其の情趣情感に思ひひたらせなければならない。

(3)　語法上の注意點としては處々に現在法でかゝれてゐる點が多いから、よく讀み味ははせて現前に生々と躍動させ、文の强さを觀取させるがよい。

(4)　文語文でかゝれてゐるので、相當困難である。其の讀解には十分力を注ぎ文語文の妙味を感得出來るまでに朗讀上の練習をする必要がある。

### (二)　準　備

掛圖。地圖。

## 五　參　考

1、勝商は奥平信昌の家臣で、通稱强右衞門といつた。大力で頗る勇氣があり、その武名は當時は味方は勿論、敵方にまでひゝきわたつてゐた。殺された時は三十六歳である。今、長篠の附近に神社にまつられてゐる。

2、長篠城は三河國の東部を流れる豐川の上流である大野川と寒狹川が合流するところの絶壁の上に築かれた難攻不落、要害堅固な天然の城である。

天正元年四月、武田信玄が死ぬと、德川家康は、かつて信玄に奪はれた土地を取りかへさうとして、其の年の七月、兵を出して長篠城を占領し、天正三年二月から奥平信昌を其の城主として、之を守らせてゐたのである。信玄の子、勝頼は天正三年五月、大兵を率ゐて急に之を圍み、糧食の入る道を塞いだので、城中次第に兵糧に困るやうになり、五月十四日には殘り僅かに四日分となつた。此の時勝商は自ら進んでその苦境を家康に傳へたのである。勝商の忠節により信長・家康の聯合軍は總勢八萬三千で、勝頼の一萬五千の大軍をけちらし遂に圍みを開き武田軍を擊破したのである。

# 第十二　初冬二題

## 一　要旨

初冬二題――「柚子」と「朝飯」である。隣の柚子が今年も亦黄いろくなつて來たので、その柚子のかをりを懐しみながら、今は遠く戰地にあるをぢさんをしみ〴〵と想ふ情に讀み浸らせ、又新漬の白菜の味覺に、健康に働く一家の幸福な朝飯の情景を讀み味はせて、初冬に於ける景物二趣を通しその抒情的詩趣の玩味鑑賞を行ふのである。

## 二　教材觀

（一）「柚子」は柚子により人を想ふ抒情的生活詩である。即ち第一段にはお隣の柚子が今年も美しく黄ばんだことを詠歎し、第二段には去年をぢさんからこの柚子を戴いておいしく食べたことを追想し、第三段にはこの懐しい柚子を見上げて、今は部隊長になつて遠く戰地に行つてゐるをぢさんを思出してゐる心持を歌つたのである。柚子の初冬に於ける詩趣も捨て難いが、更に人を想ふ情を寄せ、且戰地の勇士を配した所に一層の感銘が深い。

（二）指導としては何よりもよくその詩趣を活かさなくてはならない。先づかんと冴える初冬の空に太陽がまぶしく照る梢に高く、隣の柚子が濃綠の葉を通して美しく黄いろく色づいて來た光景――その情趣を景物詩として玩味することが大切である。次には去年戴いた時の追想であるが、ちようど去年の今頃、をぢさんが竹竿でこの柚子を落してゐたが、僕を見て「一つあげようか」と、からたちの垣根越しににつこり笑つて投げてくれたので、僕はすぐ親指を突立てゝ皮をむかうとすると、しゆつとしぶきがとんで爪を黄いろく染めたものだつたが、その時のをぢさんの親切な顏と柚子の實のおいしかつた味とはいまだに忘れられない、といふその懐しい回想を切實に味ははせなくてはならない。次はこの柚子のことを思ふにつけ、をぢさんが思ひ出されるといふことであるが、懐しい柚子のかをりに、じつと梢を仰げば、今は部隊長になつて遠く戰場に行つて活躍してゐるをぢさんの面影が目に浮ぶ。をぢさんは御國の爲身命を捧げて戰をしてゐるのだ。その勇しい姿、しかしまたその勞苦を思へば何か深い感激が湧いて來る。その切々たる心持を味ははせるのである。

（三）「朝飯」は新づけの白菜に舌鼓を打ちつゝ一家樂しく朝飯を食べる生活詩である。第一段は新づけの白菜のみづ〴〵しい味覺、さく〴〵と齒切のよい感觸、何か朝の氣分の新な感じを歌つてゐる。第二段は親子兄弟打揃うて健康に働く家族の樂しい朝飯で、あつたかい御飯から湯氣が幸福に立つ情景を歌つてゐる。第三段は朝も漸く明けて、ガラス越しに林は黑く見える、がら〴〵荷車の音も聞えて來る、もう働き出したのかと思ひながら、白い御飯から、あつたかい味噌汁から、ほか〴〵と立つ湯氣を眺めて、新漬の白菜の味はまた格別だと幸福に滿された朝飯の嬉しい情を歌つたのである。まことに白菜の清新な味覺に、樂しく朝飯をとる生活詩境が豐かに流れてゐる。

（四）指導の要點は新づけの白菜の景物詩としての情趣を活かすこと、恰も景物詩として柚子を味ははせるやうに、これが先づ第一に擧げられる。採り立ての白菜の新づけ、そのまつ白な色、みづ〴〵しい味覺、さく〴〵する感觸、頃合な味加減は見るからにまことにおいしい。さうして何か新鮮な清楚な味は朝の氣分を新にするやうに思はれるが、この感覺味を十分に玩味感得せしめなくてはならない。次に健康に働く一家がみんな打揃うて樂しく朝飯を食べる情景はかなりよく味ははれるであらうが、尙その生活意欲生活感情に浸り、健康に惠まれて勤勞にいそしむ一家の幸福

を十分感得せしめなくてはならない。やがて朝が明けて人が働き出す氣配を思ひながら、今日一日の仕事の歡喜を湛へて、白い御飯、あたゝかい味噌汁、さうして白菜をさく〳〵と嚙むその心持をしみ〴〵と味ははせるのである。

（五）形式は何れも自由詩形である。思ふまゝ感ずるまゝがのび〳〵と自由に歌はれてゐる。かういふ詩形に就いても一通り指導する必要がある。さうしてこの詩のもつ新鮮な微細な感覺、感情を味ははせることが大切である。

（六）語句として注意すべきものは次のやうである。「かんとさえた冬空」「しぶきがほとばしつて」「なつかしい柚子のかをり」「朝の氣分を新にする」「幸福に私たちの顔を打つ」「明けて行く朝」「林が黑い」等、なほ文字は讀替として「冬」と「飯」の二つだけ、この點はむづかしくない。

## 三　朗讀

| 頁 | 本文 | 朗讀上の注意 |
|---|---|---|
| 76 | ダイ　ジューニ。ショトー　ニダイ。 | |
| 77 | ユズ。 | |
| | コトシモ　トナリノ　ユズ　ガ　キバンダ。 | ○隣のをぢさんを想ふ靜かな心持でゆつくりと讀むがよい。 |
| | カント　サエタ　フユゾラ。 | |



タイヨーガ　マブシク　アオガレル。

カサコソト。

タケザオデ　アノ　キノ　コズエオ　ツツイテ　イタ

トナリノ　オジサンワ　イマ　イナイ。

カラタチノ　カキネゴシニ　フト　ホホエンデ。

アゲヨーカ。ト　ナゲテ　クレタ。

オジサンワ　ヨイ　ヒトダッタ。

アノ　トキ。ザクット　オヤユビオ　カワニ　ツキタテタラ。

シュット　シブキガ　ホトバシッテ。

ツメオ　キーロク　ソメタ　モノダッタ。

ナツカシー　ユズノ　カオリ。

第十二　初冬　二題

〔參考〕
キ（木・奇）
キ（氣・黃）

ワタクシワ ジット コズエオ アオギ ミタ。。
イマワ ブタイチョーニ ナッテ。
トーイ センチニ イッテ イル オジサンオ オモイ
ナガラ。。。

アサメシ。。
シンズケノ ハクサイ。
ナント ユー ミズミズシサデ アロー。。
カメバ サクサクト ハギレ ヨク。
アサノ キブンオ アラタニ スル。。

チチモ。ハハモ。アニモ。イモートモ。
ダマッテ ハシオ ウゴカシテ イル。。
ソロッテ ケンコーニ ハタラク カゾクノ。

一二六

○「仰ぎ見た」と續けていふ時、ミタのアクセントはあまり高くならない。

○樂しい朝飯を思ひ浮べて朗らかに讀むがよい。

○「みづ〳〵しさであらう」と續けていふ時、アローのアクセントはあまり高くならない。

○「母」はハハともいふ。

○「働く家族の」を別々にいふ時、アクセントは、ハタラク カゾクノとなる。



タノシー アサメシダト オモエバ。
アタタカイ ゴハンノ ユゲガ。
コーフクニ ワタクシタチノ カオオ ウツ。。

アケテ イク アサ。。
マドガラスゴシニ ハヤシガ クロイ。。
カラカラト。ドコカデ ニグルマノ オト。。
シロイ ゴハンカラ。
アタタカイ ミソシルカラ
ホカホカト タチノボル ユゲオ ミツメナガラ。
ワタクシワ。サクサクト ハクサイオ カム。。。

第十二 初冬二題

〔參考〕
アサ（朝）
アサ（麻）
ハヤシ（林・囃）
○「から〳〵と」はアクセント不定。

## 指導概要

### (一) 教材

(1) 一題づつ一單元として取扱つて差支へない。一題毎に一時間を配當する。

(2) 「柚子」の取扱――十分によませて大要をよみとらせる。さうして讀後の印象感想を重んじて、「人を想ふ情」に觸れさせる。

(3) 次に敍述の解釋吟味を盡して一段々々玩味考察する。柚子の黄色に色づいた光景など切實に具象化する。そして去年もらつた時の様子もあり〳〵と描き出させ、「よい人だつた」の意味を討究し、おや指を突立てゝしぶきがほとばしり爪を黄いろく染めた實感を味ははせる。最後のをぢさんの追想は柚子の梢をなつかしく仰いでゐるあたりの心持から、遠く戰地に想を馳せて、今は部隊長となつて勇ましく一軍を指揮してゐるをぢさんの姿を想ふ胸中を想像させて、如何にも感慨深くしみ〴〵と人を想ふ心情に觸れさせるのである。

(4) よみぶりに注意して朗讀の指導を行ふ。自由詩として讀み方の指導も大切である。

(5) 「朝飯」の取扱――まづ十分に讀ませる。語句の意味など質問に應じてよく解らせ、さうしてその大要を讀みとらせる。

(6) 讀後の印象感想としては「如何にも樂しさうだ」「白菜がおいしさうだ」といふことなどが出よう。こゝを中心として吟味する。

(7) まづ各段について内容を捉へさせ、次いで心持を味ははせる。新づけの白菜の感觸・味覺・これは誰も十分に實感をもつことであらうから、いろ〳〵と發表させて、その感覺的詩味を究める。さうして次に一家揃つての朝飯の光景を玩味する。皆がだまつて箸を動かしてゐる所、樂しい朝飯だと思へばあたゝかい御飯の湯氣が幸福に私たちの顔を打つ心持等を十分に深究玩味せしめ、終りに夜が明け放れて、そろ〳〵人が働き出す所から、白い御飯、温いみそ汁、そしてうまい白菜を食べてゐる様子を切實に描き出させて、その情景、その心持にひたらせる。

(8) 朗讀の指導を行ふ。心持を體してその文意を適切に表す讀みぶりの修練に努める。

(9) 全課の總括として「柚子」と「朝飯」が初冬二題の景物詩といふことから、更にその感覺、感情の細部を究明し、なほ生活詩として身邊を圍繞する詩境の開拓をはかるがよい。

(10) 練習應用、諳誦は固より諳寫させるがよい。文字語句の練習運用をはかる。

# 第十三　機械化部隊

## 一　要旨

我が機械化部隊が砲煙彈雨の眞只中に突進して敵軍を潰走せしめる勇壯な戰況を讀み味ははせ、我が將士の勇猛果敢、よく日本男子の本領を發揮する壯烈な光景に感激せしめ、以て忠勇なる志氣を鼓舞すると共に、現代戰爭に於ける兵器及び戰鬪の一端を知らせるのである。

## 二　指導觀

（一）　機械化部隊の敵軍を擊破する壯烈な戰況を敍した文である。まさしく實戰をおもはせる。今次事變から採つた材料であらう。その勇壯猛烈なる戰鬪には胸をとゞろかすものがある。大いに士氣を鼓舞し、その心情に感激せしめることが指導の要諦である。

（二）　文章は三段七節より成つてゐる。

第一段はこの戰鬪のはじまりである。第一節は我が戰車隊が敵機械化部隊攻擊の爲出動して目ざす地點に到着したこと、第二節は一方敵の正面に向かつた我が自動車部隊がまさに戰鬪を開始した狀況である。

第二段はいよ〳〵戰車隊の活躍である。卽ち第三節はまづ部隊長の進擊命令に敵戰車隊におそひかゝり猛烈な射擊を開始して、はげしく進擊する光景である。第四節はそれから日頃の腕並を發揮して物すごく擊ちまくり體當りなどを敢行する樣子、第五節は戰はいよ〳〵はげしく一大修羅場を展開する光景、日本男子の面目はこの時とばかり勇ましく戰ふ所である。

第三段は敵を追擊して退路を絕たうとする所である。卽ち第六節は戰の數十分は過ぎて敵は退却し始める。我が機械化部隊は一齊に追擊する。全速力でふみにじる。第七節は兩軍主力の會戰は今たけなは、砲聲は遠雷のやうにひゞく。あと百七八十粁で敵軍主力の背後に出る。今夜か明朝にはその退路を絕つて高く日章旗をひるがへさうといふのである。

（三）　機械化部隊の性能に立ち、如何に重要なる任務を帶びてこの戰鬪に參加してゐるかを、よく文の內容に就いてつきつめ、又神速果敢、勇猛壯烈、遂によく偉動を奏する行動を、その敍述に迚つて明瞭切實に讀み味ははせねばならない。と同時に忠勇なる我が將士が最後の勝利は信念にありと堅く覺悟して、一死報國、よく日本男子の面目を發揮するその精神を深く味ははせる。卽ちやはり戰鬪は結局この精神力にあるといふ所が重要である。

（四）　行文莊重にして力强く、戰記文の特色を具現してゐる。この點は讀む調子の上にも留意して朗讀法の指導に盡すと共に、文の理解の上にも注意して、その意のある表現を十分に玩味すべきである。

（五）　卷十一第二十七課の「空中戰」と同巧異曲の文である。新兵器として飛行機の重要なことは最早誰知らぬ者もないが、機械化部隊に就いては國民の常識として未だそれ程でない。今次の支那事變に見ても、この快速性と裝甲性が如何に偉動を奏してゐるかは多くいふ必要はない。さういふ點を新しく認識せしめることが肝要である。

（六）　語句として戰鬪に關する用語が多い。十分にその意味を明かにしなくてはならない。卽ち機械化部隊、戰車部隊、放列、掩護射擊、散開、散兵線、速射砲、步兵砲、機關銃、砲塔、戰鬪隊形、發射音、煙幕、戰車群、自動車群、

主力等。なほ其の他に相當難語新語の解釋を盡すべきものがある。例へば側面を突く、彼我の戰況、進行の自由を失ふ、戰機は熟した。猛烈な射擊、鍛へに鍛へた腕、體當りをくらはせる、亂鬪、一大修羅場が展開される。勝利は信念にある。面目を發揮する、すかさず、ふみにじる、痛快事、主力の會戰、たけなは等、なか〳〵むづかしいものがあるから、よくその意を盡して解らせなくてはならない。なほ新出文字は揮、猛、敢、却の四字、讀替文字は側、彼、我、布の四字である。

## 三　朗讀

### 本文

ダイ　ジューサン。。キカイカ　ブタイ。。

テキノ　キカイカ　ブタイノ　ソクメンオ　ツク　タメ。
ゼンソクリョクデ　ウホーエ　マワッタ　ワガ　センシャ
ブタイワ、ゴゼン　シチジ　ジップン　メザス　バショ
ニ　ツイタ。。

サカンニ　ジューセー　ホーセーガ　キコエル。。コダカ





### 朗讀上の注意

〔參考〕
ツク（突く）
ツク（着く・附く・搗く）

○「廻つた」をマアッタといはないやうに注意を要する。

○「午前」はゴゼンともいふ。

イトコロエ　ノボッテ、ヒガノ　センキョーオ　ミルト。
テキノ　ショーメンニ　ムカッタ　ワガ　ジドーシャ　ブ
タイデワ、ホーヘーガ　スデニ　ホーレツオ　シキ。ソノ
エンゴ　シャゲキノ　モトニ、ホヘー　コーヘーガ
サンカイシテ　ゼンシンオ　ツズケテ　イル。。ハルカ　ム
コーノ　オカニ、モノスゴク　スナボコリオ　アゲテ。テ
キ　センシャガ　ジューダイ　ジューゴダイ　ゾクゾクト
アラワレテ　クル。。ワガ　ホーヘーワ　コレニ　ホーダ
ンオ　アビセ　カケ。サンペーセンカラモ　ソクシャホー
ホヘーホートーガ、マメオ　イル　ヨーナ　キカンジュ
ーノ　オトニ　マジッテ　トドロク。。スデニ　テキ　セン
シャノ　スーダイワ　コワサレ。スーダイワ　ヒオ　ハイ
テ　シンコーノ　ジューオ　ウシナッテ　イル。。シカシ
テキ　センシャワ　アトカラ　アトカラト　アラワレル。。

〔參考〕
コーヘー（工兵）
コーヘー（公平）

○「自動車」と單獨にいふ時のアクセントはジドーシャである。

○「十五臺」の五を通鼻音にいつてはいけない。

〔參考〕
トー（等・十・塔・刀・當・篠・唐）

○「いるやうな」と續けていふ時、ヨーナのアクセントはあまり高くならない。

センキワ ジュクシタ。。

ゴゼン シチジ サンジップン。センシャ ブタイチョーワ ホートー タカク シキカンニ ナラエノ ハタオダシテ。ゼンシン シハジメタ。。ソレッ トバカリ。カク センシャワ セントータイケーオ トッテ。テキセンシャグンノ サソクメンニ オソイカカル。。チョーシャノ ダイ イッパツオ アイズニ。ソレゾレモーレツナ シャゲキオ カイシ シタ。。シューイニ ハレツスル テキ ホーダンオ モノトモ セズ。グングンキョリオ ツメル。。

ジメンガ デコボコシテ イルノデ。シャタイワ ジョーゲニ ゲキドー スルガ。カネテ キタエニ キタエタワガ ウデ。シャゲキワ セーカクデ アル。。ダーン。ダーン。ト ユー ハッシャオンニ ツズイテ。テキ セ

○「三十分」をサンジュップンといはないやうに注意を要する。

○「戰闘隊形」をそれ〳〵別々にいふ時のアクセントはセントー タイケーである。

〔參考〕
アイズ（合図）
アイズ（會洋）

○「ぐん〳〵」の第三音節が通鼻音にならないやう注意を要する。

○「ダーン。ダーン」は稍强く餘韻を響かすやうに讀む。





ンシャノ キカンブニ バッバッ。ト ヒバシラガ タッタト オモート。スグ カエンオ アゲ ハジメル。。ツギカラ ツギエト。 アラタナ テキオ モトメテモーレツニ ウチマクル。。ミギノ ホーデワ。テキ センシャ メガケテ。コーテツノ タイアタリオ クラワセテイル ユーカンナ ワガ センシャガ アル。。トマル モノ。ウゴク モノ。ヒオ ハク モノ。ホヘー コーヘーノラントー。ヒガ イリミダレテノ イチダイ シュラジョーガ テンカイ サレル。。ミカタノ ソンガイモ ソートーワ アローガ。ショーリワ シンネンニ アル。。イマコソ。ニッポン ダンシノ メンボクオ ハッキ スベキトキダ。。。

タタカイノ スージップンワ スギタ。。ミレバ モーモータル エンマクオ ハッテ。テキワ タイキャク。シハ

〔參考〕
キカン（機關・汽罐）
キカン（奇觀・歸還・飢寒）

○「ぱつ〳〵」は稍速く讀み終にごく短い間をおく。

〔參考〕
シンネン（信念・新年）

○「發揮すべき時だ」の次の間は時間的經過をあらはす爲に稍長くした方がよい。

ジメタ。スカサズ　ムセンデンシンニ　ヨル　ワガ　キカ
イカ　ブタイチョーノ　ツイゲキメーレーガ　クダル。
センシャグンノ　モーシンニ　オクレジト。スバヤク　ホ
ヘー。ホーヘー。コーヘーノ　ノリ　ウツル　ジドーシャ
グンガ　ツズク。ワガ　キカイカ　ブタイノ　イッセー
ツイゲキデ　アル。センカニ　ウチケムル　センジョーオ
アトニ。ハイソースル　テキオ　ゼンソクリョクデ　フ
ミニジッテ　ススムノダ。ナント　ユー　ツーカイジデ
アロー。

イマ　リョーグン　シュリョクノ　カイセンワ　タケナ
ワ　ラシー。ウホー　ハルカニ。エンライノ　ヨーナ　ホ
ーセーガ　シキリニ　キコエル。アト　ヒャク　シチハチ
ジッキロメートルデ。テキグン　シュリョクノ　ハイゴニ
デル　コトガ　デキヨー。ソノ　タイロオ　カンゼンニ

○「追擊命令」を別々に二語としていふ時のアクセントは何れも平板式である。

〔參考〕
カイセン（會戰・海戰・開戰・改選）
○「遠雷のやうな」を別々にいふ時アクセントはエンライノ　ヨーナとなる。
○「出ることが」と續けていふ時、コトガのアクセントはあまり高くならない。



タッテ。タカク　ニッショーキオ　ヒルガエスノワ。コ
ンヤカ。ミョーチョーカ。

○「今夜か」の次の間を心持ち長くし、「明朝か」の終を稍强くいつた方がよい。

## 指導概要

### (一) 教材

(1) 三時間を配當する。第一次・第二次指導に各一時間、最後に總括的取扱を行ひ、機械化部隊其の他につき兵器及び戰鬪の職能の補說を行ふがよい。

(2) 第一次指導は十分に讀ませ、語句の意味を明かにしてまづその概要を讀みとらせ、次いで各節意を吟味して內容の要約を行ひ、更に節意の上から段落を吟味考察して、文の機構から內容の要點を明瞭にする。

(3) 第二次指導は讀みとつた內容につき、如何に書表されてゐるかの敍述表現の吟味討究を行ふ。卽ち敍述を辿つてその情景を具體化し、且その心持にひたつて切實に玩味感得せしめるのである。特に玩味し考察すべき點は次のやうである。

イ、何故に敵の機械化部隊の側面を突くのか、そして全速力で廻つたといふのはどういふ意味かの考察。

ロ、自動車部隊にはどういふ兵が乘つてゐたのか、それが今どうしてゐるのか。

ハ、戰機は熟したといふのはこの場合どういふことか。今戰はどうなつてゐるのか、その事實についてその實際を十分考察せしめる。

ニ、戰車隊のでこぼこの道を進擊して正確な射擊をする樣子、敵戰車が忽ちどうなつたかの玩味。

ホ、いよ〳〵猛烈ないくさ、彼我入亂れての一大修羅場の展開――その内容を十分に具體化せしめる。

ヘ、「勝利は信念にある」「今こそ日本男子の面目を發揮すべき時だ」の内容的解釋、その事實實際を討究考察せしめる。

ト、敗走する敵をふみにじる痛快事について、どんな樣子であるか、何が痛快事かを究めさせる。

チ、退路を斷つて高く日章旗を揭げるのは今夜か明朝かといふその心持、及びこれからどんなにして退路を斷つのかについて十分考察せしめる。

(4) かうして終りに文全體の上から、戰車部隊の勇壯果敢な働きをまとめ、なほ自動車部隊の樣子も明かにする。更にまた我が將兵のこの勇武壯烈の奮鬪につき、一死君國に捧げる精神を追求するがよい。

(5) 總括的取扱としては、戰記文としての力强い讀み調子を指導し、勇猛な戰鬪、機械化部隊の活躍に對する感想の發表を行ひ、次いで兵器及び戰鬪の仕方の一端を補說する。終りに文字語句の練習應用を行ふ。

(二) 挿畫

(1) 八十一頁、突進する戰車部隊の光景である。

(2) 八十二頁、自動車部隊の進擊である。

(3) 八十四頁、戰車隊の戰鬪である。飛行機も飛び、今まさに戰はたけなは、火焰を吐いてゐるもの、砲彈の飛散るさま、まことに凄壯なものがある。

三　參考

(1) 現代の軍事乃至國防はあらゆる科學の總力を擧げて、これを機械化し、科學化してゐるが、陸軍に於ける機械化部隊はその著しい一つであつて、現代科學戰の結晶ともいふべきものである。

(2) 機械化部隊とは戰車隊と自動車隊をいふのである。戰車隊は戰車卽ちタンクにより敵陣に突進してこれを擊破することを役目としてゐる。多く敵の側面又は背後を衝き、又兵站部を襲ふ。防禦堅牢なる鋼鐵車内にあつて、備裝せる速射砲及び機關銃により敵に猛射を浴びせかける。さうして敵軍の敗走すると見るや、急遽その退路を絶ち、一擧に敵を鏖殺せんとするのである。時には本文にあるやうに、敵のタンク目がけて鋼鐵の體當りを敢行し、又これを分捕るやうなこともやりかねない。

(3) 自動車隊は後方に於て多く兵糧彈藥の輸送に當るのであるが、又直接戰鬪に任ずる自動車部隊は所謂快速部隊の偉名を轟かし、その快速を驅つて、突如敵陣に迫り、一氣にこれを擊滅するのである。單に將兵のみを載せて走るものもあるが、多くは速射砲や步兵砲を牽引して驀進する。その特色は敵の虛を衝いて機敏なる行動に出づることと、迅速に追擊して敵に多大の損害を與へることである。

(4) 今日の作戰計畫――戰鬪經過は大體本文に書かれてゐるやうであるといふ。卽ち兩軍主力が戰鬪を開始すると、占據すべき要地を目がけて自動車部隊が急遽これに向ひ、まづ砲兵が放列を布き、猛烈なる正面攻擊の火蓋を切る。續いてその掩護射擊の下に、步兵・工兵が散開して前進する。敵はそれと知るや――飛行機の偵察等もあつて、直に戰車部隊を繰出して應戰に努める。この時である、味方の戰車部隊が進擊してこれが側面攻擊を行ひ、遮二無二突進して粉碎するのは。――本文にはその消息が書かれてゐる。「敵の機械化部隊の側面攻擊の命を受けて、右方に迂廻し、今目指す地點に到した」のである。高地に上つて戰況を見ると、今まさに正面攻擊が開始されて盛に銃聲砲聲が聞える。遙か彼方の岡には、物凄い砂塵を上げて敵戰車が續々現れて來る。しかし何ぞ知

らん、これを待受けて我が戰車隊が滿を持してゐようとは。そこで我が戰車部隊はいよ〳〵戰機熟せりと前進を開始し、戰鬪隊形を取つて敵の左側に襲ひかゝつたのである。かうして猛烈なる攻擊に、彼我入亂れての一大修羅場を展開したが、戰の數十分が過ぎると、敵は煙幕を張つて退却し始めた。そこで部隊長の追擊命令が無線電信によつて下る。戰車隊群の猛進におくれじと、すばやく步兵・砲兵等の乘移る自動車群が續く。我が機械化部隊の一齊追擊である。かうなると敵の戰車隊などはもはや擊破されて用をなさない。どこ迄も追擊して遂に敵軍主力の背後に出で、その退路を斷つて袋の鼠とするのである。大體機械化部隊の最後の使命はこゝにあるといつてもよい。

今回の事變に於ける徐州攻擊などはそのいゝ例であるといふことである。又漢口攻擊に於ける快速部隊の偉勳などは誰も知る所である。

# 第十四　ほまれの記章

一　要旨

戰場で奮戰した勇士――正一君の父が脚に名譽の負傷をして歸鄉し、樽を作つて働きつゝ語る戰爭の話から、義足をつけて招魂社に參拜するこの父の胸に輝く軍人傷痍記章を見て、ひたすら感謝の念を捧げた少年三郎君の至情を讀み味はせ、盡忠報國の志操を喚起せしめると共に、白衣の勇士に對する感謝と尊敬の念を涵養するのである。

二　教材觀

（一）ほまれの記章、即ち軍人傷痍記章に對する感謝の念を物語る文である。（一）は働きつゝ語つた正一君の父の負傷當時の回想談であり、（二）はこの父が招魂社に參拜する胸に輝くほまれの記章への感謝である。何れも勇ましいこの戰傷について、心から偉いなあと崇高な感激に尊敬の念が湧いて來るが、またつく〴〵有難いなあと感謝せずには居られない話である。こゝに出て來る何れの人も國を思ふ赤心に燃えてゐる。何か涙をそゝるやうなものがあるが、その感激にひたらせて傷痍軍人を思ふ至情を養ふ所が指導上の要點である。

（二）はじめの（一）の文に就いては、左足を負傷して今では不自由な義足を以て、しかも今日の寒さに多少の痛みを感じながら、元氣に仕事に精出すこの父の健氣な心事をよく玩味せしめなくてはならない。それからこの父の負傷當時の話であるが、寡兵よく大敵を制壓し、突擊を前の大事な時、輕機關銃に故障を生じたのを、分隊長に言はれて

沈着に修理して擊ち出した剛膽な態度、さうして又敵彈に斃れた分隊長の最後の言葉、その刹那自分もやられたが夢中で射擊してゐて戰友に言はれて始めて氣付いた勇敢な態度等は十分に玩味討究すべき所である。それから「最後の突擊に參加出來なかつたのが殘念だ。」といつてをぢさんの涙ぐむ心中も大いに味ははすべき所である。終りの醬油屋のをぢさんがよろしく言ひ、寒いから脚を大切にとか、いくらでも作つて屆けて下さいとかいふ親切な情は、傷痍軍人に對する感謝と同情を代辯せしめてゐる國民の聲ともいふべきものであつて、こゝも十分に玩味感得を必要とする所である。

(三) 次の(二)の文に於ては、正一君親子が招魂社に參拜に來たわけ——今日はわたしの上官や戰友の命日だ、わたしがかうして不自由ながら生きてゐるのは、戰死した人や遺族の方々にすまない。そのおわびかたく〳〵お參りをしてゐるといふ心事は特に討究玩味しなくてはならない。さうして初めて見るをぢさんの胸の軍人傷痍記章、「あゝさうか、これだな、ほまれの記章だ。偉いな、有難いな。」としみ〴〵感じて感謝の念が後から〳〵こみ上げて來た所は、こゝが謂はゞ本課の中心であるから、よくその意を體して徹底して讀み味ははせなくてはならない。終りの、今日はお參りなので皇后陛下から賜つた義足をつけたをぢさんの感激、「土を蹈むのはほんたうにもつたいない。ありがたい、ありがたい。」と獨言のやうに言つた至情も亦十分玩味せしむべき所である。

(四) なほ(一)と(二)とは相互に連絡し對照して取扱はねばならない。正一がよく父の手傳をし、又かうして不自由な身に附添つて常によくいたはつてゐる心情の省察も重要であり、さうして招魂社に參拜した戰友の命日といふのは蓋し自分の負傷したあの激戰の當日であるから、こゝに參拜して當時を追想し感慨無量のものがあつたであらうといふ考察も大切である。なほ義足に就いても恩賜の義足はこの日特に用ひたことをはつきり考へさせなくてはならない。さうして傷痍記章に關してもあの勇敢な奮鬪を通して一層その名譽と感謝の念が湧いて來るので、かういふ點をよく前後に連絡せしめて、細かく鋭く且深くつきつめて讀み味はひ讀み究めさせなくてはならない。

(五) 文は生活表現として書かれてゐる。極めて平明にすら〳〵と解りよいので、比較的容易に讀み味ははれるであらう。生活表現の文は生活觀照の態度に兒童をその境地に立たせ、作者さながらの感じに浸らせ考へに耽らせるのが指導の要針である。卽ち三郎の身になつて、三郎と同じやうな情に感謝し、感激し又興奮し省察せしめるのである。それ故兒童を直接この父に接せしめて、親しく三郎のやうな印象を受けさせる態度に讀解玩味せしめることが肝要である。

(六) なほ本課の取扱に於ては、特殊な勳功や特別の傷痍でなく、極めて一般的なものである點。さうして傷痍軍人が國民的感激を浴びながら、尙その感謝におぼれず、且如何なる境遇におかれても明朗豁達、よく勇往邁進する意氣さかんな點などを十分吟味し、いさゝかもセンチメンタルに陷つてゐない所を明かにしなくてはならない。そこに誠にすぐれた國民性情の一面を窺ふことが出來るのである。

(七) 語句として注意すべきものは次のやうである。義足、手際、故障、最後の言葉、止血、突擊、招魂社、命日、遺族、軍人傷痍記章等。あまりむづかしくない。新出文字も、障、后、賜の三字、讀替文字はないので、これ亦むづかしくない。

## 三　朗　讀

本文

ダイ　ジューシ。ホマレノ　キショー　イチ。。

トン　トン。トン　トン。。

ショーイチクンノ　オトーサンワ。セッセト　タルオツクッテ　イル。。ヒダリアシオ　ノバシ。ミギアシデ　グット　タルオ　カカエナガラ。キズチオ　ツカッテ　タケノ　タガオ　ハメル。。アノ　ヒダリアシワ　ギソクナノニ。マルデ　ナンノ　フジューモ　ナサソーニ。シゴトガ　ハカドッテ　イク。。

オジサン。フショーサレタ　トキワ　イタカッタデショー。

ダシヌケニ　ボクガ　キクト。オジサンワ。

一四四

朗讀上の注意

「ぐつと」のアクセントは不定。

○「不自由」はフジューとならないやうフジューと發音する。

○「負傷された時は」を別々にいふ時、アクセントはフショーサレタ　トキワとなる。

○「痛かつたでせう」の終りは上り調子がよい。



タマニ　アタッタ　トキワ。イタイトモ　ナントモ　オモワナカッタヨ。。タダ　ナニカデ　ビシャット　ブタレタ　ヨーナ　カンジダッタ。

ト　イッテ。タルオ　マワシナガラ。トントント　タタイテ　イル。。

オバサンガ　ヒバチオ　モッテキタ。。

キョーワ。ゴゴカラ　ダイブ　ヒエマスネ。。イタミマセンカ。

ト　ヤサシク　タズネル。

チョット。ウズク　ヨーダガネ。。ナニ。コノ　クライナンデモ　ナイヨ。。

オジサンノ　コタエワ。ドコカ　グンジンラシー　トコロガ　アル。。

サブローサン。ショーイチワ　モー　ジキ　カエリマス。。

第十四　ほまれの記章

○「あたつた時は」を別々にいふ時、アクセントはアタッタ　トキワとなる。

○「ぶたれたやうな」を續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

○「廻しながら」はマーシナガラとならないやうにマワシナガラと發音する。

○「冷えますね」「痛みませんか」の終りはそれぞれ上り調子がよい。

○「うづくやうだがね」も「何んでもないよ」も終りは下り調子がよい。

サッキ。タルオ トドケニ ショーユヤサンマデ イキ
マシタ。。モー スコシ マッテ イテ ヤッテ クダサ
イネ。

ヤサシー オバサンワ。ボクニモ コー イッテカラ。ナ
ニカト オジサンノ セワヤ。シゴトノ テツダイオ ハ
ジメタ。。

ボク。カマイマセンヨ。オバサン。。

ショーイチクンワ カンシンダナー。。ボクモ ナニカ テ
ツダエタラト オモイナガラ。ナレナイノデ ダマッテ
イル。。オジサンノ テギワニ ミトレナガラ。イツノマニ
カ。ヨク キカサレタ センソーダンオ オモイ ウカベ
ル。。

コーアンレーオロシノ フキスサブ アル サムイ ヒ。
フイニ アラワレタ サンゼンアマリノ テキト デアッ



○「下さいね」の終りは上り調子がよい。

○「から言つてから」を別々にいふ時、アクセントはコー イッテカラとなる。

○「かまひませんよ」の終りは下り調子がよい。



タ オジサンノ ダイタイワ。ゴロッピャクノ コゼーデ
ブッツカッテ イッタ。。トコロガ。トツゲキゼンノ ダ
イジナ トキニ ナッテ。ウン ワルク オジサンノ ケ
ーキカンジーユガ キューニ キカナク ナッタ。。シマッ
タト オモッテ。イキナリ。コショー。ト サケブ。。チョ
ード ソノ トキ。トナリニ イタ ブンタイチョーガ。
アッ。ト イッテ タオレタ。。オモワズ。ブンタイチョー
ドノ。ト チカズクト。オレニ カマウナ。。ハヤク ナオ
シテ ウツンダ。ト ユー。。コレガ ブンタイチョーノ
サイゴノ コトバダッタ。。オジサンガ フショーシタノワ
ソノ トキデ アッタ。。オジサンワ。タダ モー ムチ
ューデ コショーオ ナオシタ。。タ タ タ。ト コ
コロヨイ オトガ ナリダシタ トキノ ウレシサ。スル
ト。ウシロノ センユーガ ハイヨッテ。ハヤク ホータ



○「其の時」を別々にいふ時、アクセントはソノ トキとなる。

○「分隊長殿」といふ言葉は早く強くいふ。

○「おれにかまふな」からの分隊長の言葉も感情をこめて力強く。

イシロ。ト　オシノケタ。。ハジメテ　キガ　ツイタ　オジ
サンワ。チマミレノ　グンプクオ　キリヒライテ。スグ
シケツオ　シ。ホータイオ　シタガ。ソレキリ　モー　タ
テナカッタ。。。

オジサンワ　イツモ　ハナシノ　オワリニ。クチグセノ
ヨーニ　ユー。。アノ　トキ。サイゴノ　トツゲキニ　サ
ンカスル　コトガ　デキナカッタノガ。クヤシクテ　ナラ
ヌ。。ソーシテ　ココマデ　クルト。キマッタ　ヨーニ　オ
ジサンワ　ナミダグムノデ　アル。。。

トツゼン　イリグチデ。タダイマ。ト　ユー　コエガ
シタ。。ショーイチクンガ　カエッタノデ　アル。。ヤガテ。
ソノ　ゲンキナ　スガタガ　シゴトバニ　アラワレル。。
オトーサン。ショーユヤノ　オジサンガ。ヨロシクト
イワレマシタ。。サムイカラ　アシオ　ダイジニ　ナサイ。。

○「氣がついた」を別々にいふ時、アクセントはキガ　ツイタとなる。

○「口ぐせのやうに」を別々にいふ時、アクセントはクチグセノ　ヨーニとなる。

○「きまつたやうに」を別々にいふ時、アクセントはキマッタ　ヨーニとなる。

〔參考〕
アシ（足）





ソーシテ。デキタラ　イクラデモ　ツクッテ　トドケテ
クダサイッテ。。

オジサンワ。ニコニコシナガラ　イッタ。。
ソーカ。。アリガタイ　コトダ。。デキルダケ　ベンキョー
シテ　ツクロー。。ゴクローダッタナ。。サッキカラ　サブ
ローサンガ　キテ　マッテ　イラレタンダヨ。。
ソレカラ　イチジカンバカリ。ボクタチワ　ナニモ　ワス
レテ　ユカイニ　マリナゲオ　シテ　アソンダ。。。
ニ。。

ハンツキホド　タッテ。アル　ニチヨービ。ボクワ　ア
サ　ハヤク　ウンドーニ　デカケタ。。ショーコンシャノ
マエエ　キタノデ。イシダンオ　ノボッテ　サンバイショ
ート　スルト。シンゼンデ　イマ　ウヤウヤシク　オガン
デ　イル　ヒトガ　アル。。チカズキナガラ　ヨク　ミルト。

アシ（蘆）
○「大事になさい」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

○「御苦勞だつたな」の終りは下り調子、「ゐられたんだよ」の終りは上り調子がよい。

○「人がある」「親子であつた」をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

ショーイチクン　オヤコデ　アッタ。。

オジサンワ。イツマデモ　カシラオ　サゲテ　オガンデ

イル。。ソノ　シンケンナ　ヨースオ。ボクワ　タチドマ

ッテ　ジット　ミツメテ　イタ。。。

ヨーヤク　オマイリガ　スンダト　ミエテ。フタリワ

コッチエ　ヤッテ　クル。。ボクワ　ゲンキ　ヨク。

オハヨー。

ト　イッタ。。オジサンワ。

オー。サブローサンカ。。キミ。コンナニ　ハヤク　オマ

イリトワ　カンシンダネ。。

オジサンコソ。アシガ　ワルイノニ　タイヘンジャ　ア

リマセンカ。。

スルト。オジサンワ。

キョーワ。ワタシノ　ジョーカンヤ　センユーノ　メー

○「こんなに早く」を別々にいふ時、アクセントはコンナニ　ハヤクとなる。

○「大變ぢやありませんか」と續けていふ時下の語のアクセントはあまり高くならない。





ニチナンダ。。オジサンワ。フジユーナガラモ　コーシテ

イキテ　イル。。ソレガ。センシタ　ヒトヤ。イゾク

ノ　ヒトタチニワ　スマナイ　ヨーニ　オモワレテネ。。

オワビ　カタガタ　オマイリオ　シタノダヨ。

ト　イーナガラ。モー　イチド　シャデンノ　ホーオ　ミ

ヤッタ。。

ミレバ。オジサンノ　ムネニワ。グンジン　ショーイキ

ショーガ　カガヤイテ　イタ。。

ホマレノ　キショーダト。ボクワ　オモッタ。。コノ　キ

ショーオ　ツケタ　ヒトビトニ　タイシテワ　イクラ　カ

ンシャシテモ　カンシャシキレナイノダト　オモッタ。。。

ボクモ　オマイリオ　スマシテ。サンニン　イッショニ

キトニ　ツイタ。。

イシダンオ　オリル　トキ。ショーイチクンモ。ボクモ。

○「すまないやうに」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

オジサンニ　ヨリソッテ　タスケヨート　スルト。オジサンワ。

アリガトー。ヒトリデ　ダイジョーブダヨ。キョーワ　オマイリナノデ。コーゴーヘーカカラ　タマワッタ　ギソクオ　ツケタガ。コレデ　ツチオ　フムノワ。ホントーニ　モッタイナイ。アリガタイ　コトダ。アリガタイコトダ。

ト。オワリワ　ヒトリゴトノ　ヨーニ　イッタ。ソノ　コエニ　ツリコマレテ。ボクタチモ。タダ　アリガタイ　カンジデ　イッパイニ　ナッタ。

○「大丈夫だよ」の終りは下り調子がよい。

○「皇后陛下」は重々しく嚴肅にいふ。

○「其の聲に」を別々にいふ時、アクセントは　ソノ　コエニとなる。



■ 指導概要

（一）教材

(1) （一）と（二）に各一時間、全體の總括に一時間を配當する。

(2) （一）の取扱――まづ十分に讀ませて、讀みとれるだけ讀みとらせる。敍述が平明で解りよいから、相當の所まで讀みとり讀み味ははせるやうに十分時間を與へるがよい。語句の質問に應ずる。

(3) 讀みの指導の後、大意及び感想の發表を行ふ。勇ましい働をしたとか、名譽の負傷をしたをぢさんが偉いとか有り難いとか、又かうした義足の身で働く所が偉いとか感心だとかいふ感想があらう。內容の大要に就いては大體敍述の筋によりてその概要が發表されよう。

(4) 次いで大體の理解の上に立つて敍述を吟味しつゝ文意の討究玩味を行ふ。その要點に就いては既に述べたのであるが、よくその情景を描き出して、身その境地にある如く、三郎になりきつて讀み味ははせるやうにする。

イ、をぢさんの樽をかゝへ竹のたがをはめてゐる光景――不自由な左脚の義足に對して如何に思つてゐるか、さうしてそれが負傷された當時にふりかへつて、「痛かつたでせう」と質問した消息をつきつめる。

ロ、をばさんのいたはつてゐる樣子――「痛みませんか」といふ。「ちよつとうづくやうだが、何でもないよ」といふ。この言葉の底を割つてその眞意を讀み味ははせ、更に何かとをぢさんの世話や仕事の手傳を始めた樣子を吟味する。

ハ、戰爭談を回想してゐる內容吟味――こゝは最も大切である。どういふ時、どんなにして負傷したのか。その勇敢な行動を通して君國の爲名譽の戰傷を受けたをぢさんの面目を躍如たらしめる。さうしてをぢさんが

口ぐせのやうにいふ「くやしくてならぬ」といふ眞意を究め、涙ぐむ心事を省察せしめる。

ニ、醬油屋のをぢさんの親切――次にこの玩味を行ふ。名譽の負傷者に對し出來るだけの好意と同情を寄せ、尊敬の念を拂ふのは銃後の國民たる者の誰もが懷く心持であることを追求して、このをぢさんの態度や心事を討究する。

ホ、最後に仲よくまり投をして遊んだ親しい感情を味はせる。

(5) 十分讀ませる、朗讀に注意して文意を證しての讀みぶりの指導を行ふ。

(6) (二)の取扱――(一)同樣まづ十分に讀ませて、大體の內容はよみとらせる。質問に應じよく調べさせる。

(7) ついで內容及び感想の發表を行ふ。戰友のお命日に招魂社にお參りする所が如何にも軍人らしいとか、ほまれの記章に對して感謝してもしきれない心持がよく思はれるとか、皇后陛下から賜つた義足に對してもつたいない心持が如何にもよく感ぜられるとか色々出るであらう。內容に就いては話の筋が大體よみとれて發表されるであらう。

(8) そこで深究精讀を行ひ、十分に玩味感得せしめる。その要點も既に述べたが、これ亦細かく敍述をつきつめ、その情景を具象化し、目のあたりに髣髴と描き出すことが大切である。

イ、招魂社に參拜に來た正一親子――どうしてそこで逢つたのか、どんなに拜んでゐたのか、さうして參拜に來たわけに就いては特に吟味考察せしめる。戰友の命日、すまない心持等についてよく味はせる。

ロ、ほまれの記章に對する感謝――はじめて見る軍人傷痍記章、さうしてほまれの記章と感じて、感謝しても感謝しきれない心持を玩味する。

ハ、次に恩賜の義足について――をぢさんの感激して話す言葉を玩味する。終りのひとり言のやうに言はれた無量の感を味はせ、自分もたゞ有難い感じで胸が一ぱいになつた心持にひたらせる。

(9) よみ方の練習を行ふ。十分に讀みぶりに注意させる。

(10) 全課の總括的取扱――(一)と(二)を通して讀方練習を行ふ。語句の意義や敍述の解釋等につき問答を行ふ。

(11) 內容討究　次いで(一)と(二)を對照して相互に連絡せしめ、正一や正一の母がこの父に對する心持、なほこの三郎の心持の吟味から、參拜に來たこの日の考察、軍人傷痍記章に對しこの父の戰傷をおもうて一層感謝に堪へぬ心情等を討究玩味せしめ、恩賜の義足と共に新に制定された軍人傷痍記章について多少補說を行ふ。

(12) 讀方の練習を行ひ、なほ文字語句の練習應用をはかる。

(13) この教材に連關して白衣の勇士に對し、又傷痍軍人を衞戍病院に慰問した經驗等について發表せしめ、感謝と尊敬の念を養ふは頗る有效なことである。

(二) 挿畫

十三頁――軍人傷痍記章である。中の像は武人をかたどつたもの。

## 參考

(1) 軍人傷痍記章は昭和十三年八月三日の官報により公布されたもので、記章は勳章の意味である。中央は武神の像(金色)、周圍の十字形(赤色)は楯をかたどり赤誠を示す。斜に出てゐるものは矢尻(銀色)をかたどり武功をあらはしてゐる。

(2) 軍人傷痍記章令

第一條　軍人トシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ニ授與スル爲軍人傷痍記章ヲ設ク本令ニ於テ軍人トハ恩給法ニ規定スル就職中ノ軍人及準軍人ヲ謂フ

第二條　軍人傷痍記章ハ甲乙ノ二種トス其ノ制式及形狀附圖ノ如シ

甲種軍人傷痍記章ハ戰鬪又ハ戰鬪ニ準ズベキ公務ノ爲、乙種軍人傷痍記章ハ普通公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ニ之ヲ授與ス。

（以下略ス）

(3)

傷兵保護院に於て、白衣の勇士に捧げる感謝の標語を小學校兒童から募集したものを左に掲げておく。

國を護つた傷兵護れ。

傷痍の記章護國の光。

仰げ日の丸たゝへよ傷兵。

乘り降りもまづ戰傷の勇士から。

をぢさんありがと今度は僕等だ。

上座にするゐる傷病兵。

# 第十五　萬葉集

## 一　要旨

我が國文學の精髓とする萬葉集の優れて尊い所以を明かにし、優れた歌數首の鑑賞を行ひ、その雄大明朗、且純眞なる古代國民の性情を窺ひ、なほ我が國民が事に觸れ物に感じて歌を詠むゆかしい特性を知らしめるのである。

## 二　指導觀

（一）　文は歌の鑑賞を中心として、萬葉集の優れて名高い所以を述べてゐる。即ち最初に防人――一兵士の歌一首を出してこれを鑑賞し、これによりかゝる庶民から、上は天皇の御製に至るまで、當時の殆どあらゆる階級の人々の作、約四千五百首を二十卷に收めてある大歌集なることを說き、更にかく上下を問はず、國民一般が折に觸れ事に感じて歌をよむことが我が國民性の特色であることを述べてゐる。

次は萬葉集中、最も古い歌として大伴家持の長歌の中に詠み込まれてゐる「海行かば」の歌を揭げて、忠勇義烈なる國民的感激を示し、次には有名なる歌人として柿本人麿の「東の野に」と、山部赤人の「和歌の浦に」に續いて、山上憶良の「をのこやも」の評釋をし、更に小野老の「あをによし奈良の都は」の歌を鑑賞してゐる。さうして萬葉集の特色とする長歌の例として舒明天皇の御製、「大和には群山あれど」を擧げて玩味考察を行つてゐる。最後に本課の總括として萬葉集の歌の眞諦を究め、古代人が雄大明朗な氣性を持ち、極めて純眞な感情に生きて、かういふ歌を

歌つた優れて尊い所以を明かにすると共に、遠い昔に於て、古事記と並んで此の萬葉集を持つことは、我々日本人の誇であることを述べて結んでゐる。

（二）これによつても解る通り、本課は萬葉集の短歌・長歌を鑑賞せしめることが主眼であるが、尙これを通して萬葉集の眞價を識得せしめようといふのである。歌は國民精神の旺盛に發揮されてゐるものから、美しい敍景、こゝろ豊かな抒情に亙る優れた作を採つてゐるので、是等の歌により、豪宕雄大、豁達明朗、しかも極めて純眞素朴な國民的思想感情を十分に玩味感得せしめなくてはならない。

（三）萬葉集が我が國文學の精髄として偉大なる價値をもつことは、歌そのものゝ價値が理解されゝば自ら明瞭となるのであるが、なほ千二百年前に於て、かくも優れた文學を生み出した我が民族の偉大さにも觸れしめなくてはならない。こゝがまた我々日本人の誇とする所である。

（四）文章の敍述は餘りむづかしくはないけれども、歌の評釋鑑賞は玆に書かれてゐるだけでは容易にその眞意眞情が感得されないから、もとの歌にふりかへつて、能く理解し玩味せしめるやうに取扱ふことが肝要である。

（五）語句として注意すべきものは次のやうである。徵集、御稙、覺悟、あらゆる階級の人々、上下を問はず、躍動國民的感激、歌聖、奮起、短歌、長歌、雄大明朗、純な感情等は、十分解釋を盡さねばならないが、なほ歌そのものにも相當難解な語句があるから、特に理解に努めなくてはならない。

（六）新出文字は悟、躍、浦、純の四字、讀替文字は萬、性の二字であるから、この方面にはあまり困難はなからう。





本文

ダイ　ジューゴ。。マンヨーシュー。。

イマオ　サル　センニヒャクネンノ　ムカシ。トーゴク・カラ　チョーシューサレテ　キューシューホーメンノ　シ・ユビニ　ムカッタ　ヘーシノ　ヒトリガ。

キョーヨリワ。カヘリミナクテ　オーキミノ　シコノ・ミタテト　イデタツ　ワレワ

ト　ユー　ウタオ　ヨンデ　イル。。コンニチ　イゴワ　イッシン　イッカオ　カエリミル　コト　ナク。テンノーヘーカノ　ミタテト　ナッテ。イヤシー　ミデワ　アルガ　シユッパツスルノデ　アル。ジブンワ。。ト　ユー　イミデ。マコトニ　ヨク　コクミンノ　ホンブン。グンジンノ　カ

朗讀上の注意

○「九州」と單獨にいふ時、アクセントはキューシューである。

〔參考〕
ヨンデ（詠んで・讀んで）
ヨンデ（呼んで）

クゴオ　アラワシタ　リッパナ　ウタデ　アル。コー　ユ
ー　ヘーシャ　ソノ　カゾクタチノ　ウタガ。マンヨーシ
ューニ　オーク　ミエテ　イル。

カミワ　テンノーノ　ゼョセーオ　ハジメ　タテマツリ。
トージノ　ホトンド　アラユル　カイキューノ　ヒトビト
ノ　サク。ヤク　シセン　ゴヒャクシュオ　ニジッカンニ
オサメタノガ　マンヨーシューデ　アル。カク　ジョー
ゲオ　トワズ。コクミン　イッパンガ　コトニ　フレ　モ
ノニ　カンジテ　ウタオ　ヨムト　ユーノワ。ワガ　コク
ミンセーノ　トクショクト　ユーベキデ　アル。

マンヨーシューチュー　モットモ　フルイト　オモワレ
ル　ウタワ。ブモンノ　イエ　オートモウジガ。ジョーダ
イカラ　イーツタエタ　モノト　シテ。オートモノ　ヤカ
モチノ　チョーカノ　ナカニ　ヨミコマレタ　ツギノ　モ

〔參考〕
トージ（當時）
トージ（冬至・答辭・湯治）
サク（作＝作品の意）
サク（柵・策・裂く）
サク（咲く）
○「作」のアクセントは平板式にもいふ。





ノデ　アル。

ウミ　ユカバ。ミズク　カバネ。
ヤマ　ユカバ。クサムス　カバネ。
オーキミノ　ヘニコソ　シナメ。
カエリミワ　セジ。

ウミオ　ススンダナラバ　ミズニ　ヒタル　カバネト　ナ
ラバ　ナレ。ヤマオ　ススンダナラバ　クサノ　ハエル
カバネト　ナラバ　ナレ。ヘーカノ　オソバデ　シノー。
カエリミワ　シナイ。ト　イッタ　イミデ。マコトニ　オ
ーシー　ウタデ　アリ。チューユーノ　ココロノ　ヤクド
ーシタ　ウタデ　アル。マンヨーシューニワ。コーシタ
コクミンテキカンゲキニ　ミチ　アフレタ　ウタガ　オー
イ。

ユーメーナ　カジン。カキノモトノ　ヒトマロセ　ヤマ

○「ものである」と續けていふ時・アルのアクセントはあまり高くならない。

ベノ　アカヒトノ　サクモ。マタ　マンヨーシューニ　ヨッテ　ツタエラレテ　イル。。。

ヒンガシノ。ヌニ　カギロイノ　タツ　ミエテ。カエリミスレバ　ツキ　カタブキヌ。。。

ヒトマロノ　ウタデ　アル。。モンム　テンノーガ　マダオージデ　アラセラレタ　コロ。ヤマトノ　アキノデ　カリオ　ナサッタ。。ヒトマロモ　オントモニ　クワワッタ。。ノナカノ　イチヤワ　アケテ。ヒガシニワ　イマ　アケボノノ　ヒカリガ　ウツクシク　カガヤキ。フリカエッテニシオ　ミレバ。ザンゲツガ　カタムイテ　イル。。トーザイノ　ウツクシサオ　イッシュノ　ウチニ　ヨミコンダ。マコトニ　チョーシノ　タカイ　ウタデ　アル。。ヒトマロワ。トクニ　ウタノ　ミチニ　スグレテ　イタノデ　コーセーカセート　タタエラレタ。。。。

〔參考〕
カリ（狩・雁）
カリ（假・借）

○「一夜」のアクセントは平板式にもいふ。

〔參考〕
チョーシ（調子・銚子）
チョーシ（長子）
コーセー（後世）
コーセー（校正・構成・高聲・恒星）





ワカノウラニ　シオ　ミチ　クレバ　カタオ　ナミ。アシベオ　サシテ　タズ　ナキワタル。。。

キーノ　クニエ　ギョーコーノ　オントモオ　シタ　トキ。アカヒトガ　ツクッタ　ウタデ　アル。。ワカノウラニ　シオガ　ミチテ　クルト。ヒガタガ　ナクナッテ　クルノデ。アシノ　オイシゲッテ　イル　ムコーノ　ホーオ　サシテ。ツルガ　ナキナガラ　トンデ　イク　コトヨ。ト　ユーイミデ。ヒタヒタト　ヨセル　シオノ　シズカナ　オト。ナキナガラ　トンデ　イク　ツルノ　ハバタキマデガ　キカレル　ヨーナ　カンジノ　スル　ウタデ　アル。。。

オノコヤモ　ムナシカルベキ。ヨロズヨニ　カタリツグベキ　ナワ　タテズシテ。。。

ヤマノウエノ　オクラノ　サクデ　アル。。オクラワ。ケントーシニ　シタガッテ　シナエ　ワタッタ　コトモ　アリ。

〔參考〕
ツル（鶴）
ツル（蔓・弦）
ツル（釣る、吊る）
ナ（名）
ナ（菜）

〔參考〕
シナ（支那）
シナ（品）

ガンライ　ガクシャデ　アルガ。ニンゲンニ　タイスル
アイノ　ココロニ　トミ。ソノ　ホーメンデ　トクショク
アル　ウタオ　オーク　ノコシテ　イル。。コノ　ウタワ。
イヤシクモ　ダンシト　ンマレナガラ。ヨロズヨニ　ツト
ーベキ　ナモ　タテズシテ　ムナシク　シスベキデ　アロ
ーカ。ト　ユーノデ　アッテ。コージンオシテ　フンキ
セシメル　モノガ　アル。。。

アオニ　ヨシ。ナラノ　ミヤコワ　サク　ハナノ。ニオ
ーガ　ゴトク　イマ　サカリナリ。。

トーダイジノ　ダイブツガ　デキ。インドカラ　コーソー
ガ　トライ　シテ　キタ　コロノ　ハナヤカナ　ナラノミ
ヤコオ。ガンゼンニ　ミル　ヨーナ　キガ　スル。。オ
ヌノ　オユノ　ウタデ　アル。。

マンヨーシューニワ　タンカガ　オーイガ。コーセーノ

〔參考〕
ホーメン（方面）
ホーメン（放免）

○「死すべき」のシの母音は無聲化しない方がよい。

○「東大寺」のアクセントは平板式にもいふ。





カシューニ　クラベテ　チョーカノ　オーイノガ　ヒトツ
ノ　トクショクオ　ナシテ　イル。。

ヤマトニワ　ムラヤマ　アレド。
トリヨロー　アメノ　カグヤマ。
ノボリタチ　クニミオ　スレバ。
クニバラワ　ケムリ　タチ　タツ。
ウナバラワ　カマメ　タチ　タツ。
ウマシクニゾ。

アキツシマ　ヤマトノ　クニワ。。
ジョメー　テンノーノ　ギョセーデ。チョーカト　シテワ
ミジカイ　モノノ　ヒトツデ　アル。。ヤマトノ　クニニワ
ムラガッタ　ヤマヤマガ　アルガ。ナカデモ　ソナワリ
トトノッタ　カグヤマニ　ノボッテ　ナガメルト。ヒロイ
ヘーゲンニワ。ミンカノ　カマドノ　ケムリガ　アチラコ

〔參考〕
アメ（天・雨）
アメ（飴）

チラニ　タチノボリ。ウミノ　ヨーニ　ヒロイ　イケニワ。
カモメガ　アチラコチラニ　トビタッテ　イル。。ヤマトワ
リッパナ　ヨイ　クニデ　アル。ト　ユーノデ　アッテ。
ウツクシー　コーケーオ　ガンゼンニ　ミル　ヨーニ　オ
ウタイニ　ナッテ　イル。。。

イジョー　アゲタ　ウタデモ　ダイタイ　ワカル　ヨー
ニ。マンヨーシューノ　ウタワ。マコトニ　ユーダイデ
アリ　メーローデ　アル。。ソレワ。ヨースルニ　ワガ　コ
ダイノ　ヒトビトガ　ユーダイ　メーローノ　キショーオ
モチ。キワメテ　ジュンナ　カンジョーニ　イキテ　イ
タカラデ　アル。。マンヨートワ　バンセーノ　イデ。バン
セーマデモ　ツタエヨート　シタ　コジンノ　ココロオ。
ワレワレワ　ヨム　コトガ　デキル。。ソーシテ。コー　ユ
ー　トーイ　ムカシニ。コジキト　トモニ　コノ　マンヨ

○「お歌ひになつて」を別々にいふ時、アクセントはオウタイニ　ナッテとなる。

〔參考〕
ジュン（純）
ジュン（順）
イ（意・異）
イ（胃・亥）



ーシューオ　モッテ　イル　コトワ。ワレワレ　ニッポン
ジンノ　ホコリデ　アル。。。

## ▲指導概要

### （一）教材

(1) 第一次指導に於ては、一通りの意味が解るやうによく讀ませ、自由に質問させて語句の解釋を盡し、その上で讀みとつた內容を發表させる。大凡の內容が理解されたらよいのである。次いでこゝに出てゐる歌七首を拾ひ出させ、これが暗誦につとめる。

(2) 第二次指導は讀みを十分にして、明確に內容の讀解收得をはかる。卽ち一つ一つの歌を中心として、こゝに書かれてゐる評釋乃至鑑賞の意味を究め、更にその歌によつて、どういふことを說明してゐるかを明かにする。

イ、今日よりはかへりみなくて……東國から九州方面の守備に向かつた一兵士の歌。よく國民の本分、軍人の覺悟を歌つてゐること、——かういふ兵士や家族の歌が多く見える。……これはまた極めて低い庶民階級の例として擧げてゐること。

萬葉集には上は天皇の御製から、下はかういふ身分の卑しい者まで、當時のあらゆる階級の人々の作が約四千五百首、これを二十卷に收めてあること、さうしてかく上下を問はず、國民一般が事に觸れ物に感じて歌を詠むといふのが、我が國民性の特色であることを說明してゐる。……こゝでまづ萬葉集の概觀が書かれてゐることを明かにする。

ロ、海行かば水づくかばね……大伴氏が上代から言傳へられたものとして長歌の中によみこまれた大伴家持の歌。

まことに雄々しい忠勇の心の躍動してゐる歌で、これは萬葉集中最も古いと思はれる歌の例に擧げたもの、――かういふ國民的感激に滿ちた歌が數々あることを述べてゐる。――これにより古代民族の國民精神をも窺はしめなくてはならない。

ハ、東の野にかぎろひの立つ見えて……皇子の御供をして大和の安騎野で狩をなされた時の柿本人麿の作。

人麿は後世歌聖と稱へられる程、歌の道に優れた人であること、この歌も美しい景色を巧みによんで、優れて高い調子を示してゐること。……こゝでは特にこの歌の鑑賞を遂げなくてはならない。

ニ、和歌浦に潮滿ち來れば……紀伊國へ行幸の御供をした時の山部赤人の作。赤人も有名なる歌人で、その代表作として中々優れた歌であること、――こゝも歌の玩味が大切である。

ホ、をのこやも空しかるべき……山上憶良の作。

憶良も優れた歌人で、特に人間愛に富んだ抒情歌が得意であつたこと。この歌にもよく男子の覺悟を述べた壯烈な心がおもはれること――後人をして奮起せしめた意味を十分に考察せしめる。

ヘ、あをによし奈良の都は……華やかな奈良の都を詠歎した小野老の歌。

よくその情景を眼前に見るやうに歌はれてゐる所を玩味せしめる。

ト、大和には群山あれど……舒明天皇御製、

萬葉集の一つの特色とする長歌の例、大和はりつぱなよい國であるといふその美しい景色を歌つてゐる所を十分に鑑賞せしめる。

チ、最後の一節は萬葉集の歌のまことに雄大明朗であることを述べ、それは要するに我が古代の人々がさういふ氣性を持ち、極めて純な感情に生きてゐたからであることを說いてゐる。さうして此の遠い昔に、萬葉集の出來たことは古事記と共に我々日本人の大きな誇であることを記してゐる。――これによつて我が國民性をも闡明し、且萬葉集の偉大な文學的價値をも知らしめなくてはならない。

(3)　第三次指導としてはまづこの歌を彙類的にまとめて、その意味を一層切實に玩味鑑賞し、更に萬葉集についての說明をまとめて、その特質を吟味考察するのである。彙類的にまとめるとしては次のやうにする。

イ、國民的心情・感激をうたつたもの、

今日よりは　かへりみなくて……一兵士
海ゆかば水づくかばね……大伴家持
をのこやも空しかるべき……山上憶良

ロ、景色をうたつたもの、

東の野にかぎろひの……柿本人麿
和歌の浦に潮滿ち來れば……山部赤人
あをによし奈良の都は……小野　老
大和には群山あれど……舒明天皇

歌の鑑賞は歌の字義から、解釋されてゐる意味を究めてよくその眞意を玩味せしめ雄大明朗、且素朴純眞な

る心を味はひ、更にそこに見られる古代民族の精神をも究明しなくてはならない。

萬葉集の說明に就ては

いつ頃に出來たものか、

歌の數やその作者について、

短歌の外に長歌が多い特色について、

有名な歌人について、

よまれてゐる歌の特色について、

更に萬葉集が何故我が國の誇であるかについて等。

是等は文の深究玩味を盡す所に十分理解されるであらう。

なほ補說として萬葉集について多少話すもよいし、二三歌を出して鑑賞させるもよからう。

(4) 最後によく讀ませ、歌の暗誦を行ひ、文字語句の練習應用をはかることも大切である。歌の解釋を書かせて見ることも必要であらう。さういふ爲に總合的復習の時間を一時間とるがよい。

(二) 挿畫

(1) 百一頁　天の香具山

五　參考

(1) 萬葉集は日本文學史上に於ける有數な歌集として、唯一最高の權威である。記紀の歌に端を發した詩歌がこゝに至つて抒情詩としてその極上に達したものである。

(2) 萬葉集の撰者については橘諸兄說、諸兄家持兩人說、家持私撰說いろ〳〵あるが、家持以外猶數人の手を經たものとする說が有力である。撰定の時代について見るに、淳仁天皇の天平寶字三年正月の歌まであるから、ほゞ成立したのは稱德天皇の頃であり、更に平安時代に至るまで改定を加へられて現存のものとなつたであらう。要するに作者並に年代に就いてはなほ考察の餘地が存する。

(3) 萬葉集二十卷は長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合はせて四千四百九十六首を收めてゐる。その年代を考へると、仁德天皇から淳仁天皇の天平寶字三年まで大凡四百五十年に亙り、舒明天皇以前三百餘年間の歌は甚だ少く、以後百年間の歌が多い。特に天武天皇以後七十餘年の歌が最も多い。二十卷の中、第一卷第二卷は全體の組織が整然としてゐるから最も古い卷であらう。卷五は山上憶良の歌が多く見えるので憶良に關係の深い卷である。卷九や卷十六には傳說を取扱つた歌が多い點に於て、民衆詩として注目すべきものがある。卷十三は古い抒情詩として注意すべき卷であり、卷十四は東歌を含んでゐる點に興味があり、卷二十にも防人の歌が多いのは家持が卷十四にならつて集めたものであらう。卷十七、十八、十九、二十は家持の日記の如き卷である。

(4) 萬葉集の中で主な歌人を見ると、第一に柿本人麿がある。人麿は持統・文武朝の頃、朝廷に奉仕した歌人であつて、官は極めて低かつた。歌の數も多く、且長歌に富んでゐる。その長歌は氣魄の力强さと格調の雄大な事を以て優れてゐる。豐麗なる修辭の巧みさを以て强い情熱を歌つてゐる。その短歌も流るゝやうな諧調を以て調子の高いものがある。

(5) 人麿と並べ稱せらるゝ赤人は傳記は極めて不明であるが、その奉仕した年代を見ると、人麿よりやゝ遲れてゐ

る。彼の歌は四十九首で少い。長歌十三首、短歌三十六首に過ぎないが、彼の眺めた自然は優美な境地が多く自然と融合して、こゝに自然詩人の純粹さがある。

(6) 山上憶良は若き頃遣唐小錄として渡唐したことが見えて居るから、この間に儒教的教養を得たものと思はれる。筑前守に赴任したのは餘程老年であつたと思はれる。當時太宰帥であつた大伴旅人との交遊深く、憶良から奉つた歌も多い。これが卷五に收められてゐるものである。彼は地位としては高きを得なかつた上に、痼疾の爲に苦しみ貧窮の爲にも艱んだ。彼の歌は觀念的なものもあるが、多く人間愛の上から、人性の眞底から發した沈痛な響がある。「をのこやも」の歌は、藤原八束が河邊東人を遣して憶良の病を訪なはしめた時、憶良が感激して詠んだもので、その熱と力がおもはれる。「憶良、この時、報語已に畢り、須らくして涕を拭ひ、悲歎してこの歌を口吟す」と萬葉集に記してある。

(7) 大伴家持は旅人の子で萬葉集の撰定にも與つた人である。歌も極めて多く殘り、卷十七以下の四卷は家持の歌が主となつてゐる。彼は初め宮內官となり次に越中の國司として赴任し、後兵部卿として中央官に任じ、更に國司となり、晩年には左遷の悲運にあつて不遇の間に歿した。歌は宮內官時代を第一期とし多感な戀愛歌をつくつた、卷三、四に收められてゐる。越中守時代を第二期とし、兵部卿時代を第三期とする。忠君の情厚く家を思ふ情深き彼は、歌の上にもそれが閃いてゐる。因みに「海ゆかば」の歌は越中國守の館に於て、陸奥の國より金を奉る時、詔書を下されしを賀して作つた長歌の中の一節である。詔書にもこの事が言はれてゐる。

(8) 其他女歌人として坂上郎女や額田女王や笠郎女の如き人も名高い。是等の歌人の外に作者未詳の歌にすぐれたものが多くある。東歌の如きにはこの點に於て注意すべきものが多く、卷十三の抒情歌も素朴の中に強い力の籠つた歌が多い。

(9) なほ小野老の歌は作者が太宰小貳として筑紫に居て、當時の奈良の盛なるを想望してよんだ歌である。天平の初めか神龜の末の歌である。

(10) 一兵士の歌といふのは下野國防人今奉部與曾布の歌である。

# 第十六　奈良

一　要旨

七代七十餘年の帝都として咲く花の匂ふが如く華やかであつた都に殘る趾跡を知らせると共に、年を經て色移り香失せたその面影に、或は又今も變らぬ山河に、そのかみの歷史を文學を偲ぶ事によつて文學的趣味と國民的情操とを養ふ。

二　指導觀

(一)　奈良七重、七堂伽藍八重櫻。大宮人の雅つくした奈良の都は、實に歷史に文學に、愛すべき親むべき都市である、本文は今に殘る山河に神社佛閣に歷史を偲び古歌を想ふ文學的內容の豐富な國民文化の香のこもつた文である。

(二)　この文は五段に分けて書かれてあるが、文の構成上の意味はない。奈良の個々の事物について、現在の姿を眺めつゝ過去を追憶して書いたものであるから、文そのものの文學的價値より、むしろ內容の文學的なる事に注意しな

ければならない。

（三）第一段は春日神社、東大寺、大佛、興福寺の社寺を眺め、四邊の一木一草にも歴史を古歌を偲んでゐる。

第二段は若草山、三月堂、二月堂、春日の社、手向山、鹿の春秋の風情を書いてゐる。

第三段では古の奈良の都の廣大盛美であつた姿を想像してゐる。

第四段では、若草山に登つて今に殘る古都の跡を眺め、移り變る世の態に見果てぬ夢を追ひ、

第五段で尙はるかに南を望めば太古以來の歴史に見える山々連なり、歴史に、文學に、感はつきせぬといふのである。

（四）次に本文の主要章句を捕へて、歴史的、文學的內容の表現面を辿つて見よう。

「七代七十餘年の帝都」元明天皇の和銅三年（皇紀一三七〇）三月都を藤原の地から奈良に遷されて以來、桓武天皇の延暦三年（一四四四）十一月山城の國長岡に遷されるまで約七十餘年の間が奈良の都時代である。但しその間に聖武天皇の天平十二年（一四〇〇）に都を山城の久邇（恭仁の京）に遷され、同じく十六年には攝津の難波に、十七年正月には近江の紫香樂にといふ樣に轉々として遷都されたが、これは短い間の事であつて、その十七年五月には又奈良に都を遷された。かくて元明天皇を始め奉り、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の七帝の間、この地を帝都と定められた。謂ゆる奈良朝時代である。

「咲く花の匂ふが如く」は前課、萬葉集中の小野老の「あをによし奈良の都は」の古歌からとつたのである。

「色移り香失せて」は都の繁榮を咲く花の美しさにたとへたるより言つた言葉である。

「何の山、何の川一木一草」。非常に纖細な人の心の動きを表現した言葉である。一山のたゝずまひ、一河の流れ、それは幾千年變らぬ國土である國土への愛、これも亦今も昔も變らぬ人の心情である。

「歴史あり」そしてその國土のすべてが、人世の變遷興亡のあとである。

「古歌あり」そして又そこに今も昔も變らぬ人の心情があるのである。この時代の歌を二三首かゝげて見れば、

もゝしきの大宮人は暇あれや、梅をかざしてこゝにつどへる（萬、卷十、一八八三）

宮廷人が梅花を挿頭して悠々と春光のもとに遊んでゐる有樣である。本文百六頁十行目、「そのかみ大宮人の梅をかざし紅葉をかざして……」に參照されたい。

もゝしきの大宮人の蘿らけるしだり柳は見れど飽かぬかも（萬、卷十、一八五二）。

これも又宮廷人の遊樂を敍してゐる。

梅柳過ぐらく惜しみ佐保の內に遊びしことを宮もとゞろに（萬、卷六、九四九）。

梅櫻の好時節の過ぎるのを惜しみ、佐保（本文百五頁六行目參照）に遊んだ事を叱られて授刀寮に禁足された大宮人たちが、退屈しのぎに作つた歌。

秋されば春日の山の黃葉見る寧樂の京師の荒るらく惜しも（萬、卷八、一六〇四）。

大原今城がさしも榮えた奈良も天平十二年に都が山城の久邇に遷された時の秋、荒廢した舊都を惜しんで詠んだもの。

高圓の野の上の宮は荒れにけり、立たしし君の御代遠ぞけば（萬、卷二十、四五〇六）。

大伴家持の作、先帝聖武帝を慕ひまゐらせて詠んだ歌、奈良の盛時も聖武帝の御代が絶頂であつた。

時雨の雨、間なくし降れば三笠山木末あまねく色づきにけり（萬、卷八、一五五三）。

大伴稻公の作、以上すべて奈良の都を詠んだものばかりをあげたのである。

「低回去る能はざらしむ」千餘年の昔の名殘を今に見てうたゝ今昔の感に堪へず、深い追憶に入るのである。

「春は若草山の芝……」春、若草山、三月堂、二月堂と名詞の春らしさと共に綠、かすみ、夢等の言葉の響がいかにも懷古的である。「見どころあり」この言葉は手向山の紅葉にだけかゝつた言葉ではなく、春の若草山、三月堂、二月堂のかすみ、秋は春日の社の神さびた樣の、今も匂ふ手向山の鮮明な紅葉との對照と、全部のものにかゝつてゐる。「哀音しきりに人のねむりをさます」色移り香失せて年久しい奈良には荒廢は感じないまでも幽玄尙古の情緒に哀調のかすかに伴ふものがある。鹿の鳴く哀音こそ最も相應しい風情なのである。

「古の奈良の都」古の奈良は奈良の京、又は平城、寧樂と書いた。大和の國の最北部の平原で、今日の奈良市の西方である。こゝに都會は發達し、文化は向上して、いはゆる天平時代の盛時を現出するに至つた。

「大宮人の梅をかざし……」大宮人とは宮廷の人々で、優婉な姿の男女が霞立つ春の陽かげに、清澄な秋の麗日のもとに、花、もみぢをかざしてゐる有樣はまことに文雅な至りである。

「一場の夢」榮耀榮華も時過ぎれば、うたかたのはかなくも消え失せた夢にも似て榮枯盛衰の世の姿を思ふのである。

## 三　朗讀

### 本文



ダイ　ジューロク。ナラ

・シチダイ　・シチジュー　ヨネンノ　テートトシテ。サク

### 朗讀上の注意



ハナノ　ニオーガ　・ゴトシト　タタエシ　ナラノ　ミヤコモ。イロ　ウツリ　カ　ウセテ　トシ　スデニ　ヒサシ。。

・シカレドモ　カスガノ　ヤシロワ。アケノ　カイロー　ヤマノ　ミドリニ　ハエテ　シンゲン　オノズカラ　・ヒトノ

エリオ　タダサシメ。トーダイジノ　コンドーワ　テンクー　タカク　ソビエテ。ゴジョー　サンジャクノ　ダイブツ。イッセン　ニヒャクネンノ　オモカゲオ　ノコセリ。。

コーフクジワ　ガラン　ナカバ　スタレタレド。ナオ　サンジュー　ゴジューノ　トー。サルサワノ　イケミズニ

カゲオ　ウツシテ　ナントノ　ピカンタリ。。シャジノ　ソーレーワ　シバラク　オキ。ナンノ　ヤマ。ナンノ　カワ。

イチモク　イッソーニ　イタルマデ。レキシ　アリ　コカ

アリ　ヒトオシテ　・テーカイ　サル　アタワザラシム。。

ハルワ　ワカクサヤマノ　シバ　ミドリニ　モエタチ。

〔參考〕
サク（咲）
サク（裂・搗・策）
サク（作）

○「山の緣」を別々にいふ時、アクセントはヤマノ　ミドリ

○「美觀」を單獨にいふ時、アクセントはビカンとなる。